福澤先生著

修業立志編

全

時事新報社發行

修業立志編緒言

小は一身一家の事より、大は經世立國の要に至るまで、其關係の廣くして大なるものを云へば、少年子弟の教育を以て第一に推さゞるを得ず。就中我日本の如き開國進取の外餘念を雜へざる國情に於ては、唯新教育に育せられたる新人物の必要あるのみ。我慶應義塾は此必要を思ひ、天下同志の士と共に、文明の學を講じ、進歩の理を明にし、創立以來四十年一日の如く、曾て方針を變じたることなき其中に、社會は年一年文明の佳境に進むと共に、塾も亦次第に盛大を致し、學生の入社前後

合せて一萬餘人、卒業生を出すこと二千餘名の多きに至れり。扨又本塾の教育は教場の定課以外に演說法を利用するの慣行にして、其起元は明治八年他に率先して初めて演說館なるものを新築し、爾來三田演說會と稱して、毎月二回塾生を集め、老生親から出席して一場の演說を試ること殆んど常例の如くなりしが、其演說は唯隨時の思付を語るまでのことにして、何年何月何事を演べしや、夫れさへ記憶に存したるものなし。然るに今回學事の改良を計るに就き、日本近時の文躰にて綴りたる讀本の必要を感したれども、世間在來の出版書中に適當なるもの少なし。依て老生が是れまで右演說館に演說したる其筆記、又は時事新報紙上に掲載したる演說等、凡そ少年子弟の爲めにしたる文章を集めて一部の讀本と爲し、假りに之を修業立志編と題して印刷に附したり。書中の立言前後相互に連絡するに非ざれども、其趣旨は則ち學問修業の目的を明にして、人生の居家處世法を示さんとするの微意に外ならざれば、塾の内外を問はず、凡そ天下の後進生が此書を讀で、近時の文字を知ると同時に、修業の要を解することもあらんには幸甚のみ。

明治三十一年三月二日　福澤諭吉誌

四

修業立志篇目次

獨立の精神……一頁
獨立の大義を忘るゝ勿れ……九
須く他人を助けて獨立せしむべし……一五
一身獨立して主義議論の獨立を見る可し……二〇
金錢は獨立の基本なり……二四
慶應義塾の懷舊談……三一
銅像開被に就て……三九
人間萬事兒戲の如し……四八
小心翼々以て大功を期すべし……五四
恃むべきは唯自家の才力あるのみ……六五

學問の要は實學にあり……七一
先づ鄙事に多能なるべし……八一
成學即ち實業家の説……八六
後進生に望む……九四
物理學の必要……一〇一
須く政論の上戸となるべし……一〇八
人生の樂事……一一一
富豪の處世法……一二〇
文明教育論……一三一
人生の快樂何れの邊に在りや……一三八
活潑なる樂を樂む可し……一四四
士流の本分を忘る可らず……一四七

禮儀作法は忽にす可らず……一五二
德行論……一五五
私德固くして樂事多し……一六二
德教は目より入りて耳より入らず……一六七
德風を正に歸せしむるの法は其實例を示すに在り……一七二
忠孝論……一七八
先進と後進……一八六
新舊兩主義……一九〇
無學の弊恐る可し……一九五
實業家の學術思想……二〇二
國は唯前進す可きのみ……二〇七
社會の人心は其向ふ所に赴く……二一三

父母は唯其病是れ憂ふ……二一九
衞生の要は消化の如何にあり……二二四
壽命の大小……二三〇
衛生の進歩……二三四
國民の體格と配偶の撰擇……二三九
體育の目的を忘るゝ勿れ……二四六
心養……二四九
英國の學風……二五三

修業立志篇目次終

修業立志篇

慶應義塾編纂

獨立の精神

人間は孤居獨棲の動物にあらず、互に相依り相輔くるの性あるを以て、人生社會の交際なき能はず、即ち世渡りの道にして之を處世の法と云ふ。人間處生の法、一にして足らずと雖も、能く己れの地位を保ち、人の怒りを犯さずして巧みに世を渡るを以てその法を得たるものとす。此一點より見るときは、人間處世の法は唯その時の社會に行はるゝ風俗氣習に雷同し、苟めにも奇異の擧動をなし、他の耳目を驚かさゞるを以て其極意を得たるものとなすことならんなれども、又一方より見るとき

は、人間の腦髓中には自から一個獨立の精神あり、此精神は人世智德の發達と共に發達するものにて、高尚なる知字解理の士人中に最もその盛なるを見るべし。蓋し獨立の精神なるものは世間流俗の顰に倣はず、別に自ら一局面を開かんとするものにして、其極度を云へば、世情に遠かり、人生に迂なるの譏なきにあらざれども、若しも社會に一個獨立の精神存せずして、萬事流俗の流行に任せたらば、人生は全く社會の俗塵に俗了せられ、世に學者學問の獨立を見る能はざるのみならず、之を大にしては一國の獨立も亦覺束なきことならん、何となれば學者學問の獨立と云ひ、又一國の獨立と云ひ、畢竟人々獨立の精神の發達したるものに外ならざればなり。故に一國文明の爲め、又その獨立の爲めには、社會に獨立の精神を養成すること必要にして、即ち今の人間社會には處世の法と獨立の精神と共に兩立して互にその短處を補ふこそ最も望ましき事なれども、世事はとかく注文の如くならずして、實際に於て所謂文明流の交際流行する處には、社交の勢力獨立の精神を抑へて其働を逞ふせしめざるの弊は、世界東西の免れざる所にして、西洋諸國中にても現に佛國の如きは社交の力最も盛にして、上流の交際社界に於て獨立創造など云ふとは野鄙、驕慢もしくは粗暴等と同意味のものとなして、痛く之を嫌ひ、只管世間普通の流行を貴ぶの風行はるゝよしにて、此流行が佛國の將來に如何なる影響を及ぼす可きやとは、方今同國學者中にて頻りに憂慮する所なりと云ふ。扨顧みて日本社會の有樣は如何と云ふに、往時封建の時代には各藩の制度何れも均一にして加ふるに武斷の政略を以てし、人々個々獨立の精神は至て微弱なるが如くなりしも、實際は然らずして、武斷壓制の威力は其及ぶ所唯社會の表面に止まり、當時士流の間に行はれたる武士道の精神は自ら社會の間に一

種高尚の氣象を養成し、世外に秀でゝ自ら適するもの、又は終身處士を以て王侯に驕るもの、三百年間その人に乏しからず、今日文明流の眼を以て之を見れば、其粗野の狀は笑ふべきが如くなるも、其中自ら獨立心の尊ぶ可きものありしを見るべし。維新以來西洋文明の流行するに從ひ、社會の面目を一新して、只管模倣改良に鋭意なるの餘り、社交の趣も亦自ら一種の風を生じ、獨立の精神は却て其間に退却したるやの感なきに非ず。今暫く學問社會の例に就て之を言はんに、學者なるものは社會に在て最も其獨立を要するの地位にあるべき筈なるに、今日の實際に於ては然らずして、却て其反對の例を見ること多きが如し。凡そ日本國中に名を知られたる學者にして、能く自立の生計を營む者とては甚だ稀にして、何々先生も何々大人も其衣食の由て來る所を尋ぬれば、官途の俸給ならざるはなし、啻に衣食の獨立なきのみならず、其人の名も學識を以て知らるゝより、寧ろ爵位官等の光明に依賴して耀くものこそ多數なる可し。或は數年間海外に留學卒業したる學士輩が歸朝早々は、只管日本の學問社會を愍笑し、自由獨立の講釋など喋々して頗る痛快の論を發し、以て人を驚かすとなきにあらざれども、少しく故國の風に染むれば、何時しか其說を變じて、尋常一樣の俗流に混じ、小官を卑しとせず、薄給を少しとせず、伯夷忽ち裝を改めて柳下惠となり、自ら官府の門に屈して、却て世上に向て得々たる者あり。又何々社中何々協會など稱する學術上の結社にも、常に貴族を戴き以て總裁若しくは社長と仰ぐも、近來の流行なるが如し。又世間に數限りもなき著書譯書の類を見るに、何公の序文、何爵の題字などを冠するもの甚だ多くして、而して其何公何爵は必ずしも學問の事に緣ある人物とも思はれず、本來學者を以て自ら居る著譯者は、此序文題字を拜領して、自身の榮とするか、但

しは賣書博利の手段に利用するものか、何れにしても自ら欺くに非ざれば、世人を瞞着するものにして、獨立の學者には聊か不似合なるが如し。其他時々社會に跋扈する流行說など、其始め一人の有力者がこれを首唱すれば、萬口忽ち之に和し、學者社會に反對の說あるを聞かず、或は之を評して、日本人の性質は流行に敏にして開進に易しとて、竊に誇る者なきに非ざれども、鄙見を以てすれば、獨立心に乏しき者なりと云はざるを得ず。試に見る可し、三五年前より社會改良の論流行すれば、半白の故老先生までも、少年子女の仲間入りして舞蹈の誓古を奬勵し、道德復古の說世に出づれば、少小西洋流の主義に敎育されたる學者輩が、世上の俗流に雷同して、時としては儒敎古學流の事を唱ふるなど、如何に日本人が流行好きとは云へ、之を其本心とは見る可らず。畢竟この輩は社交の風潮に漂流し、世渡りの楫を操るに汲々たる者にして、漢學者流

の口氣を以て之を責め、人間に羞恥の心なき者と云ふも、過酷にはあらざる可し。世間或は獨立の精神を以て今の文明社會に不要なりとするものあり、其言に曰く、一個獨立の人果して何事をなすか、唯奇癖の名を世上に賣りて、自ら快しとするに過ぎず、今日獨立云々の迂說を談ずるものは、古儒者流の陳套を襲ふものなり」などゝ自ら其醜迹を蔽はんとする者なきにあらず。蓋し古來獨立の士人にして世俗に容られず、又自ら容らるゝことを屑しとせずして塵外に峭立し、社交と相疎隔する者あり、俗眼より之を見るときは、如何にも迂拙にして、世に益なきが如くなれども、世俗の流行、時に情に任せて奔放止まる所を知らず、世を擧て將さに不測の淵に陷らんとする其時に、傍より大聲疾呼、他の危險を止むるものは、社交處世の人に在らずして、常に獨立の士人に在り、且つ又一世の人皆な流行に醉ふも、其本心未だ全く痲痹せずして、正に半醉

半醒の間に當り、仰で清節孤幹汚塵に汚れず、流俗に流れず、亭々直立する者あるを見れば、心に羞て自ら其本に反るものなきにあらず、即ち是れ獨立の士人が能く社會の腐敗を防ぎ、又一世の氣風を維持する所以のものにして、其例古今の史上に少なからず、社會現在の有樣を保守して其退却を防ぐに於ても、獨立の精神の必要なるを見るべし、何ぞ況や更に進んで國の文明獨立を謀らんとするに於ておや、益々その精神の發達を期せざるべからず。斯く云へばとて、我輩は今代の士人に向て、孤立狷介獨り塵外に逍遙して世と相遠かることを勸告せんにはあらず、苟くも其心を以てすれば、濁世の中に和して流れず、以て獨立男兒の事を行ふ可し、我輩は特に此一義を以て世の知字解理の士人に望む者なり。

獨立の大義を忘るゝ勿れ

今回諸君の卒業は誠に目出度き次第にして、自今學塾を去れば、自から人事に當りて、居家處世の務に忙しきことならん、依て送別として一言を餞せんに、老生は塾生に向て毎度經濟の要を說きたるとあれども、經濟論の言は動もすれば錢の事に亘りて學者の耳に面白からざるのみか、不幸にして其意味を誤解するときは、却て大に方向を誤ることもある可ければ、今日は經濟を後にして、心術の議論より始めて、遂に經濟の談に入る可し。凡そ人世に大切なるは獨立の一義にして、人の人たる所以は唯この一義に在るのみ、榮辱の分るゝ所も、君子小人の異なる所も畢竟その人の獨立如何に存することにして、一人一家より一國に至るまで、苟も獨立せざるものは、人にして人に非ず、家にして家に非ずと云

ふも可なり。此道理は諸君に於ても既に承知のことなれば、今更喋々するにも及ばずとして、扨獨立の一義の至大至重なること斯の如くなれば、之を身に行ふは人世至難の業なりと思ふ可けれども、實際に於ては決して然らず、手近く今日の人事に就て其要を說かんに、第一知見を廣くする事要用なり。限りある人智なれば、他人に諮詢して利益を求るは當然の事なり、又人間相互の務なれども、人生の行路萬般の事に當り、常に思案に窮して人に依賴し、自身は有れども無きに等しく、唯他人の言ふがまゝに任せて身を進退するは、無學者流の事にして、其趣は家に一錢の貯へなくして他の惠與に食ふ者に異ならず。故に獨立の義を全ふせんとするには、人間普通の知識見聞を要することにして、今諸君は多年本塾に居り、今後戸外の人事に當りても、不慣なる事柄に就て人に諮詢するは固より當然なれども、徹頭徹尾思案にあぐんで、他人の智惠の

みを借用するの要用なきは、老生の信じて疑はざる所なれば、獨立の要素既に備はる者と云ふ可し。第二は有形の物に就て他人の助力を仰がざることなり。人間に貧富の幸不幸あり、隣家の富有に引替へて、我家の貧なるあり、誠に堪へ難き次第なれども、是れは文明社會組織の不完全なるが爲めに、運不運の分れたるとにして、俄に人力を以て醫す可きにあらず、況んや其隣人を羨むに於てをや、全く無益の沙汰なれば、我れは我道を行き、額に汗して自力に食み、貧なれば貧に居り、幸にして富を致せば、又その富に處し、道理外の財物は一毫も與へず、一毫も取らずして身を終る可きのみ。錯雜極まる社會の中には節を屈して利を取るの道もなきにあらずと雖も、其節を屈するとは自身を無きものにして他人に依賴するの意味なれば、我一身を人非人の地に下だして利を求むる者なり。之を形容すれば、一塊の黃金と我身躰とを兩々相並べ、身を殺し

て黄金を取るものゝ如し、如何となれば精神の獨立を失ふて人非人の位に墮落したる者は、生きて動物的の活動を演ずるも、人世の靈は既に斷絶したる者なればなり。左れば諸君は久しく本塾の氣風に養はれて、獨立の義を知る者なれば、如何なる急に迫るも、節を屈して自から利するの事を爲さゞるは無論、苟も他人の力に依ることはなかる可し。平易に云へば、返濟の目的なき金を借用せず、謂れなく人に助力を求めず、窮して哀を乞はず、迷ふて私に陷らず、況んや一身の快樂を貪らんが爲めに他人を煩はすが如きに於てをや、老生は飽くまでも其絶無を保證して自から安心するものなり。

獨立の義は至大至重なれども、之を平易に解釋すれば、其事は甚だ難からずして、諸君の身には既に所得の要素あり、左れば今後實業社會に入るとして、近來は學者の數も次第に增殖して世に珍らしからざれば、地位を得るは極めて難きことゝ豫期せざる可らず、即ち後進生の行路艱難なりと雖も、又一方より見れば、世に爲す可き事業は甚だ少なからずして、實業家は常に無人に苦しみ、眼前に利益の見込ある事にても、其事に當らしむ可き人物なきが爲めに看す〳〵利を空ふするの談は、毎度吾々の聞く所にして、實業社會の一難事とも云ふ可き程の次第なれば、苟も諸君にして人生の艱難を知ると共に、平生所得の知見を實地に施して活潑に働き、他人の耳目の達せざる所に深切を盡すときは、立身の道綽々として餘地あり、古人の言に陰德必ず陽報ありと云ふ、人の知らざる所に勞して深切なるは、即ち陰の働なれば、必ず亦陽報なきを得ず。職業の種類を問ふ勿れ、報酬の厚薄を論ずる勿れ、苟も我身に叶ふ仕事なれば、進取一方と決斷して左右を顧ざる其中に、唯一點の要は如何なる賤業を執るも、獨立の大義を忘れずして君子の風を存し、大切なる塲

合に臨んで節を屈せざるに在るのみ、即ち學者士人の凡俗に異にして隨て人に恃まれて立身の容易なる所以なり。老生が常に云ふ、今の後進生にして立身の意あらば、其心術を元祿武士にして、其働きを小役人素町人にす可しとは、即ち此邊の意味なり、滿堂の諸君世の中に好地位なきを憂る勿れ。

須く他人を助けて獨立せしむべし

今の後進生が口を開けば即ち實業云々を唱へざるはなし、今度學校を卒業したれば向後は實業の一方に勉む可しと云ひ、久しく政府に奉職したれども之を辭して更に實業に志すと云ひ、政黨を脱して實業を求め、新聞記者を止めて實業に就くと云ふが如き、誠に珍らしからぬ談にして、老生の常に贊成する所なり。蓋し實とは虚に對したる文字にして、彼の學問の修業なり、政府の勤務なり、又は政黨の奔走、新聞の記事論説の如き、何れも直に實物を生ずるものにあらざれば、之に對して實業と云へば、商賣工業等有形の事業を指して虚實を區別したることなる可し、實業の心掛け甚だ妙なりと雖も、今老生が諸君に向て言はんとする所は、學生の實業必ずしも卒業の後を待たず、就學中その業を實にす可きもの甚だ多きの一事なり。諸君は慶應義塾に居て既に何事を學んで今方に何事を學ぶや、思ふに其學ぶ所のもの一として身を處するの法に適切ならざるものなかる可し、數學を學べば、物の數を知る、物の數を知れば、他を損じて自から益するの非を知る可し、既に其非を知れば學友相互に金を貸借するは非なり、況んや之を借りて返さゞるに於てをや、況んや品物を買ふて代價を拂はざるに於てをや、其非なるは人に聞かずして自から發明せざるを得ず、生理學を學べば、人身の構造及び諸

機關の働を知る可し、之を知れば、飲食の用法、身躰の運動法にも心付き、自から注意して自から爲めにするの實益なきを得ず。凡そ是等を計ふれば枚擧に遑あらず、即ち就學中の實業と云ふ可きものなり、就中獨立自由の一義は君等が讀書中にも其義を解し、先輩の言を聞ても之を悟り、都て塾中の空氣に呼吸して自然に心に得たる所のものある可し、是れ學生の勤學中にも日夜實行す可き事にして、必ずしも後年を待つを要せず。抑も獨立自由とは他人の厄介にならず、又他人に依賴せずして一身を處し、我が思ふまゝに此世を渡るの意なれば、學塾に居て修業する其間にも、言行共に自から事の宜きを考へて、人に交り、我心に思はぬとならば、如何に他人に誘導勸告せらるゝも、拒げて之に雷同することなく、其要は自分の本心に背かざるに在るのみ。例へば學生の常に云ふ、彼の附合云々の如き、朋友相共に何か遊戯快樂を共にすることならば、附合も然る可し、其附合の間に自から友情を和し、智見を交換して利する所ある可しと雖も、學生の身分にあるまじき事を企てゝ、同盟などを謀る者あれば、心に其事の非を知りながら、是れも同學の交際なればとて、强ひて之に從ふの場合なきにあらず、尙ほ甚だしきは都下惡書生の風を學んで、惰弱鄙劣の戯を戯れながら、附合の爲め止むを得ずと稱して罪を遁れんとするが如き、無氣力も亦甚だしきものにして、獨立自由なる我慶應義塾中に斯る賤丈夫は一人もなかる可しと、老生の敢て自から信ずる所なり。左れば獨立自由の主義は諸君が就學中に實行の機會あるのみならず、日々夜々その機會ならざるはなし。故に老生は先づ之を賛成奬勵して尙ほ塾を去りたる後の心掛けを云はんに、今の世間の普通に獨立自由の文字を解釋すれば、他を妨げずして獨り身を立て、他を妨げずして自から思ふ所を行ふの義にして、畢竟するに人は人

たり、我れは我れたり、苟も他の妨害を爲さゞれば我事足ると云ふものゝ如し、一通りは是れにても差支なきが如くなれども、老生の見る所を以てすれば、尙ほ之に滿足するを得ず。凡そ此社會に生々する人民を三等に分ち、智惠もなく、財産もなくして自力に生活すると能はず、常に人に依賴して人の厄介と爲る者を第一として、第二等には人物左まで愚なるに非ず、家も亦赤貧に非ず、能く自から自身を支へて一家を保つと雖も、唯自力自立に止まりて、人の爲めに益するとなき者あり、第三は既に自立の境界を超へて、其人の智惠も財産も居家の要用に餘るが故に、其餘力を以て人の爲めにし、愚者には智惠を貸し、貧者には財を貸し、又時としては身を勞して人の爲めに働き、財を散じて人を惠み、以て人間社會の禍根たる貧富賢愚の不平均を力の及ぶ丈けに和らげて、次第に幸福の區域を廣くする者、これを最上等の種族とす、即ち我身獨りの獨立自由を以て足れりとせず、他人を助けて獨立自由の領分に入らしめんことを勉る者なり、例へば己れに知ることあれば、懇に人に敎へて其精神の發達を導き、家に餘財ありて事業を起し、又は直に金を貸せばとて自利々他の主義に基き、他人を利して自分も共に利するの方針を取るが如き、都て上流種族の義務と云ふも可なり、如何となれば世界は單に智者富者の專有に非ずして、智愚貧富雜居共同の世界なればなり。以上の立言果して道理に違はずとして、滿堂の學生諸君は日本國中に於て如何なる種族に屬する者と自から品評するや、全國の人口四千萬中の下等なるか、中等なるか、將た上等なるか、老生の鑒定にては、其上等中の最上等なりと斷じて諸君も必ず自から許すことならん、既に最上等の種族とあれば、自から之に伴ふ所の義務あるも亦言はずして明なる可し。老生が獨立自由の字義を解すること大凡そ斯の如し。尙ほ此義に

就ては追々諸君と共に語ることある可し。

一身獨立して主義議論の獨立を見る可し

國會議場の言論、又は新聞紙の論説は、民論の最も粹なるものにして、直接間接に全國民の政治思想を代表するものなれども、其言論々説動もすれば社會に重きを成す能はずして、識者の冷笑を免かれざるもの多きは何ぞや、自から其原因なきを得ず、即ち今の名論卓説にして世に重んぜられざるは、其論旨の如何に在らずして、之を唱ふる其人の如何に由るものなりと、我輩の竊に信ずる所なり。凡そ志士論客として專ら政治の論説に從事する者は、先づ一身獨立の實に着目し、人生に急なる生活の計を得て、社會の侮を免かるゝの覺悟なかる可らず。一身の獨立なければ、主義の獨立もある可らず、主義議論に獨立なくして、社會に重きを成すものは、我輩の未だ曾て聞かざる所なり。固より天下の士人中には着實の人物なきに非ずと雖も、之を平均して其全般を見れば、議論の空に馳せて自立自活の計に疎なるもの少なしとせず、即ち是封建士風の遺傳にして、強ち其本人を咎む可らざるに似たれども、弊害は即ち弊害にして、現に世を害すること大なりとあれば、今日となりては其の人々に責を歸して辭することを能はざる所のものなり。例へば近來社會に不祥の風聞少なからず、既に前期の國會にて豫算案を議決したる事に就ても、政府と議院との間に内密に財物を授受したりとの説を唱ふるものありしが、近來又銀行の事に關しても、府下の新聞社中に賄賂云々の説を傳ふるものあり、我輩は固より他の讒に傲ふて、是等の内密事を喋々するものに非ず、又實際に其事なきを信ずるものなれども、去るにても斯る不祥の醜聞をして容易に其醜を放たしめ、士人の德身を犯し

去るに一任して世間に甚だ之を怪しむ者なきは、決して尋常の事態に非ず。蓋し其人々の多數は何れも清淨潔白なる人物に相違なかる可しと雖も、一身の計に疎にして獨立の覺束なきは彼輩の情態なるが故に、世人の之を見ることは、其人々の自から信じ、自から任ずる所に異なるを如何せん。少しく鄙近の例なれども、町村の組合中に盜難ありて其證跡曖昧なるとき、嫌疑の歸する所は、先づ其組合中の貧困にして平生評判の宜しからざる者に在るが如し。畢竟斯る風説の世間に流傳して人の之を怪しまざるは、即ち其人々の平生に信用なきを證するものにして、本はと云へば一身の獨立なきが爲めなりと云はざるを得ず。我輩は勿論今日に於て我士風の敗頽斯くまでに甚しきを信ずること能はざるものなれども、兎に角に獨立の計に乏しきは事實に疑なきが故に、若しも此有樣にして改むる所なければ、今後社會の風潮次第に急なるに隨ひ、其風儀も亦次第に下流に走りて愈々不躰裁を演ずるは勢に於て免る可らず、其時に至り、若しも社會に卑劣なる野心の政治家又は金滿家ありて、大に金を散じて内密に奔走依托する所あらんには、或は一世の言論々説を左右するが如き奇態なしとも云ふ可らず、我輩の今より恐るゝ所なり。左れば眞成なる論説を見んとするには、之を唱ふる其人々に一身獨立の覺悟ありて大切にして、若しも是れなきに於ては、如何なる名論卓説と雖も、又其心事は假令へ公明正大なりと雖も、到底社會に重きを成すこと能はざるのみならず、時としては世間の嫌疑を來して自から迷惑すること少なからざる可し。故に政治家なり、新聞記者なり、言論々説に從事するものは、何は兎もあれ先づ其の身の獨立を謀ること第一にして、一身茲に獨立して始めて社會に重きを成す可きなり。

金錢は獨立の基本なり

文明開化進歩すと云ふと雖も、日本は尚ほ舊時の士族國にして、經濟を云ふ者少なし、稀に之を言ふも、其經濟は天下の經濟論にして、一身一家の生計を講ずる者とては、殆んど絶無と云ふも可なり。之を要するに、今の文明流の人は其政治の思想は兎も角も、經濟の思想に至りては、極めて粗漏にして、共に一身一家の生計を語るに足らず、而して思想の粗なる者は大事に當りても往々活潑敢斷に失するの弊を免かれず、彼の士族輩にして商賣の實業を營む者を見るに、第一その身の生計分外に高くして、錢を輕んずること甚だしく、内の衣食住より外の交際に至るまで、其豪奢無法なるは恰も錢に酩酊して前後を忘却したりと評して可なる者あり。又その商賣を營むにも、擧動は活潑なれども、用心は緻密ならず、其正直にして慈悲深く、一向一心に衆生濟度に志すこと如來の如き塲合もあれども、此如來が時として憤を發するときは、斷じて行ふて左右を顧みざること天魔鬼神の如し。元來商賣の性質は至極遲々たるものにして、殊に殖産の尚ほ未だ進まざる日本などに於ては、唯謹で細々積むの一法あるのみなるに、士族の流が錢を賤しむの遺傳を忘れずして、今は變じて豪奢と爲り、其武家の正直仁義は商賣上に如來の慈悲を施し、之を施して事實にハタト差支るときは、舊時の武勇冒險を理財上に演じ、大に失敗して倒るゝ者あれば、大に奮發して之を倒す者あり、倒るゝ者も倒す者も、共に勇氣の沙汰にして、商賣の本色たる緻密の注意とては曾て實際に行はるゝを見ず、是等の弊事を枚擧して論結するは、一席の演説に盡す可きに非らざれば姑く擱き、之を要するに、我日本國の經濟社會に士族風の生存する限りは、其運動荒々しくして、到底國

運は覺束なしと云ふの外なし。左れば慶應義塾の學生も學成り塾を去れば、家に居り世に處するの務は免かる可らず、其時に當り、今の世間の荒々しき風潮に浮沈して、共に流行に從はんと欲するか、身の爲め家の爲めに運命危しと豫言せざるを得ず。學問脩業の人に向て錢の事を語るは所謂世間の風潮に戻りて穩ならずと雖も、義塾は義塾の內にして、老生と諸君と相對して內話することなれば、世論の如何に拘はらず、眞面目を申さんに、凡そ人生に最も大切にして人の人たる所以は、獨立の一主義あるのみ、而して此獨立の義を全ふして世に處せんとするに要する所のもの少なからずと雖も、既に社會の凡俗と雜居する限りは、何は扨置き先づ第一番に生計の錢なかる可らず、一身の衣食住を安くするも錢なり、父母妻子を養ふも錢なり、家內團欒の快樂も錢なくしては叶はず、戸外朋友の交際も錢に由て始めて全ふす可し、慈善を施すも錢

なり、不義理を免かるゝも錢なり、尙ほ此上にも學者たるものが苟も山に隱遁せずして俗世界に居り、一身を靜にして精神の自由を妨げず、自由に思ひ、自由に言ひ、又自由に行ひ、人をも咎めず、天をも怨まず、眼中人を見ずして獨り我心の高尙優美を養ひ、物外に悠々として自然の樂を樂まんとするには、錢の外に其方便ある可らず、取りも直さず錢は是れ人生獨立の母にして、其貴きこと斯の如くなれば、苟も諸君にして獨立の重んず可きを許すに於ては、錢の貴重なる所以を知らざる可らず、既に之を知るときは、有る錢を大切にして、又隨て無き錢を作るの工風なかる可らず。諸君は今本塾に就學し、未だ錢を作るの境遇に非ずして、却て錢を費すの時節なれども、之を費すに當りても、常に其貴重なるを忘れずして、一錢金の得失にも心を用ること學者の本分なれ。至當の理由なき限りは、一錢たりとも人に貸し又與ふ可らず、況んや人に借り人に

貰ふに於てをや、獨立の男子に於て此上もなき耻辱なりと知る可し。然るに滔々たる天下の流風は書生の社會にまで侵入して、其衣食住の程度を上進せしめ、此衣服は見苦し、其飲食は旨からずと云ひ、餘儀なき交際の爲めと言ひ、差向きの要用と稱して、三五圓の金をば奇麗に消費して、時としては朋友相互に惠與することもありながら、却て三五十圓の金は他人に借りて之を返さず、即ち人に不義理を犯して自家の奢侈に供し、又朋友の爲めにするものあり。粗衣粗食は身に不愉快にして、外見も宜しからず、交際を殺風景にして錢を愛しむは鄙劣なるに似たれども、人に金を借用して返さゞるの鄙劣破廉耻に比して孰れか大小輕重なるや。凡そ社會に獨立の義を傷るもの多しと雖も、借用金を返濟せざるの不義理より甚だしきはなかる可し、如何となれば金は恰も人の勞力の塊なるが故に、謂れなく他人の金を取て身に奉ずるは、人を勞して

自から逸し、我一身を擧げて他に托する者なればなり。元來他人に金を借用するは、他日之を返すの目的あるが故なり、既に其目的あれば必ずしも今日借用するに及ばず、目的の達する日を待て自分の金を用るに若かず、或は其間に多少の不自由ある可しと雖も、之を忍ばざるを得ず、自身の不自由の爲めに他人を煩はすの理由ある可らざればなり。此事難きに似て決して難からず、近く老生の身に實驗せし所なり。老生が少小遊學の時は、同學中殆んど比類少なき貧書生なりしかども、曾て人に金を借用したることなし、唯僅ばかりの學資を大事にして、饑寒を免かれ、謹で身の分限を守るのみなりき。少小の習慣恰も性を爲し、爾來家に居て妻子もあれども、活潑なる商賣などしたることなければ、金融の必要もなく、又隨て借金するにも及ばず、一家の生計至極簡單にして、數十年の久しき一日の如くなれば、交際の新舊遠近に論なく、凡そ日本國中

如何なる種族の人にても、曾て諭吉に金を貸し、又は諭吉記名の借用證書などを目擊したる者とては一人もなき筈なりとて敢て明言して憚らざる所なり。錢あれば分に應じて費し、無ければ費さずと覺悟するまでにして、家の貧富に拘はらず、少しく勇氣さへあれば、學者の身に取りて左まで苦しき事にあらず。故に老生は敢て諸君に向て難きを責むるに非ず、唯老生が遊學中の故事に倣はんことを勸告するのみ。固より個樣なる經濟法は學者書生の境遇には適するも、餘り無造作にして此錯雜なる人間社會一般の實際に行はる可きに非ず、唯今日諸君の身の爲めに、今日の警として內話したるまでのことなれども、夫れは扨置き、學塾を去て廣く金錢世界の事相を通覽すれば、人をして不德不義を犯さしめ、家族の不和を釀し、朋友の交際を破り、君子をして小人ならしめ、勇者をして怯ならしめ、甚だしきは健康の人をして病を得せしめて遂に生命を失ふに至るも、錢の有無に由來するもの多し。畢竟その然る所以は、我士族流の人々が錢を賤しむの性質を遺傳して、其用法を愼まず、借るにも貸すにも、與ふるにも取るにも、曾て緻密なる思想なくして常に之を濫用し、少年の時より早く既に其性を成して、老大に至るも之を悟らず、遂に挽回す可らざるの不幸に沈むものなり。諸君は今日正に少壯の盛時なり、其未だ性を成さゞるに及び、錢の貴きを了解して其用法を愼まんこと老生の飽くまでも忠告する所なり。斯く云へばとて、老生は彼の守錢奴の殘忍冷血にして無情なるものを學べと勸るに非ず、此事に就ては別に大に論ず可きものあり、言長ければ之を他日に讓る。

慶應義塾の懷舊談

老生の演べんとする所は、慶應義塾の由來に就き、言少しく自負に似て

俗に云ふ手前味噌の嫌なきに非ざれども、事實は座中諸君の記憶に存する通り、聊も違ふとなく、且つ今夕は内輪の會合にして、他に憚る所もあらざれば、過ぎし昔の物語も吾々には自から一入の興味あるべし。抑も人間世界は苦中樂あり、今る去ると三十年我黨の士が府下鐵鉋洲の與平藩邸を去り、芝新錢座に移り、匆々一小塾舍を經營して洋學に從事したる其時は、王政維新の戰爭最中、天下復た文を語る者なし、況んや洋學に於てをや、時論は攘夷の頂上に達し、洋學者の如きは所謂惡魔外道の一種にして、世間に容れられざるのみか、又隨て其惡む所と爲り、時としては身邊の危險さへ恐ろしき程の次第なりしかども、人生の性質は至極剛情なるものにて、世人が概して自分等を敵視すれば其敵意の盛なる程に、此方も亦竊に之に敵するの心を生じて公然力を以てするは固より叶はざる所なれども、心の底には他の無識無謀を冷笑すると共に、故さらに勉めて其言はざる所を言ひ、其好まざる所を行ひ、一切の言行を世論の反對に差向け、意氣劇烈些少も假す所なく、滿天下を敵にするの覺悟を以て自から居たるこそ一時の奇なれ。蓋し我黨は夙に西洋文明の眞實無妄なるを知り、人間の居家處世より立國の大事に至るまで、文明の大義を捨てゝ他に據る可きものなきを信じて、世の俗論古論保守論を悅ばざることなれども、其文明論の極端を公言して人心を激したるは、亦是れ人生の獸勇鬪爭を好むの情に出たることならんと、今より回想して自から悟る所なり。然りと雖も此獸勇決して無益ならず、當時我黨の士は天下の俗論古論者に敵すると同時に、一方には彼等を網羅して之を諭し、其古來徹骨の蒙を啓て我主義に同化せしめんとの本願なれば、四面暗黑の世の中に、獨り文明の炬火を點じて方向を示し、百難を冒して唯前進するのみ。兵馬騷擾の前後に、舊幕府の洋學校は無

論、他の私塾家塾も疾く既に廢して跡を留めず、新政府の學事も容易に興る可きに非ず、苟も洋學と云へば日本國中唯一處の慶應義塾即ち東京の新錢座塾あるのみ。世人は之を目して孤立と云ふも、我れは自負して獨立と稱し、在昔歐洲にてナポレオンの大變亂に荷蘭國の滅亡したるとき、日本長崎の出島には尚ほ其國旗を飜して一日も地に下したることなきゆゑ、荷蘭は日本の庇蔭に依り、建國以來曾て國脉を斷絶したることなしとて、今に至るまで蘭人の記臆に存ずとの談あり、同志の士は是等の故事を物語りして、我慶應義塾は荷蘭の國旗を飜したる出島に異ならず、日本の學脉を維持するものなりと、敢て自から其任に當りてます〳〵新知識の輸入に怠らざる中にも、從前德川時代の洋學は醫術を始めとして、化學窮理砲術等、多くは物理器械學の邊を專らにしたるものを、慶應義塾は一歩を進めて世界の地理歷史法律政治人事の組織より、經濟脩身哲學等の書を求めて、其講讀に着手し、現に英語に云ふ「ポリチカル、エコノミー」を經濟と譯し、「モラル、サイヤンス」を譯して脩身學の名を下したるも慶應義塾の立案なり、其他英語の「スピーチユ」に演說の譯字を下して會議演說の趣意を說き、あらゆる反對論を排して今日世間に普通なる彼の演說法を敎へたるも義塾にして、「スチーム」を濕と譯し、「コピ、ライト」を版權と譯したるも義塾の趣意なり。凡そ是等を計ふれば枚擧に遑あらず、同志結合、力のあらん限りを盡して文明の一方に向ひ、一切萬事その舊を棄てゝ新是れ謀り、以て日本全社會の根底より面目を改めんと試みたる其希望は、實際に於て固より微力の及ぶ可き限りに非ず、唯是れ一時の空想に似たりしかども、爰に驚く可きは我日本國民の資質剛毅にして頑ならず、常に其固有の氣力を保つと同時に、慧眼能く利害の在る所を察して、王政の一新と共に民心も亦一新し

文明の進歩駸々として我黨の空想を實にしたるのみか、却て其空想者の思ひ到らざる所にまで達して、遂に明治の新日本を出現したるこそ不思議の變化なれ、望外の仕合なれ、前後の事情を回想すれば感極りて唯涙あるのみ。畢意時運の然らしむる所なりと云ふも、素因なくして結果はある可らず、吾々は今日に居て只管先人の餘德その遺傳の賜を拜する者なり。左れば我黨の士が舊幕府の時代、即ち彼の鐵砲洲の塾より新錢座の塾に、又今の三田に移りし後に至るまでも、勉强辛苦は誠に辛苦なりしかども、首を回らして世上を窺ひ、文明の風光次第に明にして、次第に佳境に入るを見るは、畢生の大快樂事にして譬へんに物なし、苦中樂ありとは即是なり。然りと雖も人生の多情多慾なる殆んど飽くことを知らず、今日の慶應義塾を見るに其學事は凡そ資金の許す限りに勉めざるはなし、否な世間普通の官私諸學校に比すれば資力以外の事に

まで着手して見る可きものありと雖も、天下の時勢尙ほ未だ獨立の學校事業に可ならずして、經濟の不如意と共に學事も亦不如意の歎を免かれず。又教塲の學事は殆んど器械的の仕事にして、僅に錢あれば以て意の如くす可しと雖も、我黨の士に於て特に重んずる所は人生の氣品に在り。抑も氣品とは英語にある「カラクトル」の意味にして、人の氣品の如何は尋常一樣の德論に喋々する善惡邪正など云ふ簡單なる標準を以て律す可らず、況んや法律の如きに於てをや、固より其制裁の及ぶ可き限りに非ず、恰も孟子の云ひし浩然の氣に等しく、之を說明することは甚だ難しと雖も、人にして苟も其氣風品格の高尙なるものあるに非ざれば、才智伎倆の如何に拘はらず、君子として世に立つ可らざるの事實は社會一般の首肯する所なり。幸にして我慶應義塾は此邊に於て聊か世に異なる所のものを存して、鐵砲洲以來今日に至るまで固有の氣品

を維持して、凡俗卑屈の譏を免かれたることなれども、元來無形の談にして口以て言ふ可らず、指以て示す可らず、佛者の語を借用すれば、以心傳心の微妙、義塾を一團躰とすれば其團躰中に充滿する空氣とも稱す可きものにして、畢竟するに先進後進相接して無形の間に傳播する感化に外ならず。然るに今老生は申すまでもなく、座中の諸君も頭髪漸く白し、況んや老少不常にして先年既に小幡仁三郎、藤野善藏、蘆野卷藏、村尾眞一、小谷忍、馬場辰猪等の諸氏を喪ひ、又近來に至りては、藤田茂吉、藤本壽吉、和田義郎、小泉信吉、野本貞次郎、中村貞吉、吉川泰次郎氏等の不幸を見たり。蓋し人の死するは薪の盡るが如く、其死後の餘德は火の盡ざるが如しと云ふと雖も、薪と火と共に消滅するの虞なきに非ず、從前既に幾多の名士を喪ひ、今又老生と諸君と共に老却したり、自然の約束に從て次第に世を去りたらば跡に遺る壯年輩を、如何す可きや。壯年の活潑能く吾々長老の遺志を繼ぐ可しと信ずるの一事は、特に吾々先輩の責任にして、死に至るまで之を勤むるも尙ほ足らざるを恐るゝ所のものなり。吾々の生前果して能く此責任を盡し了りて第二世の長老を見る可きや否や、之を思へば今日進歩の快樂中亦自から無限の苦痛あり。老生の本意は此慶應義塾を單に一處の學塾として甘んずるを得ず、其目的は我日本國中に於ける氣品の泉源、智德の模範たらんことを期し、之を口に言ふのみに非ず、躬行實踐以て全社會の先輩者たらんことを期する者なれば、今日この席の好機會に恰も遺言の如くにして之を諸君に囑托するものなり。

銅像開被に就て

今日は福澤翁銅像の開被式とて御招きに預り、唯今小幡君幷に大熊君

の御演說にて此像の出來たる由來は御來會の皆樣にも御承知下されたることならん、殊に大熊君には凡そ三年以來何程の御苦勞なりしや實に言語に盡し難し、永き日月、像の型を作る其間に隨て作り隨て改め、無限の工風心勞のみならず、型の原品たる福澤の老翁が、時としては我儘を働き、製作場に缺席して時を空ふしたることも少なからず、夫れにも拘はらずして遂に今日この見事なる品の成功したるは、唯大熊君が彫刻の道に熱心なると、其慶應義塾を視ること薄からざるとに由るのみ、實に謝するにも辭なき次第なり。扨銅像は茲に立派に出來上りたる處にて、老生の心事如何を丸出しに申せば、老生は元來殺風景なる生れ付きにて、萬事外面の邊幅に頓着せず、例へば家の光を天下に燿かし、一身の名聲を百年に遺すなど云ふことは、世間一般の人の思ふほどに之を思はず、生前に家柄が高くも卑くも、死後に人の追遠の情が何とあらんも少しも氣に留めざる性質なれば、自分の容貌を寫したる銅像の如き有るも無きも殆んど心事の外にして、無くて不自由もなく、有て邪魔にもならずと申す位の次第なり。此性質は諸君が老生の平生に徵しても大抵御承知の事にして、既に此發起前にも夫れは無益のことなり、左樣な金があるならば此貧乏學校の維持に用ることこそ本意なれと、毎度小幡君その外に語りしこともあり。然るに諸君が老生の性質を知りながら、厚き御賛成にて遂に今日あるに至りしとは、聊か不審のやうなれども、退て竊に案ずるに、諸君が銅像を作りたるは福澤諭吉の容貌を寫すに非ずして、慶應義塾の紀念碑にするの意なる可し。此松は此人の生れたる年に植えたりと云へば、生前死後の紀念に存ずるが如く、義塾は諭吉の發意に生じたるものにして、諭吉の像は即ち塾を寫したる像なる故に、諸君が此塾を百年の後までも忘れざる爲めに、云はゞ松の木の代

りに銅像彫刻の擧に及びしことならん銅像即ち慶應義塾なりと云ふも不可なきが如し。左りとは老生に於て誠に欣喜に堪へずと申す其次第を語らんに、本塾創立以來既に三十五年、學生を育すること殆んど一萬人、日本國中最も古くして最も大なる學塾なれども、其維持方に至りては本來無一物の私塾にして、年一年を姑息に渡るのみ、曾て根本の安心を得たることなし。幸にして、先年來維持社中の盡力と、次で大學設立のときには宮内省よりも恩賜あり、其他に資金の寄附少なからずして、今日までは此通りに學校の體裁を成し、敎育の實効を擧げて不自由なきが如くなれども、固より永久の見留めあるに非ず、畢竟ずるに年々歳々斷へず他人の力に依りて持續し來ることなれば、今にも人に忘れらるゝときは、其時こそ即ち塾の命脉斷絶の時にして、三十五年前の無に歸す可きのみ。老生も本年六十歳塾の事は兼て寺院の風に倣ひ、義塾寺は

義塾寺の經濟を以て獨立して、曾て私に混同したることなく、目今の住職は小幡君にして、諭吉は先づ老僧隱居なれども、塾の因緣は深くして忘るゝこと能はず、今にも無常の風に誘はれて、老僧が寂滅することあらんには、俗體なる福澤の家には子孫もあり、跡は如何やうにもするならんと思へども、寺院なる義塾の維持こそ不安心なれと老後の煩惱自から禁ずること能はざりしに、今回圖らずも諸君が此寺院の爲めに、紀念の銅像を作りて永く忘れざるの厚意を表されたり。此像は固より諸君の所有物にして、他に主人とてはある可らず、然かも之を人に賣らんとして容易に買ふ者もなく、與へんとして貰ふ者もなく、永く本塾に保存して塾を代表するものなれば、其物のあらん限りは塾も亦共に存在せざる可らず、慶應義塾は銅像と共に萬々歳なりと安心すれば、諭吉死するも瞑す可し、唯深く諸君の御厚意を謝して義塾の好運を喜ぶのみ。

斯く申せば諸君は實に厄介なるものを作り、爲めに此學塾維持の任を引受けて、甚だ面倒なるが如くなれども、其維持法は左まで困難なる事に非ず、塾の會計豐ならずと雖も、其所有財産を計ふれば、邸内一萬四千坪、東京中比類なき第一等の地所にして、目下の相場にても二十萬圓内外の價はある可し。地所の名義こそ福澤諭吉なれども、諭吉は疾く既に之を塾に寄附したるのみならず、最初より私有の念なければ、義塾獨立の基本財産として先づ二十萬圓の邸地を所有し、都合に由り何時にても賣却して他に轉ずること易し。地所にある建物も何千坪其外に書籍器械等も少なからず、之に加ふるに兼て有志者より寄附せられたる資本も年々次第に減少はすれども今尚ほ六萬圓ばかりはある可し。貧と云へば貧なれども、無理なる金策などして朝夕の振廻はしに苦むが如き貧乏塾にはあらず、唯今後を見て永續の目的なきのみのことなれば、

苟も多數の人の力を集めて事を謀るときは、其事は創造にあらず、既有の者に不足を補ふまでの勞にして、勞力の割合に實効の大なる者ある可し、老生は只管諸君の厚意に乘じて將來の事を托する者なり。試に諸君が心を靜にして天下の形勢を視察せられたらば、今の日本國人の思想は果して如何なるものなるやを發明するに難からざる可し。外國交際の刺衝は社會萬般の根底を顚覆して、人民は據る所を失ひ、未だ新事の眞面目を得ずして、早く既に舊物の本領を破り、新に走るの輕卒を止めんとすれば、舊に復るの頑陋なるものあり、進むも突飛して進み、退くも突飛して退き、進退常なく、運動自在にして曾て責任の在る所を見ず、凡そ天下の政令宗教より、士君子の家に居るの法、人に交るの體裁、學者記者の筆にし、口にする所の言論に至るまで、仔細に吟味し來れば、其得失正邪の如何に拘はらず、官民朝野を擧げて一も社會の制裁として見

るに足る可きものなく、一も人民の依て以て安身立命に摸範とするに足る可きものなきが如し。既に制裁なし、摸範なしとあれば、何事か言ふて言ふ可らざるものあらんや、一旦の機に乘じて事の極端に走り、片言を輕信して國家百年の大計を誤るもの比々皆然り、風紀紊れざらんと欲するも得べからざるなり。今の人民は吹て飛ぶ可し、煽で燒く可し、塵の如く、紙の如く、輕々飜々歸する所を知らざれば、富貴必ずしも富貴ならず、貧賤必ずしも貧賤ならず、貧富貴賤諸共に唯僥倖の間に生れて死するのみ。左りとは其身に獨立自治の大義を失ふは申すまでもなく、此國の獨立を如何す可きや、恰も脊骨なき動物をして重荷を負はしめんとするに異ならず、不安心なりと云ふ可し。我が慶應義塾が學問の學塾なるにも拘はらず、社中の志す所は讀書推理のみに止まらずして、一身一家一國の獨立を重んじ、世の所謂政論に走るが如き輕卒はなけれども、常に國家の經綸、社會の風紀如何に就て心事を勞するも、自から偶然に非らざるを知る可し。左れば今諸君が幸に本塾の事に盡力せられて、其命脈を永遠に持續し得ることもあらんには、自から人の據る可き摸範を示して、民心の運動を制裁し、以て天下風紀の中心たることを決して難きに非ず。之を今の大小の政治家が單に法律の範圍内に跼蹐して、經世の餘裕なく、眼前の小政略に汲々として其苦樂榮辱を浮雲と共にし、又彼の宗教家が凡俗下等の小民に接するのみにして、兎角勢力の振はざるものに比すれば、同日の論に非ざるなり。畢竟するに吾々の目的は今の所謂政治法律の外に悠々として、愼んで其政法を遵奉し、人に向て多を求めずして、先づ自から自立自治の根本を定め、社會中等以上の種族と共に國家の脊骨ならんことを期するものなれば、一私塾小なりと雖も其任は則ち大なり、方今我日本國中に慶應義塾を除くの外に敢て之に任

ずるものはなかる可し。唯その能く之に堪ふると堪へざるとは社中諸君の盡力熱心の如何に存ずるのみ。

人間萬事兒戲の如し

生ある者は必ず死せざるを得ず、人生朝露の如しとあれば、浮世の榮枯盛衰、禍福吉凶は唯是れ一時の夢にして、論ずるに足るものなしと雖も、既に現世に生れたる上は、其死に至るまで心身を勞して經營する所なかる可らず、是亦人情世界に在る一生涯の義務なり。爰に老生が奇語を用れば、人間萬事小兒の戲と云ふも不可なきが如し。戲と知りながら、其戲を本氣に勉め、戲の間に喜怒哀樂して死するのみ、深き意味あるに非ず。今日生きて眠食するも戲にして、明日病んで死するも戲なれば、死生も意に介するに足らざれども、尚ほ其生を欲して死を惡むは人情の本來にして、夢の如き戲を本氣に勉むる者と云ふ可し。左れば戲ながらも既に之を本氣に勉めて眞面目に經營す可しとあれば、戲にして戲に非ず、字面穩ならざるが如くなれども、心を潛めて深く思案し、眞に其戲たるを知るにあらざれば、大事に臨んで方向を誤り、由なきことに狼狽して人品を卑くし、萬物の靈たる位を失ふことある可し。例へば近火の時に力を盡して防禦するは自然の人情、又家人の義務なれども、既に燒失したる上にて考れば、火に逢ふて家の燒けるは當然の事のみならず、假令ひ今度燒けざるも、永き歲月の間には自然に腐朽して倒るゝことある可し、燒失したりとて唯家を失ふに遲速あるのみ、詰り戲に出來たる家が、戲に無くなりたるまでのことなりと安心すれば、左まで悲しむにも足らず。又これよりも大切なるは、父母妻子の病氣に其全快を祈り、醫藥の手當怠りなく、苟も此病苦を救ふて全快の道ありと聞けば、百事を拋

ち、身を苦しめて之を求めざる者なし、人間の至情にして自から禁ずること能はざる所なれども、扨いよ〳〵醫藥効なくして病死したりとせんに、之を自然の命數として諦むるの外ある可からず。生れたる者の死するは其生れたるときの約束にして、今更遽に狼狽するに及ばず、心を靜にして生者必死の實相を觀る可きのみ。然るに今この道理を會心せずして、唯眼前の苦樂のみを苦樂し、苦んでは不平を鳴らし、樂んでは法外に逸し、萬物の靈たる人生の品位にあるまじき醜體狂體を呈するは畢竟輕重の別を辨へざるものにして、識者の取らざる所なり。彼の小丈夫が家を燒て發狂し、愛子を喪ふて悲哀の極遂に自から病を釀すが如き、其事例として見る可し。家の將さに類燒せんとするときは、畢生の勇を皷して消防す可し、家人の將さに病死せんとするときは、寢食を忘れて看護す可し、即ち戲の沙汰に非ず、一生懸命の時節なれども、其果して燒失し、死亡したる上は、心事を一轉して我身も共に是れ戲中の人たるを思ひ、更に苦痛を感ずることなかる可し。

右の立言は少しく高尚にして、佛者の說に似たり、宗敎に不案內なる老生の口よりするは不似合なれども、佛者の意に適ふも適はざるも、其邊は別問題として、啻に火事病氣の時のみならず、人間萬事を隨時の戲としながら、本氣に之を勉强辛苦するの一事は、諸君が今日本塾に居て學業を脩め、成業の後、世に出でゝ家事世事に處するにも缺ぐ可らざる要訣なりと知る可し。學問は人生に必要なり、學問の嗜みなくしては文明の世間に伍を爲す可らず、畢生の力を盡して本氣に勉强す可しと雖も、字を讀み、理を講ずるのみを以て人生の能事終れりとす可らず、學問も亦唯人生百戲中の一なれば、其勉强の間にも種々樣々に思を馳せて、事物の輕重を視察し、知字推理の外に、更に大切なる心術の修行、處世の工

風なかる可らず。老生が常に云ふ學問を輕く看るとは此邊の意味にして、彼の學問にのみ凝り固まりて、己が信ずる所に偏し、曾て他の說を容るゝことを能はずして、動もすれば人と爭ひ、遂に極端の非を犯して自から悟らざるが如き、學を勉めて本氣に過ぎたるものなり。唯學問の事のみに非ず、政治家が權力を爭ひ、青雲の士が立身出世の前後を爭ひ、之を爭ふて目的を達するときは、意氣揚々として無上の愉快を覺ゆる其反對に不幸にして失敗すれば、忽ち落膽して身躬から慰むるの道なく、鬱憂煩悶して醜體を示すの事例は世間に珍らしからず。又商賣人の利を得て喜ぶ者に限りて非運のときは憂ること甚だしく、一成一敗の間に喜憂自から禁ずる能はずして、成敗共に其身に禍するもの少なからず、何れも皆局量狹き小丈夫の事にして、其平生の技倆如何に拘はらず、共に士君子の社會に齒す可らざる者なり。畢竟その然る由緣を尋れば、政

治家が政治を重んじ、商人が利益を重んじ、其これを重んずること實を過ぎて、遂に人生の尊き品位に傷けたるものと云ふの外なし。人間萬事戲と申しながら、其局に當れば、之に熱心して辛苦勉强す可きは當然の義務にして、事と品とに由りては生命を犧牲にするとさへありと雖も、其熱情の往來する間に、時として心事を一轉して、人生に常なきの原則を思出し、吾身も正に是れ浮世の百戲中に居て、人と共に一時の戲を戲るゝ者なりとのことを悟り得たらんには、其熱するも唯熱に止りて狂するに至らず、名利の心をして法外に逸せしむることなきのみならず、假令ひ事情に迫りて家を亡ぼし、身を殺すに至るも、自から安んずる所ある可し。之を名けて人間安心の法と云ふ。諸君年尙ほ少し、或は以上の談を聞き、是れは堪へ難き事共なり、人間萬事を戲と思へば、初めより勉强するにも及ばずとて、直に論破することもある可し、無理ならぬ思想

の順序なれども、前に云へる火事の例を以て云はんに、自家の類燒消防のとき人に倍して力を盡したる主人が、燒失の後に至り、人に倍して平氣なるものあるは何ぞや、即ち此主人は家を重んずること甚だしき其間にも、一念また之を輕んじて其烏有に歸するを愛まざるものなり。輕重の念一時に往來して相妨げざる所は、唯諸君が心術の脩行如何に在るのみ。

小心翼々以て大功を期すべし

今の壯年後進生が實業社會に身を立てんとして、兎角その場所なしとは、毎度聞く所なれども、老生の所見を以てすれば、其場所なきに非ずして、實業の方にては却て其人なきに苦しむものゝ如し。此の一方は仕事を求め、他の一方は人を求め遂に相互に近づくを得ざる其事情は、貧乏人が金を借用せんとて貸す者なきを怨むと同時に、金滿家は其遊金の用法なきを憂ふるの情に異ならず。人事意の如くならず、誠に困入りたる次第とは申しながら、實業者の方にて人を得ざれば唯事を興さずして時を待つ可きなれども、後進生の仕事を求むるは急にして、時節到來を待つの猶豫あらざれば、何とか其心事を一轉して、身構を改め、自から自身をして仕事に適せしむるの工風なかる可らず、是即ち老生が諸君に語らんと欲する所のものなり。凡そ人間世界萬般の事に學問の必要あらざるはなし、學問の考なくしては、農業も工業も商業も一切叶ふ可らず、學問の考なくしては、人物卑くして世に厭はるゝのみならず、新案新工風を運らして時勢と共に進歩することを得ず、即ち教育の大切なる所以にして、諸君が本塾に入學して勉强するも、唯この學問上の知見を得んが爲めにして、其勉强の効空しからず、漸く知見の區域を廣くし

て、内外の事情に通達したるは誠に嘉す可し、實業の根本既に定まりたる姿にして、老生も竊に喜ぶ所なれども、其根本定まりたる上にて、之を潤飾するの心掛けなくしては、或は實業に入ること易からざる可しと、是亦老生の竊に憂る所なり。扨潤飾とは如何なる意味ぞと尋れば、他なし、唯通俗世界の人情を解剖して、其微妙の邊に通達し、我心身の働をして正しく之に適せしめんとするの工風即是なり。通俗誠に俗なりと云ふも、俗中必ず眞理の存するものあり、識者の常に重んずる所にして、後進生の特に注意す可き所のものなり。手近く爰に一例を設け、某家に甲乙二名の寄留生ありとせん、家人が家を擧げて外出する時に當り、甲某に留主を托するときは火の元萬端安心なりと思ふ其反對に乙某を留主に殘してはランプ、火鉢等の注意如何ある可きや、何分にも安心出來難し、寧ろ之を連れて共に外出するに若かずと云ふ。左れば此甲乙二名

の人物を評すれば、一は之に依賴して火の元の用心せんとし、一は失火危險の元にもならんかと疑はるゝものにして、其人物の輕重年を同ふして語る可らず、僅に火の元用心の一小事にしても斯の如し、況んや日常無限の人事に當るに於てをや、事柄の輕重に論なく、細々注意して怠らざる者と、漠然光陰を消して能く物を忘れ、時として大切なる機會を誤るが如き者と、之を比較するときは、主人は二生の學力など問ふに遑あらず、先づ此を信じて彼を棄るや、人情の常なる可し。實業社會に入るの難易も凡そ此邊の事情に思付きたらば、諸君の心に自から發明する所なきを得ず。人物の輕重は大事に由りて現はるゝよりも、其試驗却て細事情にあるを見る可し。又この細々注意の事に付き、何程勉强しても人の之を知る者なし、辛苦みな徒勞に屬すとは後進生の不平、老生も其情を知らざるに非ず、過ぎしむかしを思へば、親しく身に覺えあること

にして、其時の不愉快は今尚ほ忘れざる程の次第なれども、猜疑は人生に免かれざる性質のみか、人事多年の經驗に於て、輕信の爲に誤るの事例も少なからざるが故に、人を見るにも僅かに一朝夕の擧動を抵當にして之を信ずる者はある可らず、例へば爰に早起と評判を得たる人あらんに、其人が毎度朝早く起きてたま〳〵近隣の人に見られたりとて、容易に名を成すに足らず、唯本人の習慣にて一年三百六十五日、寒暑風雨に拘はらず、他人の見ると見ざるとを問はず、いつも〳〵例の如く早起してこそ漸く其評判も現はるゝとなれ。左れば後進生が細々能く物事に注意して、人に賴母しく思はるゝは、此早起の人の如く、他人の見ると見ざるとに論なく、恰かも自から爲めにするの習慣を成して始めて漸く人に知らるゝことゝ覺悟せざる可らず。故に其勉强するや十中に七八は他人の眼に漏れて、俗に云ふ椽の下の力持に屬し、自から徒勞なりと思ふこと多しと雖も、其徒勞こそ無限の効力を含むものにして、凡そ世間の評論に人物を輕重するの標準は、微妙の邊に現はるゝ所の徒勞如何に在るのみ。學者なり政治家なり、又は單に一藝一能の人にても、苟も天下に名を成して人に重んぜらるゝ所以は、單に其表面に現はれたる學識才能の働に由るのみにあらずして、本人の平生人の知らざる處に獨り嘗めたる艱難辛苦の事情を以て人を感ぜしむるもの多きが如し。陰德必ず陽報あり、隱れたるより顯はるゝはなしとは、何れも德敎の語なれども、必ずしも深遠なる道德の事に限らず、壯年の後進生にして、陰に人の知らざる處に勉る者は、必ず陽に立身出世の道ある可し。惡を隱して顯はるゝと云へば、善も亦顯はる可し。陰處の勉强顯はれざらんと欲するも得べからず、即ち椽の下の力持とは此意味にして、老生は實業社會に諸君の出身を祈りて、只管椽の下の力持を勸告する者なり。

以上記したる如く、諸君は所謂椽の下の力持を勉め、漸く人に知られて實業社會の門に入りたりとせんに、爰に又無限の困難あれば、豫め其覺悟なかる可らず、第一實業の門内に於ては、其輕重する所、學者書生の平生に異なるもの多し。今の後進書生は其身士族の家に生れざれば、士風に化したる者にして、日本士族の特色は利を言はずして錢を輕んじ、世々の習慣其性となりて、甚だしきは商賣を賤業なりとして之を耻る者さへある程の次第なるに、實業の目的は唯自から利するの一方にして、凡利益の在る處は一毫の微も之を看過するを許さず、其間には言ふ可らざる機密もあり、掛引もあり、一擧一動、一顰一笑、都て利の爲めにして、他事あらざれば、粗大なる書生の眼を以て其皮肉の裏面を窺ふときは、先づ之を鄙劣として驚くのみ、如何に商賣とは申しながら、能くも此極度にまで至るもの哉とて、自然に不愉快の念を生じて落膽するとあるべし。第二に書生の志は常に巨大にして、殊に得意の學識もあるとなれば、之を滿足せしむるに易からず、然るに實業社會に入りて一個の商業家又は會社等の内情を見れば、家の主人番頭に新智識ある者少なきは勿論、當世風に組織したる會社と稱するものにても、重役の面々必ずしも最上の人物にあらず、小給の下役割合に愚なるに非ず、所謂情實の行はるゝは大政府のみにあらずして、小會社中にも相應に小情實の存する者あり。是に於てか新入の書生は獨り心に會社中の役員を數へて品評を下たし、第一社長は名望の爲めに其職に在るよしなれども、無形の名望を除けば、他に實際の技倆あるにあらず、身に覺えたる技倆なくして、事を理せんとするは間違の沙汰なり、況んや副社長の如き何々の縁故を以て今の椅子を占めたれども、畢竟無用の剩員にして、唯給料を貪るのみ、以下の何某こそ實際の事を執りて必要の人物なるに、其地位甚

だ卑くして、却て誰れの下流に在るとは社長が依估の實を明にする者なり。顧みて我一身を見れば、入社以來唯譯けもなき雜用に使役せらるゝのみにして、取留めたる事務とてはなく、甚だしきは出來上りたる帳簿の清書を以て日を消するが如き、鷄を割くに牛刀を用るの喩に洩れず、社員多しと雖も、我れを知る者なしとて、役不足の一念禁じて禁ず可らず、滿腔の不平は自然に發して懶怠となり、何分にも進んで勉强するの意なけれども、既に入社したるは漫に缺勤することも叶はず、唯人の見る處にのみ勉强の體を裝ひ、進むが如く退くが如くする中に、勤向に蔭日向あるの事實はいつしか其筋の人に見顯はされて、體よく放逐せらるゝか、然らざるも、其會社に於て到底立身の道はある可らず。

右の事情は老生が毎度見聞する所にして、强ち後進生のみを咎む可きに非ず、時としては其不平に尤も至極なる理由の存するものありと雖も、如何せん滔々たる俗世界は單に一片の理窟を以て貫く可らず、殊に今日は新敎育と舊習慣と正に變遷の時節なれば、新舊双方の間に多少の衝突は免かる可らざることゝ覺悟して、千辛萬苦に堪ること後進男子の事なれと、老生の信ずる所なり。扨その覺悟とは如何なる意味ぞと云ふに、大志大膽、内に深く藏めて人に窺はるゝことなく、小心翼々苦勞を厭はずして活潑に立働き、變通自在以て世間に交りて遂に立身の目的に達することなり。古めかしき事例なれども、豐太閤か木下藤吉たりしとき、織田信長に奉公を求めて足輕に召抱へられ、毎朝の責馬に主人の供を勤め、或る日主人が時を誤りて早く玄關に出でたりしに、藤吉一人は平生の心掛けにて、いつも主人の外出前より疾く支度して之を待つの例なりしゆゑ、此朝も用便を缺かずして大に信長の歡心を得たりと云ふ。左れば藤吉が勞を厭はずして、人の知らざる處に毎朝早く供の

用意したるは、數ヶ月のよにして、是れぞ所謂椽の下の力持なれども、一朝信長の知る所となりては、立身の資として屈强の働なりと云ふ可し。又其後織田家の臺所にて炭薪の賄役と爲りても、難有く其職を奉じ、注意に注意して費用を省きたるが如き、如何にもまめ〳〵しき一小俗吏にして、俗吏の外に藤吉なきが如くなれども、退て其私に就き、俗吏の志如何を尋れば、眼中天下に人なく、無限の功名心を抱きたる大膽不敵の男子たるや疑ある可らず、唯その志の大なるが爲め、人をして窺ひ得せしめざるのみ。左れば老生は後進生の志を笑ふに非ず、咎むるに非ず、志大ならざれば人品卑くして君子に齒す可らず、其ます〳〵大にして高からんことを願ふと雖も、深く之を内に藏めて、荷も大志の鋒鋩を外に露はすことなく、唯時に隨て擔當の事を勉め、其事にばかり拔群絶倫ならんとを祈るのみ。假りに木下藤吉が小俗吏にてありながら、心中に織田家の諸將英雄を輕んじ、彼の新入社の書生が會社の重役以下を品評するが如くにして、竊に之を口に發し、色に顯はしたらんには、忽ち俗吏のまゝに擯けられて、遂に他年豐太閤たるの機會はある可らず。男子の志は内に藏めて立身の基礎と爲る可く、容易に發して人に厭はるゝの媒介たる可し。老生が常に云ふ、思想の深遠なるは哲學者の如く、心術の正直高尚なるは元祿武士の如くにして、之に加ふるに小俗吏の才能を以てして、始めて實業社會の大人たる可しとは、亦此邊の意味なり。諸君春秋に富む、立身の道難きに非ざるなり。

特むべきは唯自家の才力あるのみ

むかしの時代なれば、社會の萬事萬物皆一定の習慣成法の中にありて、動くとなく、啻に世祿の士族が其名利を世々にするのみならず、農工商

の家にても自から其家業に世襲の風を存し後進の者は少年の時より家の仕來りに從て營業を見習ひ、長じて父の跡を相續するか、又は他家に養子となりて養家の主人と爲るときは、唯先代の遺法を守りて業を營むのみ、差したる才力なき者にても、家道に波瀾をさへ起さゞれば、安樂に世を渡る可し。農の家は五代も十代も農にして、商の家も亦五代十代に傳へ、寛永年中の酒屋は慶應の末に至る迄も酒を賣り、何町何村の米屋は何百何十年來の米屋なりと云ふが如きは、世に珍らしからぬ話しなり。畢竟ずるにむかしは士農工商共に渡世に艱難少なく、唯その要訣は祖先傳來の家法を守るに在るのみにして、能く家法を守るものは必ずしも才力を要せざるなり、如何となれば當時世間の信用は家に存して人に在らず、何々家の主人と云へば、其人の智愚を問はずして、先づ其家名を信じ、何々氏は、大臣の家なり、何々氏は舊家なり、豪農商家なりとて、之を信じ、之に依賴して怪しまざるが故に、偶然に其主人たる者は、自ら勉めて求めざるも、名利を得ること甚だ易ければなり。

然るに開國以來封建世祿の制度を廢してより、士族の門閥を失ふのみならず、農工商家の家法も自から一變して、復た舊時の面目を維持す可らず、例へば彼の諸問屋酒造家等都ての營業に株の制を廢したるも、其一例にして、商人等が坐して其家名を恃み、不思議なる利を利して、安樂に渡世するを許さず、即ち家の名は恃むに足らず、恃む可きは唯人の才力のみ。如何なる富豪の名家にても、其主人が無學愚鈍にして、近時文明の事を知らざれば、遂には其文明の波瀾の爲めに家を亡ぼさるゝや明白なる數にして、之を如何ともす可らざるの時勢に迫りたり。然り而して人の家の亡ぶるや、亡びて無に歸す可きにあらず、恰も物質不滅の原則に基き、爰に亡ぶるものあれば、同時に他に興るものなきを得ず。何村

の何某が何百町歩の田地を失ひ、何萬圓の金を損したりと云ふも、天災にあらざる限りは、必ず他に此田地の持主となり、又この金を所有する者ある可きは相違もなき事實にして、唯その主人の新舊交代するまでのことなれば、扨舊主人が之を失ふて何人が新主人たる可きやと尋るに、畢竟舊主人の之を失ふは、文明の波瀾の爲めなれば、之に代らんとするには、能く此波瀾に堪へ、自由自在に其間に出沒して、心身共に屈强なる人物にあらざれば叶はざることなり。即ち文明の學問に從事して、能く其學理を實際に適用し、時としては清雅高尚の極を語り、時としては俚俗鄙陋の底を潛り、言行活潑、心事綽々然として常に餘裕ある者にして、始めて今の文明世界に富貴を致す可きなり。

左れば今世の富貴名利は人の家に傳はらずして、人の身に附くの時勢となり、正しく優勝劣敗の原則に違はざるものなれば、後進の輩が立身の道を求るにも、身外に恃む可きものなしと覺悟せざる可らず。富貴浮雲の如しとは、道德の主義に從て、富貴を輕んずるの意味ならんなれども、今の世の富貴は、假令へ之を重んじて之を維持せんとするも、文明の知見才力あるにあらざれば、忽ち浮雲の消へて痕なきに至るは、文明波瀾の勢力なりと云ふの外なし。諸氏の中には祖先傳來の家產に富むものも多かる可しと雖ども、一身の心掛け次第にて、忽ち浮雲たる可きものなれば、渡世の道決して易からず、文明の波瀾の爲めに家財を蕩盡するも、或は其波瀾を利用して家を興すも、唯一身の智不智に存するのみ。之を要するに、諸氏の令尊が王父の家を相續したるときの筆法に從て、今の家を維持し、又更に大に興さんとするも、迚も叶はざることゝ知る可し。又或は諸氏の中に無產なるものもある可し、無產より出でゝ產を作らんとするには、新に天下の富源を開いて、其澤に浴す可きこと當然

の仕事にして、方今その事甚だ多し、實に愉快なる世の中なれば、身外のもの都て恃むに足らず、一身の勉强機轉以て身を立ること甚だ易き尙ほ其上にも今の日本に限りて一種特別の事情と申すは、天下無數の資産家の中に、文明の何ものたるを知らざる者甚だ多し、文明の世に居て文明を知らざるものは、水に舟を浮べながら、其の水たるを知らざるに等し、一朝波瀾の起るに逢へば、舟の轉覆す可きや言ふを俟たず、然るに文明の社會に波瀾の止むことなし、其舟の覆へるは、取りも直さず後進の壯年學者に向て態と富貴を授るものに異ならず、古來未曾有の奇相なりと云ふ可し。斯る奇變の社會に居て尙ほ立身の道なきを訴ふるも、我輩は之に耳を傾くるの閑なし、唯本人の工風に任して其自から發明するの時を待つのみ。

學問の要は實學にあり

余曾て云へることあり、養蠶の目的は蠶卵紙を作るに在らずして絲を作るに在り、教育の目的は教師を作るに在らずして、實業者を作るに在りと。今この意味を擴めて申さんに、抑も我開國の初めより維新後に至るまで。天下の人心皆西洋の文明を悅びて之に移らんとするに急なれば、人を求むることも亦急にして、苟も横文字讀む人とあれば、其學藝の種類を問はず、其人物の如何に拘はらず、之を用ひたれども、限なきの用に供するに限あるの人を以てす、固より引足るべきにあらず。且その時の學者なるものは、何學を學びたる、何學士と申す譯にもあらずして、實際に臨みて知らざる事も多ければ、是にては行くすゑ賴母しからずとて、是に於てか教育の說起り、新に學者を作り出さんとに熱心して、朝野

共に人を教るに忙はしく、維新以來十數年の間、曾て少しも怠るとなし。當初の考には、我日本國の不文不明なるは、教育の普ねからざるがためのみ、教育さへ行屆けば、文明富强は日を期して致すべしとの胷算にてありしが、扨今日に至りて實際の模樣を見るに、教育は中々能く行屆きて字を知る者も多く、一藝一能に達したる專門の學者も少なからずして、先づ以て前年の所望は稍や達したる姿なれども、之がため國の文明富强を致したるの證據とては甚だ少なきが如し。其事情を語るには言長ければ、手近く一例を擧げて示さんに、一國の富は一個人の富の集りたるものなりとの事は爭ふ可らざるものならん、左れば彼の文明富强の根本たる教育を受けたる者が、國を富ますためには、先づ以て自身の富を致すの必要なるは申すまでもなきことなるに、世間の實際は之に反し、凡そ我國の學者として大に資産を作り出したるものを見ず、如何

なる專門の一藝一能を手に入れたる人物にても、一事一業を起して富を致したるの談を聞かず、或は偶々豐に生活して多少の餘財ある者もあるべしと雖も、其財は本人が教育上に授けられたる藝能を天下の殖産社會に活用して得たる財にはあらずして、幸に官途に用ひられ、差したる用もなけれども、定まりの俸給に衣食して、少々づゝ其餘りを積み貯へたるものより外ならず。其有樣は心身に働なき孤兒寡婦が、遺産の公債證書に衣食して、毎年少々づゝの金を餘ますものに等し。天下の先覺憂世の士君子と稱し、然かも其身に拔群の藝能を得たる男子が、其生活は如何と問はれて、孤兒寡婦の謀を學ぶとは、驚入たる次第にして、文明活潑の眼を以て評すれば、唯憐む可きのみ。試に西洋諸國の工商社會を見れば、某は何々の工事を企てゝ何十萬圓を得たり、某は何々の商賣に何百萬の産を成したりと云ふ其人の身は必ず學校より出たる者に

して、少小教育の所得を成年の後殖産の實地に施し、以て一身一家の富を致したる者にして、世に名聲も香しきことなれども、少壯の時より政府の官に就き、月給を蓄積して富豪の名を成したる者あるを聞かず、若しもこれあれば、所謂守錢奴として世に齡せられざることならん。左れば今日我日本國の教育を蒙りたる學者は到底殖産の社會に適用すべき者にあらず。殖産に不適當なる人物なれば如何なる卓識の先生も、如何なる專門藝能の學士も碁客將棋師に等しくして、迚も一家の富を起すに足らず、一家富まされば一國富むの日ある可らず、教育の目的齟齬したるものと云ふべし。

日本の教育が何故に斯くも齟齬したるやと尋るに教育さへ行屆けば、文明の進歩一切萬事意の如くならざるはなしと信じて、却て其教育を人間世界に用るの工風を忘れたるの罪なりと答へざるを得ず。人間世界は存外に廣くして、存外に俗なるものなり、文明の頂上と稱する國々に於ても、尚且つ然り、況して日本の如き其文明の實價は兎も角も、西洋流の文明に就ては、都て不案内なる此人民に向ひ、高尚なる學校教場の知見を丸出しにして、實地の用に適せしめんとするも、浮世の樣に行はる可らざるは明白なる時勢とも心付かずして、我國人は教育の熱心自から禁ずること能はず、次第〳〵に高きを勉めて止まるを知らず、俗世界は依然として卑く、教育法はます〳〵高く、學校は恰も塵俗外の仙境にして、この境内に閉居就學すること幾年なれば、其年月の長きほどに、ます〳〵人間世界の事を忘却して、竊に之を輕蔑するが故に、浮世の人も亦學者と共に語るを厭ひ、工業にも商賣にも之と共に事を與にせんとするものとては一人もなく、唯學者と聞けば、例の仙人なりと認めて、唯外面に之を尊敬するの風を裝ひ敬して之を遠ざくるのみなれば、學

者も亦之に近づくを屑とせず、左りとて俗を破りて獨立の事業を企るの氣力もなく、先づ其身に慣れたる學校世界に引籠りて、人を敎ふる業に就く、即ち學校の敎育に由り、學校の敎員を生ずること多き所以にして、隨て敎へられて隨て敎員となり、際限あることなし。畢竟ずるに數年來世の敎育家なるものが、學問を尊び、俗世界を賤しむこと兩樣共に甚だしきに過ぎ、高尙至極なる學問の型の中に無理に凡俗を包羅して、新奇の形を鑄冶せんとして、却て凡俗を容るゝことは出來ずして、大切なる敎育を孤立せしめ、自から偏窟に陷りたるものと云はざるを得ず。自今以後とても敎育家がこの邊に心付かずして、唯敎育法の高尙なるを求め、國民の智德の高さと、文明の學理の高さと畧ぼ相當らしむべきの要を知らずして、今の儘の方向に進みたらんには、國中ます〳〵敎師を生ずるのみにして、實業に就く者なく、初に云へる如く、蠶を養ふて蠶卵を生じ、其卵を孵化して又卵を生じ、遂に養蠶の目的たる糸を見ざるに等しきの奇觀を呈することあるべし。

我慶應義塾の敎育法は、學生諸氏も既に知る如く、創立の其時より、實學を勉め、西洋文明の學問を主として、其眞理原則を重ずること甚だしく、此點に於ては一毫の猶豫を假さず、無理無則是れ我敵なりとて、恰も天下の公衆を相手に取りて憚る所なく、古學主義の生存する處を許さゞる程に戰ふ者なりと雖ども、又一方より見れば、學問敎育を輕蔑することも亦甚だし。蓋し其これを輕蔑するとは、學理を妄談なりとして侮るに非ず、唯これを手輕に見做して、如何なる俗世界の些末事に關しても、學理の入る可らざる處はある可らずとの旨を主張し、內に在ては人世の一身一家の世帶より、外に出ては人間の交際工商の事業に至るまで、事の大小遠近の別なく、一切萬事我學問の領分中に包羅して、學事と俗

事と連絡を容易にするの意なり。語を易へて云へば、學問を神聖に取扱ずして、通俗の便宜に利用するの義なり。故に本塾の教育は先づ文學を主として、日本の文字文章を奬勵し、字を知るためには漢書をも用ひ、學問の本躰は則ち英學にして、英字英語英文を教へ、物理學の普通より數學、地理、歴史、簿記法、商法、經濟學等に終り、尚英書の難文を讀むの修業として、時としては、高尚至極の原書を講ずるともあり、又道德の課に至りては、特別に何主義を限らず、唯教師朋友相互の責善談話を以て根本となし、其讀む所の書は、人々の隨意に任じ、嘉言善行の實をして自から塾窓の中に盛ならしむるを勉るのみ。斯の如くして多年の成績を見るに、幾百の生徒中、時に或は不行狀の者なきに非ずと雖も、他の公私諸學校の生徒に比して、我慶應義塾の生徒は德義の薄き者に非ず、否な其品行の方正謹直にして、世事に政談に最も着實の名を博し、塾中常に靜謐なるは、或は他に比類を見ること稀なるべし。

明治十九の歳華既に改まりて、慶應義塾の教育法は大に改まるに非ずと雖ども、一陽來復と共に此の舊教育法に新鮮の生氣を與ふるは亦自から要用なるべし。其生氣とは何ぞや、本塾の實學をしてます〳〵實ならしめ、細大洩さず、都て實際の知見を奬勵し、滿塾の學生をして即身實業の人と爲らしめ、彼の養蠶の卵より卵を生ずるに等しく、本塾に卒業したるものが、唯僅に學校の教師となるか、又は役人となりて、孤兒寡婦の生計を學ぶなど云ふ、無氣無腸の譏を免かれ、獨立男兒の名に愧づることなからしむるの工風なり。從來本塾出身の學士が善く人事に處して迂濶ならずとのことは常に世に稱せらるゝ所なれ共、吾々は尚これに安んずるを得ず、依て本月初旬より内外の社員教員相共に談じたることもあれば、自今都合次第に從ひ、教場又教則に少しく趣を變ずること

ともあるべし。學生諸氏は決して之を怪しむ勿れ、吾々は諸氏の自尊自重を助成する者なり。本塾に入りて勤學數年、卒業すれば錢なき者は即日より工商會社の書記手代番頭と爲る可く、或は政府が人を採るに漸く實用を重ずるの風を成したらば、官途の營業も亦容易なる可く、幸にして資本ある者は、新に一事業を起して獨立活動を試む可く、或は地方の故郷に歸りて、直に父兄を助け、又は家を相續して、慥に遺産を保護し、又增殖するの知見と膽力とを得せしめんと欲する者なり。本來無き家産を新に起すは固より難しと雖ども、既に有る家産を守るも亦甚だ易からずして、其難易は孰れとも明言し難きほどのものなれば、貧富とも に勉む可きは學問にして、唯其敎塲をして仙境たらしめざること、吾々の常に注意して怠らざる所なれば、學生諸氏もおの〳〵自から心して此注意を空うせしむる勿れ。

先づ鄙事に多能なるべし

むかし封建の時代に在ては、人事一定して變化少なく、士族が其祿を世々にし、其身分を世々にするのみならず、民間の農工商に至るまでも、自から世祿世襲の風をなして、貧富の變動甚だ少なく、富豪は數代の富豪にして、貧乏も亦數代の貧乏なるが故に、貧富は恰も其家に屬して、人に在らず、不才無智の子と雖も、富豪の家に生るゝときは、其家名を相續して、其富を專にす可し、天賦の智者才子にても、貧者の子なれば、生涯貧を守らざる可らず。之れを要するに、富貴功名の約束は既に家に定りて、才智の働には差したる要用あらざれば、當時の後進少年輩は必ずしも世に名を知られんことを求めず、又其時代の敎に最も重んずる所は、身の分限を知るの一事にして、富貴は富貴にして、謹んで其富貴に處し、貧賤は

貧賤にして、謹んで其貧賤に安んじ、苟も才を賣り、名を求るが如きは、世教を害するものなりとて、故老これを警め、先生これを教訓して、一世の風を成したるが故に、後進の子弟に於ても、其身の貧富幸不幸は、恰も先天の約束と觀念して、唯退て自から守るあるのみ。抑も社會の安寧を主として、只管無事を謀るには、斯る世教こそ最も適當ならんなれども、其弊は後進生をして生來の活氣を失はしめ、進んで失敗するよりも、退て無事なるに若かずなど云ふ、少壯の身にあるまじき根性を養成して、恰も若年の身體に老人の魂を入れ、遂に大に其勉强心を妨げたるの禍は、封建時代の事實に於て着々之を見る可し。其一二を擧れば、世祿の武家の子に算筆を勉る者少なく、商賣の事情を知らんと欲する者少なく、美術文學に志す者少なく、尙甚だしきは、書は姓名を記するに足るなど稱して、書字をさへ等閑にしたる者多し。之に反して、農工商の子弟は、護身の武藝を勉めざるのみならず、讀書推理苟も精神以上の事は、之を武家の專有に歸して、自から勉るを知らず、雙方共に恰も一種の不具片輪者を生じて、人生天賦の資力を空ふしたるは、本人の不幸のみならず、天下の不利と云はざるを得ず。

今や封建の時代は過ぎ去りて、時勢一變し、富貴功名は家に由らずして、人に存し、日常の交際に人を見れば、誰が家の子と其家筋をば吟味せずして、先づ其智愚如何を問ふの時節とは爲りたり。是に於て迂老が諸君に向て特に注意を促すものは、君等が才を賣り、名を求るの手段を等閑にするなきの一事なり。抑も自身の才智を耀かし、名聲を求るとは一寸鄙劣なるが如くなれども、本來身に無きものを有るが如くに裝ひ、虛飾して世を欺けばこそ鄙劣なれ、有るものを有るとして世に知らるゝに於て何の耻づ可きことあらんや。工業者が物を製し、商賣人が店を開く

に廣告せざるものなし、學者が辛苦學び得たる所のものを世に公にし、其平生の技倆を人に示さんとするは、則ち一身の廣告にして、特に今の時勢に必要なるとなり、如何となればむかしの人には家名なるものありて、世に知らるゝと容易なるのみならず、特に名を求るの要用もなかりしとなれども、既に家名の勢力を失ひし今日の後進生は、一身の才力を世に知られて、以て立身の資と爲すものなればなり。扨この一身の廣告を必要なりとして、其方法を如何す可きやと云ふに、迂老の考には、先づ外面を示して後に内部を知らしめ、近淺の細事より始めて、遠大の力量を現はさんと欲するものなり。例へば人と相接して先づ見るものは顏色なり、顏色温和ならざる可らず、次で發するものは言語なり、言語粗暴なる可らず、交際の禮義周旋擧動既に活潑優美なりとして、尙進んで手跡の醜美、書翰の文段の巧拙等は人物の品評に最も手近き標準たる

可ければ、後進生の最も注意す可き所のものなり。然るに此種の事は動もすれば學者に蔑視せられて、輕々看過する所と爲るのみならず、却て武骨殺風景を以て得々自から居り、人事に大切なる禮儀を缺で、併せて美術文學の要を忘るゝ者なきにあらず、迂老は諸君の爲に謀て常に遺憾に堪へず。竊に案ずるに、今の後進生が斯くまでに細事に無頓着なるは、唯身に得たる學問上の眞價を以て重きを爲し、以て人間世界に通達せんとの覺悟なる可しと雖も、如何せん滔々たる俗界には、其眞價を知る者少なきのみか、人事繁劇の最中、徐々に之を識別するの暇を得ず、一見その木石無藝なるを察すれば、先づ之を擯けて不問に置くの常なるが故に、錐鋩銳しと雖も、囊中に置かるゝを得ずして、獨り空しく不平に終る可きのみ。君等は我慶應義塾に居て其學ぶ所決して卑からず、知見の高尙なる毫も世に愧づるものなかる可し。迂老に於ても其高きを厭は

ず、今後ますゝ〳〵上進して實學の大義を失はず、以て日本教育の中心たる可きは敢て期する所なれども、其高きに居然として人事を忘るゝが如きは、恰も學問教育に致されて、不具片輪に陷るものなれば、心事の高尚なると共に、鄙事に多能にして、外部の活潑優美ならんこと吳々も祈る所なり。

成學即ち實業家の說

學問に志して業を卒りたらば、その身そのまゝ實業の人たるべしとは、余が常に諸氏に勸告する所にして、毎度の說法聽くも煩はしなど思ふ人もあるべけれども、余が身に經歷したる時勢の變遷を想回へして、近く第二世の事を案ずれば、他人のためならで、自身の情に自から禁ずること能はざるものあれば、之を諸氏に說き明らかにして、兼て又諸氏の父兄にも此意を通達せしめんと欲するものなり。抑も余は舊中津藩の士族にして、少小の時より藩士同樣に漢書を學び、年二十歲ばかりにして始めて洋學に志したるは、今を去ること凡そ三十餘年前なり。此時に洋書を讀み初めたるは、何の目的を以てしたる歟、今に於て自から解することの能はず、當時世に洋學者なきにあらざれども、大抵皆醫術研究のためにする者にして、前途の目的もあることなれども、余が如きは素と醫家の子にあらず、又自分に醫師たらんと欲する志もなし、唯譯もなく醫學塾に居て、醫學生とともに荷蘭の醫書を講じ、物理を研究したるのみにて、且この洋學を勉むれば之に由りて譽れを鄕黨朋友に得るかと云ふに、決して然らざるのみならず、却て公衆の怒に觸るゝ位の時勢にして、甚た樂しからず、或は之に由りて身に利することあるやと云ふに、是れ亦思ひも寄らず、既に譽れなく、又利益なし、何のために辛苦勤學し

たるやと尋ねらるれば、唯今にても返答に困る次第なれども、一歩を進めて考ふれば、說なきにあらず、即ち余は日本の士族の子にして、士族一般先天遺傳の敎育に浴し、一種の氣風を具へたるは疑もなき事實にして、其氣風とは唯出來難き事を好んで之を勤むるの心是なり。當時横文を讀むの業は極めて六箇敷きことにして、容易に出來難き學問なりしが故に之を勤めたることならん。或は洋學なく、他に何か困難なる事業もありて、偶然に思付きたらば、其方に身を委ねたるやも知る可らず。畢竟余が洋學は一時の偶然に出でゝ、其修業の辛苦なりしが故に、之に入りたるものなりと自から信ずるの外ある可らず。既にこの學に志して漸く之を勤むる間には、漸く眞理原則の佳境に入り、苦學即ち精神を樂しましむるの具となりて、如何にしても此樂境を脫すべからず。顧みて我身の出處たる古學社會を見れば、其愚鈍暗黑なる共に語るに足る可

き者なく、竊にこれを目下に見下して愍笑するのみ、其狀恰も田舍漢が都會の住居に慣れて、故鄕の事物を笑ふものに異ならず。ます〳〵洋學に固着して、ます〳〵心志の高尙なりしも由緣なきに非ざるなり。

右の如く、唯氣位のみ高くなりて、扨その生計は如何と云ふに、曾て目的あることなし、是れ亦士族の氣風にして、祖先以來些少にても家祿あれば、到底飢渴の憂なく、固より貧寒の小士族なれども、貧は士の常なりと自から信じて疑はざれば、左まで苦しくもなく、又他人に對しても貧乏のために侮りを被ることゝてはなき世の風俗なりしが故に、學問には勉强すれども、生計の一點に於ては唯飄然として日月を消する中に、政府は外國と條約を結び、貿易の道も開らけて、世間の風景何となく文明開化の春を催し、洋學者の輩も人に惡まれ、人に忌まるゝ其中に、時勢止むを得ざるよりして、俗世界のために器として用ひらるゝの塲合とな

り、余が如きも即ち其器の一人にして、幕府に雇はれ、横文書翰翻譯の仕事を得たり。固より之がために榮譽を博したるにあらず、人情一般西洋の事物を穢なく思ふ世の中に、此穢なき事を吟味するは、洋學者に限るとして利用せられたる其趣は、皮細工に限りて穢多に御用を被りたるの情に異ならざりしと雖ども、穢多にても、非人にても、生計の道にありつきたるは實に圖らざりしことにして、偶然に我所得の藝能を以て錢を得たるものなり。是れより余は著述に從事し、專ら西洋の事情を日本人に示して、古學流の根底より之を顚覆せんことを企てたる其最中に、王政維新の事あり、兵馬匆卒の際、言論も自由なれば、思ふがまゝに筆を揮ふて憚る所なく、有形の物に就ては、物理原則の欺く可らざるを說き、無形の事に關しては、人權の重きを論じ、殊に獨立の品行自尊自重の旨を勸告して、(但し政權參與等の事に付ては、余が著書中に切論したるもの少なし、是れには自から說あり、こゝには略す)其著書も少なからず、之がために當時の古學者流は甚だ不平の樣子なりしかども、其書の流行は非常にして、利益を得たるとも亦少なからず、今日に至るまで、余が衣食住に苦しまずして、獨立勝手次第の生活を爲し、尙ほその上に、私塾維持のためにも、社員と共に多少の金を費したる、其出處を尋れば、商賣に儲けたるに非ず、月給に貰ふたるに非ず、況んや祖先の遺產に於ておや、本來無一物の一書生が一本の筆の先きにてかき集めたる財產なり。是れ亦偶然の僥倖なりと云はざるを得ず、如何となれば當初余が著述は曾て身に經驗あるに非ず、唯西洋の事を容易く世人に知らせんものをと思ふ一心より、之を出版して存外に好く賣れたるに付き、是れは面白しとて又出版すれば、又賣れ、遂に圖らざる利益を得たることにして、或は之に反對して利益なかりしとても、左まで心事の齟齬したるものに

あらざればなり。

左れば余が弱冠の時より今日に至るまでの生活は、悉皆偶然に出でたる僥倖にして、其然る所以は必ずしも余が暗愚先見の明なきがために非ず、時勢の變遷これを前知する能はざるは、誰れ人も一樣なる其中に、余が志し又企てたる事は、恰も其變遷の勢に背くこと少なかりしが故に、今日尙ほ未だ貧乏もせざることならん。然りと雖ども他の僥倖は決して學ぶ可き事柄にあらず、一身にしても僥倖は再びす可らず、況んや他を學ぶに於てをや、余は特に之を諸氏に警めざるを得ず。唯諸氏に向て然るのみならず、現在余が實子等へ警しむる所も此旨より外ならず。余を以て今の第二世の後進生を見れば、余が三十餘年前に異なり、社會の事物は既に文明開化の方向を定めて變化ある可らず、時勢の方向に變化なければ、身の方向を定むるも亦甚だ易し、學業を勤むるにも、之を

勤めて其行く先きは、所得の藝能を人事の何れの邊に活用して如何なる生計を營むべしと、大凡そ其胷算を立ることも難からず。且今日は世祿の家なくして、勞働の身あるのみ、勞すれば以て食ふ可し、逸すれば以て飢ゆ可し、況んや金力獨尊の時勢に推し移るの時に當り、貧は士の常など云ふ陳腐至極の考へを抱へて、獨り自から得意ならんとするも、誰か之を許す者あらんや。むかしの學問は學問が目的にして、唯その難きを悅び、千辛萬苦即ち千快萬樂にして餘念なかりしものなれども、今の學問は目的にあらずして生計を求むるの方便なり、生計に緣なき學問は封建士族の事なりと云はざるを得ず、即ち余が如きは前年士族流の學問したるものなれども、今の後進生は決して斯る無謀の擧動を再演す可らず、封建の制度既に廢して士族無經濟の氣風尙ほ學生の中に存ずるは、今日天下の通弊なり。是れ即ち余が本塾の學生諸氏に向ひ、余が

經歷に倣はずして、善く今日の時勢に應じ、成學即ち實業の人たらんことを勸告する由緣なり。

後進生に望む

頃時發兌の歌舞伎新報を見るに、

前略、過日尾上菊五郎の宅へ、垢染みたる布子一貫ひらぐけノメリの疊附といふ拵らへで、勝手口に腰を屈め、ヘヱ誠に濟みませんが、友達が間違へを仕やしてと、跡は云はねど、梨園社會に未だ弊の拔けぬ錢貰ひは毎度の事と、何程か摑んで遣るを手にも觸れず、モシ楊枝や附木を持て來る婆さんじやあるめへし、此方の家で已達が是んばかり堂なるものかと云ひながら、臺所へ上り込み、ヲイ旦那に御目に懸りてへ、イヤサ親方に逢ひてへと、五詫の間にヲイ一服貸して呉ねへ、ナニ火は持て居やすと袂からマッチを出し、煙草を吸ひながら、邊りを見廻し、いつもご繁昌でお愛度ムへやす抔云ふを、梅幸(菊五郎を云ふ)聞附け、堂やら其場へ立出づる樣子ゆゑ、今出ちやァ往ません、幾干か遣て返しますから、最些と其方に、ナァニ留公錢は幾干でも遣て呉なだが、其形の拵らへと樣子を已に尠し見せて呉れ、而してもつと何か云はした上で返してくれと言ひつゝ這出し、内の者の後へそつと廻つて袖の間より眞に覗いて居たよし云々。

蓋し菊五郎が悪漢の來るを懶しとせずして、竊に其言語擧動に注意せしは、移して演劇場裏に自ら其眞を寫さんが爲めの丹精なるべし。是れ特り悪漢に於てのみならず、途に老爺に逢へは、老爺の容態に注目し、官吏を見ては官吏の擧動に心を留め、婦人にても、書生にても、極微極細の點に至るまで、精密に之を査察吟味するは、異日婦人を裝ひ、悪漢を扮し、

官吏となり、書生となりて、頃刻の間千變萬化すと雖も、官吏は毫も官吏に異ならず、婦人は恰も婦人の如くにして、決して老婦に壯士の臭氣を留めず、君子に惡漢の痕跡を遺さず、變化自在、扮裝直寫の妙を演ぜんと欲するが故なり、其心掛け神妙なりと云ふ可し。扨我輩は菊五郎が自家の技藝に心を用ふるの深きを感ずると共に、天下の後進に向て、其心身の運用變化渾て此の如くならんとを企望するものなり。抑も人間の風采は其境遇と互に相應せざる可らざるものにして、商人には商人の風采あり、紳士には紳士の風采あり、若しも商人にして商人の風采なくんば、商賣の繁昌得て期す可らず、紳士にして紳士の風采なくんば、其處世の道にて妨害に逢ふこと少からざる可し。風采態度の如何は、固より外形に屬すと雖も、其人に接するに當りては、無限の意味を含蓄するものにして、一身の利害に關係するところ極めて淺からざれば、奈破翁の如き英雄と雖も、時々俳優を召して己れが態度を容づくらしむるの常にして、今尚ほ寫眞像に見ゆる彼老將軍が、双腕を交叉して恰も洋字Xの體をなし、以て威儀品格を裝ふたる風采は、即ち俳優の指南に出たる者なりと云ふ。左れば人々各その風采動作に注意して、商人は商人の如く、紳士は紳士の如く、身分と共に變化するの要を忘れずして、笑を俳優に取るとなきは、固より大切の儀なりと雖も、茲に我輩が後進に望む所は、啻に其外形のみに止まらずして、心事も共に身の境遇と與に變化せんとの一事なり。蓋し文明の世務の複雜なる、一身にして種々の境遇に際會するを免れざるの常なれば、其時に隨て、風采態度の變化を必要とするに同じく、心の運用も亦之に伴はざる可らず。政治を談ぜんと欲すれば、政治の思想なかる可らず、理學を進めんと欲すれば、理學の心事なかる可らず。若し夫れ徒に一事物にのみ拘泥して、一能の外他に能はざる

者は、是れ則ち器物の類のみ、君子は器ならず、唯運用自在なるを貴ぶ。米國の英蘭麒麟氏は新世界の聖人と聞えたる人なり、而して其一代の事歴を按ずれば、或時は新聞紙を發行して、活版事業を執り、用紙を運搬せんが爲に自から車を挽き、又或時は紙鳶を飛ばして迅雷を捉へ、英國の壓制に抗して革命の主唱者となり、佛國に使して援軍を求め、航海の途中に大西洋の潮流を測量し、火災保險、生命保險、其他諸會社の基本を工風組織する等、これのみにても既に理學者となり、實業者となり、又外交家となり、政治家となりて變化少からずと云ふ可し。近く本朝の豊太閤に例せんか、其初め奴僕たるの時に於ては、奴僕として甲斐〳〵しき男なり、作事奉行となれば、作事の役義に就き、正直活潑にして欠ぐる所なし、續て謀師となり、國主となり、關白となりて、其經歴頗る多しと雖も、到る處、用ふる處として適せざるはなく、夫の千里の才は百里の才に非ず

抹いふが如き、僻然たる偏僻者流の比に非ざりしは、我國人の夙に熟知する所にして、太閤の心中綽々然として其運用の自在なりしを察するに足る可し。世に處して事を成す者は、主として此邊の心得なかる可らざる筈なれども、顧みて我邦人一般の有樣を察すれば、士族は轉して商賈となると能はず、如何となれば士族なるが故なり、百姓は學者となることと能はず、如何となれば百姓なるが故なりとて、自ら求めて人事の境界を縮め、學者は學問を脩めて、學問の外に餘地を與へず、商賈は商業を營んで、商業の外に他を顧みるを知らず。偶々その事業を轉ずることあるも、昨日の心身を今日に持參して、依然舊筆法を改むると能はざれば、失敗も亦當然の數にして、果して失敗すれば、其失敗の口實には、唯能はざるが故に能はずと云ふの外なし。斯る偏屈なる心得を以てして、今の煩雜なる人世に處せんと欲するは、抑も迂濶の至りなるのみか、一部局

の習僻に執着して、他に變通流用の餘地を殘さゝるは、亦是れ一種不具の人と云ふも可なり。今の日本社會には身に相應の才智技倆を抱きながら、常に職業を得ずとて不平を鳴らす者少なからざれども、其これを得ざるの罪は果して何れの方に在るか、人に在るか、職業に在るか、職業の人に適せざるが爲めか、人の職業に適せざるか爲めか、職業の種類は限りなくして、人の才智技倆は一色に限り、更に變通の餘地なしと云ふ、其無事に苦しむも亦怪しむに足らざるなり。我輩敢て此流の人を責るに芙蘭麒麟、豐太閤を以てするには非ざれども、其處世の際に、事の大小輕重を問はず、又其雅俗正變に論なく、常に仔細に注意して、勉めて心身の働を習練し、物と共に推し移りて、苟も凝滯することなく、隨時その物に就て有用の人たらんことを祈るものなり。

然りと雖も心身の變通運用を自在ならしめんと欲するには、一舉手一投足も容易に能はざる所にして、既に年老ひ、心癖するに及んでは、又動かす可らざるものあり。喩へば草木を培養するが如し、枝幹苔蒸して屈曲蟠旋するの後に至れば、假に之を横斜直立せしめんと欲すと雖も、事頗る困難にして、到底意の如くなる能はざるものなれば、青年芽出しの始めこそ、最も培養の好時節にして、此際豫めよく注意するの外ある可らず。是れ我輩が特に天下の後進に向ひ、俳優菊五郎の所爲に猛省して、曾に其外形の容態のみならず、隨時隨處に心事の變通自由自在なること、菊五郎の扮裝に等しからんを希望する由緣なり。

物理學の必要

我輩が諸氏と共に勉強し遵奉して信ずる所の西洋學と、古來日本國に行はれて有力なりし和漢の古學流と、其相異なる所一にして足らずと

雖も、異點の著しくして爭ふ可らざる所のものを擧れば、輓近西洋學の根本は有形の實物に據りて數理を明にし、我古學は之を等閑にして問はざるに在るのみ。故に道德論と云ひ、政治論と云ひ、又文章論と云ふが如きは、無形の議論にして、東西孰れを是とし、孰れを非とす可きや、論者の所見次第に任せて、之を明斷すること易からず。或は經濟學に於ても、物の形と數とを離れたる部分に於ては、雙方を比較して其得失遂に分ち難きもの多しと雖も、獨り有形の物理に至ては、恰も西洋學の專有にして、和漢古來その原素なしと云ふも可なり。勿論支那にても日本にても、天然の物に人爲の變形を施し、以て人事の用に供し、鐵を採て刃物を作り、木石を切て家を建て、穀物を釀して酒を造り、綿を績で衣服を製するが如き、其成跡を見れば、皆物理に據らざるはなしと雖も、其これに據るや、學問上の眞理原則を辨へて然るに非ず、唯偶然の僥倖に得たる所

を其まゝに利用し、夢中の練磨を重ねて夢中に改良したるものなれば、如何に成跡の美あるも、學問上より視るときは、更に賴むに足らずして、眞實の改良進步は望む可らざることゝ知る可し。左れば社會の改良富實を求むるの一法は、實物に在ること疑もなき道理にして其實物の數と形と性質とを講究するは、西洋物理學の本色なるが故に、苟も今日の洋學に志す者は、其諸學科の根本として、物理を講ずること最も緊要なりとす。假令へ無形の遺德論にても、又は政治、文學論にても、其立言の主義、時として物理に外るゝものあるときは、學者社會に棄てられて顧みざる所と爲る可し。蓋し本塾に於て物理學の專門は設けざれども、普通の課業として、專ら之を奬勵するも、之が爲めなれば、諸氏に於ても決して等閑に附す可らず。殊に學業の漸く上達して諸種の文を講じ、理論を談ずるの場合に至るときは、恰も學問の佳境に入りたる思を爲し、顧み

て物理などを學ばんとするも甚だ面倒にして、遂に生涯の迂濶を致すことあり、多年來余が教育の實驗に知る所なれば、物理の一課は就學の初に於て特に怠る可らざるやう異々も祈る所なり。

物理學の專門家は世間に自から其人あり、或は諸氏の中にも今後專門に入る者もあらんなれども、其專門と普通とに論なく、平生學び得たる所のものを日常の人事に活用することと最も大切にして、之を活用するとせざるとの相違は、正しく學者と無學者と相異なるが如し。學んで實用を爲さゞる學問なれば、初より學ばざるの優れるに若かざるなり。西洋の一話に、或る大先生が冬日火邊に、獨り讀書の折柄、隣家の小女が入り來りて火の種を一つとの無心に、安きことなりとて之を與へんとはしたれども、扨座右に火の入れ物なかりければ、如何はせんと先生も當惑の體なりしに、小女は灰を左の手の掌に入れ、右の手に火箸もて火を

挾み、其灰の上に置き、一禮述べて颯々と出行きたるにぞ、大先生は唯茫然として之を見送り、古稀の年齡數千萬卷の書を讀了して、其物理上の頓智は六七歳の女子に及ばざるこそ心外なれとて、獨り慚入りたりと云ふことあり。左れば物理學は萬物を包羅し、其高遠に限なく、又その近淺に限なし。而して古今の事實を見るに、高遠なる學者は隨分乏しからざれども、其學問をして高遠の點に位せしめながら、近淺なる人事に活用する人は甚だ多からざるが如し。故に諸氏もよく〳〵此邊に心掛けて、日常の一擧一動苟も物理の主義を等閑にせず、座邊のランプ、火鉢の始末、下駄傘靴の用法に至るまで、輕々に看過することなく、飲食衣服の物に逢へば、生理學の原則を活用し、寫眞屋に行けば、化學の理を案じ、普請を見れば、器械學の說を玩味する等、今日就學中にも實際の工風を運らすに其物決して乏しからず、況んや塾を去て鄉里に歸るの後に於て

をや、居家の經營、戸外の事業一として物理の範圍内に在らざるはなし、身外の萬物都て數理外に逸するものなしとして、須臾も此理に離るゝなからんこと我輩の特に勸告して止まざる所なり。

又學問は物理のみにあらず、其區域甚だ廣く、諸氏の今正に勉强する所にして、脩業中は學問の外に餘念なく、一刻千金其時を空ふせずして刻苦す可きは勿論、即ち自身の利益の爲めなれば、敢て他の勸告を要せざる所なれども、斯く勉强刻苦すればとて、人は即ち人にして死物にあらざれば、書生中にも自から交際なからざる可らず、又他人に接するの要用もあることなれば、常に自から紳士の資格を失はず、博識多藝に兼て禮義を重んじ、言行優美にして苟も他の輕侮に逢ふことなきを勉めざる可らず。古人の敎に巧言令色を不德なりとして戒めたるものあれども、是れは唯極端の弊害を示したるまでのことにして、例へば賤丈夫が

人を欺て利を貪らんとし、己が不正不品行を蔽ふて名を得んとするの爲めに媚を獻ずればこそ忌む可きなれども、詐僞不正不品行は必ずしも巧言令色に伴ふ可きに非ず、俯仰天地に耻るなき獨立の君子にして、人に交るに言語を巧にし、顏色を令くし、其風采の秀たるは紳士の美德として最も慕ふ可きものなり。學者の流弊は學問の活用を忘れて學問に凝るに在り、書を讀み、理を講じて精神の緻密高尙なると共に、人事を等閑にする其趣は、圍碁將棋の藝に凝りて國手と稱せらるゝ人の中に、武骨殺風景なる者多きが如し。川柳に「あの馬鹿が本因坊に二もくかや」と云ふことあり、即ち圍碁に熱心にして次第〳〵に上達すれば、次第〳〵に人事を忘れ、遂に人間交際の外に擯斥せられて、愚人の評を蒙るにまで至るの事實を喞りたるものならん。故に我輩は諸氏に向て學問の要を說き、之を勸めて止まざると同時に、又この學問に凝ることなくして、

常に之を活用し、其活潑の氣風外に發して風采の優美ならんことを祈るものなり。

須く政論の上戸となるべし

人間に下戸と上戸と性質を異にするは如何なる生理にや、未だ一定の說あるを聞かず、一盃の酒に酩酊して苦しむ者あれば、飲めば飲むほどます〳〵酒味を愛して、容易に醉はざる者あり、畢竟先天の遺傳に存することにてもあらんか、一見不思議なるが如くなれども、爰に又不思議なるは、下戸にても酒席に屢々して、俗に云ふ酒の修業するときは、次第〳〵に酒量を進めて、遂には數盃の太白を傾けて、尙ほ之に堪ふるに至るものあり。此趣を見れば、下戸も必ず先天とのみ云ふ可らざるが如し。今この酒量の一例を適用して、政治社會の事情を語らんに、政論も亦是れ一種の酒にして、人々に下戸上戸の別あるを見る可し。政治に關する書籍新聞紙を讀み、又は一場の演說を聞き、些々たる利害是非の爲めに、忽ち熱心して狂奔煩悶するは、政論の下戸にして、其論說の刺衝に堪へざるものなり。之に反して、獨立卓識の君子は政論を知らざるに非ず、之を知り、之を詳にして、又これを樂しみ、漸く佳境に入りて玩味頻りなりと雖も、曾て之に狂することなきは、政論の上戸にして、酩酊し難きものと云可し。蓋し政論の刺衝も猶ほ酒の如くにして、之に堪ふると堪へざるは、人々の先天に由來することもある可しと雖も、普通の場合には空腹の爲めに醉ふ者多きを見る可し。生來高尙の敎育なくして、殊に西洋文明の精神を知らず、僅に家庭に訓えられて儒流の經史を見るか、又は昔年小學校の卒業以來少しく翻譯の書を讀むのみにして、腦中の知見甚だ淋しき者が、頓に流行の政治談を聽聞して、之に驚き、自から自身の

在る所を忘れて狂態を呈する其有樣は、空腹酩酊の容躰に異ならず。左れば此政論の醉狂を防ぐの手段は、唯その人の腦を充たすに、文明の知識聞見を以てして、兎にも角にも流行政論の刺衝に堪ふるの用意專一なるのみ。政論の下戸は必ずしも先天に非ず、腦中の空しきが爲めなり、腦中いよ〳〵空しければ、政治上の輕躁も亦いよ〳〵甚だし、其證據は今日の實際に就て見る可きもの多かる可し。

我慶應義塾は多年來特に政論に靜なるを以て名あり、其靜なるや言論を禁じて靜なるに非ず、塾中の學生にして課業の餘暇には如何なる政書を讀み、如何なる政論を論ずるも一に其自由に任して、他より之を是非する者なしと雖も、實際に於て義塾の學生が政治に醉狂して、云々との沙汰少なきは何ぞや、學生が政論を知らずして默するに非ず、唯その腦中の空虛ならざる爲めに醉はざるのみ。而して其腦を充たすものは、文明獨立の大義にして、日々の課業に得る所、業餘に讀む所、一として獨立の材料たらざるものなし。老生の最も滿足する所にして、今後も永く此方針を改ることなく、いよ〳〵ます〳〵知見を集めて深く之を藏め、天下の政狂を傍觀して、獨り自から政論の上戸と爲り、他年業成り、塾を去りて、或は政治上に爲すことあらんとする者は、大に爲す可し、老生は決して之を留むる者にあらざれども、半解半知の少壯輩が、未だ其一身を處するの道をも得ず、產なく家なく、智なく能なくして、世間に奔走し、政治社會の塵埃と爲りて終身を誤る者は、我慶應義塾の朋友に非ざるなり。

人生の樂事

人には何か樂しむ所のものなかる可らず、旅行を好む者あり、閑居を貪

る者あり、遊藝を嗜む者あり、書畫骨董を悅ぶ者あり、尙ほ之より以外には、財產の增殖に餘念なき者もあれば、功名利達に熱心なる者もあり、其他千種萬樣限りなき人事の運動は、浮世の人々がおの〳〵其心を樂しましめんとするの働にして、或は之を其人の樂しみと云へば、又其志とも云ふ。諸君にも必ず何か樂しむ所、志す所のものある可し、折々に相會して之を語り、之を論ずるこそ面白けれ。今晚は老生が壯年の時より今に至るまで、曾て一日も忘れたることなくして、遂に今に至るまで意の如くならざりし一快樂事の想像を語らんに、老生は本來儒學生にして、今を去ること四十年、年齡二十の頃始めて洋學に志し、其入門は物理學にして、之を悅ぶこと甚だしく、何か一科の專門に入りて爲すことあらんとの熱心は萬々なれども、時勢の許さゞる所にして、家に資力もなく、朝暮衣食の計に忙くして、心を專一にすること能はざるのみか、開國以來の世變を見れば、自から默止す可きにも非ず、色々の著述などして、時を費したるとも多し。左れども物理學の一事は、到底心頭を去らずして、之を思へば、いよ〳〵面白く、獨り心に謂らく、造化の秘密、誠に秘密なるが如くなれども、化翁必ずしも之を秘するに非ず、人の之を探究せざるが故なり。蒸氣電氣の働は開闢の初より明に示す所なれども、人間の暗愚なる、久しく之を知らずして、漸く近年に至り、始めて其端緒を探り得たるのみ。今後とても人智の次第に進步するに從ひ、いよ〳〵之を探りて、いよ〳〵之を知り。其知り得たる上にて、未だ知らざる時のことを思へば、唯人間の暗愚なりしを悟るのみにして、今日は學界尙ほ暗黑の時代と云ふも可なり。此時に當り、一意專心物理を探究して、造化の秘密を開くは、人間無上の快樂にして、王公の富貴榮華も羨むに足らず、之を眼下に見て、其生活の卑俗なるを憐むと同時に、自家の空想を逞ふし、例へば

動植物生々の理、地球の組織、又その天體との關係、化學の働は果して何れの邊にまで達す可きや、宇宙勢力の原則は果して既に定まりたるや否やなど、仔細に之を思へば、千百の疑問際限ある可からず、滿目恰も造化の秘密に圍まれて、唯人智の淺弱を嘆ずるのみなれども、いよ〳〵進んで、いよ〳〵深きに達し、曾て底止する所を知らざるも、亦是れ人生の約束なれば、勇を鼓して知見の區域を擴め、恰も化翁と境を爭ふは、是ぞ學者の本領なりと、深く信じて之を疑はず。殊に我日本國人の性質を見るに、西洋文明の新事を知りしは輓近のことなれども、智識の敎育練磨は千百年來生々の遺傳に存して、新事の理を解するに苦しまざるのみか、起首原造の天資に乏しからずして、洋學開始以來、單に西洋を學ぶの時代は、既に經過し、今は學問場裡に彼我併立の勢を成して、今後我學者の勉る所は、唯彼に對して、先鞭を着るに在るのみ、實に日本國の一大快事

なれども、唯こゝに遺憾なるは、其學者をして一意專心ならしむるの手段に就て意の如くならざるもの多きの一事なり。如何なる學者にても其身匏瓜にあらざれば、衣食の計なきを得ず、然るに生計は人生に最も煩はしくして、學者の思想を妨ぐること之より甚だしきものある可らず。獨坐沈思、宇宙無邊の大より、物質微塵の細に至るまで、其理を案じ、其働を察し、乍ち得たるが如くにして、又乍ち失ひ、恍として身躬から其身の在る處を忘れ、一心不亂、耳目鼻口の官能も殆んど中止の姿を呈したる其最中に、突然家計鹽噌の急に促され、金錢受授の俗談に叫ばるゝが如きありては、思想の連鎖一時に斷絶して、又舊に復するを得ず、之を喩へば熟眠、夢方に酣なるのとき、面にザブリと冷水を注がれたるが如く、殺風景とも苦痛とも形容の詞ある可らず。世間一般の人は左程に思はざる可けれども、唯學者にして初めて此苦痛の苦味を知る可きのみ。今

日の實際に於て、政治家に哲學者なく、新聞記者に物理學の專門家少なく、開業醫師に學醫稀にして、說法僧に善知識を見ざるも、自から偶然に非ず。左れば今この學問の妨害を除て專一ならしめんとするには、學者に衣食の資を給して、物外に安心せしむるの一法あるのみにして、竊に其方法を案ずるに、法律規則を以て組織したる政府の筋には固より依賴す可らず。今の不學なる俗政府の俸給などに衣食し、俗物に交はり、俗言を聞き、甚だしきは其俗物の干涉を被り、催促を受けながら、學事を研究せんとするが如き、其無益たるは云ふまでもなく、假令ひ或は世間有志者の發意を以て、私に資金を給せんとする者あるも、其これを給するや、公共の爲めにも、私の爲めにも、近く實利益を期するが如き胷算にては、本來の目的に齟齬するものなり。老生が眞實の目的を申せば、爰に一種の研究所を設けて、凡そ五六名乃至十名の學者を撰び、之に生涯安心

の生計を授けて、學事の外に顧慮する所なからしめ且その學問上に研究する事柄も、其方法も、本人の思ふがまゝに一任して、傍より喙を容れず、其成績の果して能く人を利するか、利せざるかを問はざるのみか、寧ろ今の世に云ふ實利益に遠きものを撰んで、其理を究め、之を究めて之に達せざるも可なり、之が爲めに金を費して、全く無益に屬するも可なり、其人の一生涯に成らざれば、半途にして第二世に遺すも可なり、或は其人が病氣の時に休息するは勿論、無病にても氣分に進まざる時は業を中止す可し、勤むるも怠るも、都て勝手次第にして、俗に云へば、學者を飼放し又飼殺しにすることなり。斯の如くすれば、萬事不取締にして、迚も實効を奏することなしと思ふものこそ多かる可けれども、元來學者の學を好むは、酒客の酒に於けるが如くにして、傍より之を制す可らざるのみか、自から禁ずる能はざる所のものなれば、所謂飼放しは其勉强

を促すの方便にして、俗界に喋々する規則取締等こそ眞に學問を妨ぐるの害物なりと知るべし。凡そ此邊の趣向にしたらば、日本の學者も始めて能く其本色を現はして、辛苦勉勵、心身の力を盡し、遂に造化の秘密を摘發して、世界中の物理學に新面目を開くこともある可し。試に實際の費用を概算するに、十名の學者に一年千二百圓を給して、共計一萬二千圓(此種の學者は世間に交際も少なく、衣食住の邊幅を張らんとするが如き俗念もなく、物外に獨立して他を顧みざること、恰も仙人の如き者なれば、一年の生計千二百圓にて十分なる可し)此外に一名に付き、毎年凡そ二三百圓を生命保險に掛けて、死後の安心を得せしむるの要もあれば、學者の身に費すもの凡そ一萬五千圓として、他は研究の費用なり、其高は際限なきことなれども、假りに先づ三萬五千圓とすれば、兩樣合して五萬圓を毎年消費する勘定なり。或は右の如く計畫しても、十名中に死する者もあらん、又は中途にして研究所を脱する者もあらん、又は不德義にして怠る者もあらんなれども、十名共に全璧ならんことを望むは、有情の世界に無理なる注文にこそあれば、十中の五にても三にても、前後節を改めずして確乎たる者あれば、以て足る可し。一人の學力能く全世界を動かすの例あり、期する所は唯その學問の高尚深遠に在るのみ。

以上の趣向は老生が壯年のときより想像する所にして、人に語るも無益なるを知り、一二親友の外に口外したることもなく、人生の運命は計られず、萬に一は自分の身に叶ふこともあらんかと、獨り竊に夢を畫きたることもなきに非ざれども、畢竟痴人の夢にして、迚も生涯に叶ふ可き事に非ず。左れば今滿堂の諸君は、年尚少し、一生の行路に幾多の禍福に逢ふは必然の數にして、或は大資産の身と爲り、衣食餘りて別に心身

の快樂を求め、特に大に好事心を逞ふせんとして、其方法を得ざるが如き場合に際するともあらんには、むかし〳〵明治廿六年十一月十一日、慶應義塾にて云々の演說を聽きしともありと、之を思出して何か面白き企もあらば、老生の生前に於て之を喜ぶのみならず、假令ひ死後にても、草葉の蔭より大贊成を表して、知友の美擧に感泣するとある可し。

富豪の處世法

近年本塾の學生には各地方富豪の子弟最も多數なるが如く見ゆるに付ては、學生諸氏が成學歸鄉の時の土產、又現在鄉里の父兄達か居家處世の參考にもと思ひ、近頃心付きし次第を取集めて諸子に語らんとす。扨その大概を申せば、無き財產を作り出すと、有る財產を守ると、兩樣何れが難しと問へば、兩ながら共に難しと答へざるを得ず。其趣は政治上に創業と守成と難易を判つ可らざるが如く、世の中に家を興す者あれば、又これと亡ぼす者も多し。からやうで賣據と書く三代目とは、古き川柳なれども、能く興廢の世相を表し得たるものと云ふ可し。人事の秩序整齊して、四海の波靜なる世の中に於ても、尙ほ且つ然り、況んや今の日本國は兵馬騷亂の沙汰こそ聞かざれども、人間萬事定りなくして、朝に變り、夕に改まり、人心の騷々しきと兵馬の亂よりも甚だしき時節に於ておや。斯る時に當りて、富豪の主人が家の財產を守り、之を永遠に維持して、世間の侮を防がんとするは、容易なる苦勞にあらざるなり。地方の報告を見れば、誰れは何國何郡屈指の大家なりしが、數年來の失敗に、今は其の住居の家屋さへ他人の手に渡りたりと云ひ、何某は商機に頴敏にして、一時に奇利を博し、其向ふ所に敵なしとの評判なりしも、忽ちに顚覆して、昨今は再び本の無一錢に復りたりと云ふが如きは、誠に珍ら

しからざる談にして、之を在昔德川時代の富豪が、恰も其家産を世祿同樣にして、子々孫々に傳へたるものに比すれば、固より同日の論にあらず。財産維持の法は今後いよ〳〵難きを知る可し。此事に就ては、我國人も近來漸く心配を催ほしたることゝ見え、我輩が每度地方の富豪に面會して、談話の語次それとなく諮問せらるゝこともあり、又其邊に付き文書の到來も少なからず、固より六箇しき問題なれば、之に對して絶妙なる返答のある可きにあらざれども、時々の談論、又文通に示したる鄙見の次第もあり、即ち近頃心付きし所のものにして、其當ると當らざるとは諸子の判斷に任ずるのみ。

第一家産を守らんとするには、時勢相應の學問なかる可からず。在昔の富豪が身代を維持するに、學問を要用とせざりしのみならず、却て之を害なりとして、子弟に讀書を禁じたる事例さへありしなれども、是れは當時士族と百姓町人と上下に相分れ、上流の士族は學問を專にして、金錢の事を言はず、下流の農商は殖産に忙はしくして、學事を顧みず、雙方恰も相犯さゞるの分限を成したる時代に適當す可きのみ。今や此時代は過ぎ去りて、兼て學問を專務としたる士族の流も、漸く其面目を改めて、金錢の領分に侵入し、漸く農工商の事を企る場合に立至りたるに付ては、從前の農工商が、學問は我家の事にあらずなどとて、油斷することもあらんには、士族學者の流は遠慮なく殖産の社會に切込み、所謂文明の風潮に乘じて、新工風を運らし、舊富豪の目を眩して、其業を奪去るの活劇を見る可し。既に今日に於ても、我全國の銀行なり、海運なり、又は鐵道の事なり、諸製造の業なり、凡そ理財殖産の大事業と稱するものは、大抵皆士族學者流の手に歸し、從前の富豪は、恰も其制を仰いで左右せらるゝ者多きにあらずや。商人等の言を聞けば、士族學者の商賣は見るに

足らず、机の上の修業を以て、商賣活世界の錢を儲けんとは、片腹痛しなどゝて、之を蔑視して自から得々たるものなきに非ず、亦實際に於ても、學者の商法に失敗は甚だ少なからずと雖も、詳かに事の次第を見れば、一概に斯くと斷定し難きものあるが如し。學者が今の商賣社會に出でゝ、從前の商人等に立向ひ、直に目下の利益を爭ふは、銃兵隊伍の法の開けたる世に、刀劍を以て勝負を決するに異ならず。舊來の商人等が小商賣の掛引に敏きは、恰も劍術の達人にして、今の商賣の戰場に左まで大切なる者に非ず。故に我輩は敢て手錬を不用なりとして棄つるにはあらざれども、唯其巧拙のみを論じて、學問の事を度外に置くが如きは、感服せざる所なり。年期奉公を終りて、次第に立身したる兩替屋の番頭は、一錢の得失にも抜目なくして、頴敏なりと雖も、大銀行の頭取役は其任に非ず、廻船問屋の主人は客に接して旨しと雖も、汽船會社の社長に用ふ可らず、其然る所以は何ぞや、銀行又は汽船海運等の事務は、正々堂々の商賣にして、其趣は文明の兵式に規律正しきが如く、自から學問上の知識見聞を要するが故に兩替屋廻船問屋の手練を以て之に當る可らざればなり。左れば今日殖産の社會に、漸く學問の要を感じて、既に其風潮を成すこと斯くの如くなるに於ては、富豪家の財産も、又この風潮中の物なれば、學問以外に之を維持せんとするは、到底叶はざることゝ知る可し。或は今の都鄙の富豪中には、學問の心得なくして尚ほ家を成す者少なからずと雖も、畢竟舊風習の餘勢に乘じて然るのみ。今後一年又一年、意外新奇の出來事に逢ひ、之に逢ふ毎に方向に迷ふて、何時しか家門の衰頽を致すべきは、勢に於て免る可らざる時運なれば、之を防ぐの方便は、早く後進の子弟をして學に就かしめ、以て後年の圖を爲し、父兄も亦家事を執るの傍に、文明の知見を以て耳目を養はんことこそ願は

しけれ。富豪の家を守るに、學問の大切なる次第は、前條の如しとして、扨その學問とは如何なるものぞと尋ぬるに、天地間に在る有形物の理を究めて、之を人事に利用すると、人生に固有する無形の心を視察して、群居を安くするの方便より外ならず、即ち甲は天文、地理、化學、器械學等の種類にして、之を物理學と名け、乙は心學、法學、經濟學等にして、之を人事學と總稱す可きものなり。凡そ人間世界に生々する者は、當人に於て知らざるとこそ多からんなれども、其生まるゝも、其死するも、食ふも着るも、喜ぶも哀しむも、親しむも爭ふも、和するも戰ふも、悉皆右の學理の外に洩るゝものあらざれば(宗教論は別問題として)、苟も人類として此世に現はれ出たる限りは、正に其身を托する學問の事をば度外に置く可らず。假令へ專門の學者ならざるも、學問を信じ、學問を心得る丈けの嗜はなかる可らず、如何となれば人間世界は學問の世界にして、此世界に居ながら學事を知らざるは、空氣の中に呼吸して、空氣あるを知らざる者に等しければなり。左れば學問の性質効用は、右の如くにして、又これを學ぶの一段に至りては、人々の身の有樣に從ひ、自から異なる所のものなきを得ず。第一は學問を學び得て、之を生涯の本職となし、或は書を著はし、或は人に教へ、又或は發明工風に精神を凝らして、以て世の爲めにし、又自から生活の爲めにする者これを名けて學者と云ふ。第二は專門の一科學を學び得て、直に之れを人事に施し、以て自他を利する者なり、例へば化學、器械學を學んで、製造の業を執り、土木科を脩めて、鐵道敷設に從事し、法學を卒業して、代言を事とするが如く、一科の學問を一科の人事に適用する者にして、之れを名けて學術の事業家と云ふ。以上二類は所得の學問を其まゝ利用して、身を立て、家を興すものなれば、即ち無き財産を作るの方便として、學問を學び、學問を用ふる者なり。或は富

豪の子弟にして、純然たる學者と爲り、又學術の事業家と爲る者もあらんなれども、是れは人間生活の計に迫られたるに非ずして、其本人の好事功名心に出でたることなれば、必ずしも既に有る財産を守るが爲めの要用とは云ふ可らず、如何となれば富豪の主人が大學者ならざるが故に、家を亡ぼし、學術の事業を親らせざりしが故に、財を失ふたるの談を聞かざればなり。然かのみならず、其學者の偏窟熱心なるに至りては、浮世の人事に迂濶にして、却て産を破りたるの例さへある程の次第なれば、純粋の學問技術は富家守成の方便に非ずと雖も、唯我輩が社會全體の利益の爲めに謀り、貧人の子弟をして高尚の學に就かしめ、其心事と其衣食と平均を得ずして、却て當人を苦しめんよりも、衣食既に足る者が自身の好事又功名心の爲めに、奮ひて學業を大成し、以て國益民利を致さんことを祈るのみ。

右の次第なれば、唯經濟の一點より論じて、富豪の爲めに、其財産を維持し、又隨て貨殖するの法を謀れば、必ずしも高尚の學者たるを要せず、又專門の藝術家たるにも及ばず、唯その智識見聞を博くして、物理學、人事學の要略を知ることと大切なるのみ、即ち是れ學問第三の道にして、其人を稱して普通學者と云ふ。之を喩へば高尚專門の學者は、宗教に於て法を說く者の如く、普通學者は法を聽く者の如し、說く者も聽く者も共に宗教部内の人なれども、甲は其宗教に身を委ねて、之を終身の本職と爲し、乙は他に人事を營みながら、之に信心歸依するの別あるのみ。而して其信心者なりとて、身に教法の要を知らざれば、所謂盲信にして、方向も分つ可らざることなれば之を知るが爲めには、自から教書を讀み、又教法を講究せざる可らず、即ち教法上の心得にして、此心得ありて始めて眞の信者と云ふ可し。左れば今富家の人が單に其私有の財産を保護す

るの目的を以て、學問に志さんとならば、其學問は普通學を要するのみ、即ち宗教にて云へば、信者たる可きのみ、說法者たるを要せざるが如し。例へば富豪の家を治め、世に處せんとするには、大勢の雇人をも使用し、又世間の交際も狹からず、金錢の貸借、商賣の取引、組合の事業、會社の組織、地面家屋の賣買より、田舍にては、小作人の取扱等に至るまで、其事極めて繁多なれば、之に當る可き知見も亦極めて繁多ならざるを得ず、法律なり經濟なり、又物理なり、其大概の主義を知るに非ざれば、常に不利なるのみならず、何かの事變に逢ふときは、大に狼狽して節度を失ふとある可し。十數年來の世狀を見るに、都鄙の舊大家にして滅亡したるもの甚だ少なからず、固より樣々の事故に由るとは云へども、今の經濟の理に暗くして、漫に新事業を起し、物理器械の何ものたるを知らずして、製造所を作り、或は貸借取引に法理を解せずして、意外の損亡を被るの

類、比々皆然らざるはなし。此流の大家にても、必ずしも愚なるに非ず、むかしの世ならば、隨分無難に世を渡りて、祖先の家を全うしたることなら、んなれども、文明の風潮は劇しきものにして、舊習慣の働きを許さず舊時の無學を以て、今の新世界に運動せんとするは、蓋し望む可らざる所なれば、我輩は敢て天下の富豪に向て、難きを促す者にあらず、其私產保存の爲めに、尋常普通の學問を勸むるのみ。

文明教育論

今日の文明は智惠の文明にして、智惠あらざれば何事もなすべからず、智惠あれば何をもなす可し、然るに世に智德の二字を熟語となし、智惠と云へば、德も亦之に從ふものゝ如く心得、今日西洋の文明は智德の兩者より成立つものなれば、智惠を進むるには德義も亦進めざるべから

ずとて、或る學者は頻りに道德の敎を布き、以て西洋の文明に至らんとする者あり、固より智德の兩者は人間に欠ぐべからざるものにて、智惠あり道德の心あらざる者は、禽獸に齊しく、之を人非人と云ふ。又德義のみを脩めて、智惠の働あらざる者は、石の地藏に齊しく、之れ亦人にして人にあらざる者なり。兩者の共に欠ぐべからざるは、右の如くなりと雖も、今日の文明は道德の文明にあらず、昔日の道德を今日の道德に比すれば、其分量に於ては大に增減あり、即ち古書に載する所を以て果して信とせば、道德の量は却て昔日に多くして、末世の今日に至り、大に其量を減じたる割合なれども、顧て文明の程度如何を察するときは、昔日に低くして、今日に高しと云はざるを得ず。之に反して、智惠の分量は古來今日に至るまで、次第に增加して、智識少き時は、文明の度低く、智識多き時は、文明の度高し。亞弗利加の土人に智識少し、故に未だ文明の域に至らず、歐米人に智識多し、故に其人民は文明の民なり。左れば今日の文明は道德の文明にあらずして、智惠の文明なると復た爭ふ可らざるなり。又小兒の概して正直にして、無智の人民に道德堅固の者多きは、今日の實際に於て疑ふ可らざるとなれば、道德は必ず人の敎に依るものにあらず、恰も人の天賦に備はりて、偶然に發起するものなりと雖も、智惠は然らず、人學ばざれば智なし、面壁九年、能く道德の蘊奧を究むべしと雖も、假令ヘ面壁九萬年に及ぶも、蒸氣の發明は迚も期す可らざるなり。世に敎育なるものゝ必要なるは、即ち此故にして、人學ばざれば智なきが故に、學校を建てゝ之を敎ヘ、之を育するの趣向なり。左れども一概に敎育とのみにては、其意味甚だ廣くして解し難く、爲めに大なる誤解を生ずるとあり。抑も人生事柄の繁多にして、天地萬物の多き、實に驚くべきとにて、其數幾千萬なるべきや、之を知るべからず。唯その物名のみに

ても、悉く之を知る者は世にあるべからず、然るを況んや其物の性質をや、悉く之を敎へんとするも、迚も人力に叶はざる所なり。人間衞生の事なり、活計の事なり、社會の交際、一人の行狀、小は食物の調理法より、大は外國の交際に至るまで、千差萬別、無限の事物を僅々數年間の課業を以て敎ふ可きに非ず、學ぶ可きに非ず、假令へ其一部分にても之を敎へて完全ならしめんとするときは、却て其人の天資を傷ひ、活潑敢爲の氣象を退縮せしめて、結局世に一愚人を增すのみ、今日の實際に於て其例少からず。去れば到底繁多なる事物を敎へんとするも、出來難きとなれば、果して世に學校なるものは不用なるやと云ふに、決して然らず、固より直接に事物を敎へんとするも、出來難きとなれども、其事に當り、物に接して、狼狽せず、能く事物の理を究めて、之に處するの能力を發育するとは、隨分出來得べきとにて、即ち學校は人に物を敎ふる所にあらず、唯其天資の發達を妨げずして、能く之を發育する爲めの具なり、敎育の文字甚だ穩當ならず、宜しく之を發育と稱すべきなり。斯の如く、學校の本旨は所謂敎育にあらずして、能力の發育にありとのことを以て、之が標準となし、顧て世間に行はるゝ敎育の有樣を察するときは、能く此標準に適して、敎育の本旨に違はざるもの幾何あるや、我輩の所見にては、我國敎育の仕組は全く此旨に違へりと云はざるを得ず。誠に今日女子の敎育を視よ、都鄙一般に流行して、其流行の極、頻りに新奇を好み、山村水落に女子英語學校ありて、生徒の數常に幾十人あり抔云へるは、每度傳聞する處にして、世の愚人は之を以て敎育の隆盛を卜することならんと雖も、我輩は單に之を評して狂氣の沙汰とするの外なし。三度の食事も覺束なき農民の婦女子に、橫文の素讀を敎へて何の益をなすべきや、嫁しては主夫の襤褸を補綴する貧寒女子へ、英の讀本を敎へて後世何

の益あるべきや、徒に虛飾の流行に誘はれて、世を誤る可きのみ。固より農民の婦女子、貧家の女子中、稀れに有爲の俊才を生じ、偶然にも大に社會を益したることなきにあらざれども、こは千百人中の一にして、甚だ稀有のことなれば、此稀有の僥倖を目的として、他の千百人の後世を誤る、狂氣の沙汰に非ずして何ぞや。又徒に文字を敎ふるを以て、敎育の本旨となす者あり、今の學校の仕組は多くは文字を敎ふるを以て目的となすものゝ如し。固より智能を發育するには、少しは文字の心得もなからざるべからずと雖も、今の實際は唯文字の一方に偏し、苟も能く書を讀み、字を書く者あれば、之を最上として、試驗の點數は勿論、世の譏譽も亦之に從ひ、能く難字を解し、能く字を書くものを視て神童なり、學者なりとして稱賛するが故に、敎師たる者も、假令へ心中竊に此趣を視て無益なることを悟ると雖も、獨立獨行、世の譏譽を顧ざるとは容易に出來難

きことにて、其生徒の根氣の續く限りを盡さしめ、敢て他の能力の發育を顧るに遑なく、之が爲めに業成り、課程を終へて學校を退きたる者は、徒に難字を解し、文字を書くのみにて、更に物の役に立たず、敎師の苦心は僅に此活字引と、寫字器械とを製造するに止まりて、世に無用の人物を增したるのみ。固より人心全躰の釣合を失はざる限りは、難字も解せざるべからず、文字も書せざるべからずと雖も、本來人心發育の理に於て、人の能力は一にして足らず、記憶の能力あり、推理の能力あり、想像の働ありて、此諸能力が各その固有の働を逞ふして、互に領分を侵さず、又他に侵されずして、能く平均を保つもの、之を完全の人心と云ふ。然るに各人の能力の發育に天然の極度ありて、甲の能力は能く一尺に達するの量あるも、乙は僅に五寸に止まりて、如何なる方便を用ふるも、乙の能力をして甲と等しく、一尺に達せしむると能はず。然り而して一尺の能力

ある者は、之を其諸能力に割合して、各二寸又三寸宛を發育し、之をして一方に偏せしめざるを以て、教育の本旨となすと雖も、若し此諸能力中の一個のみを發育する時は、假令へ其發育されたる能力丈けは天稟の本量一尺に達するも、他の能力は自から活氣を失ふて枯死せざるを得ず。文字を教ふるは、唯人の記憶力に依るものにて、唯此記憶力のみを發育する時は、他の推理の力、想像の働等は自から退縮せざるを得ざるが故に、文字を教ふるは決して之を有害のものと云ふべからずと雖も、唯此一方に偏して、之を教育の主眼とする時は、人心の釣合を失して、徒に世の片輪者の數を增すの恐れあり、甚だ愼むべきものにこそ。

人生の快樂何れの邊に在りや

人生の快樂は何れの邊に在りや、高帽峨冠、廊堂の上に座して百官を進退し、その一顰一笑、以て千萬人を喜憂せしむるものは、政治家の快樂にして、錦衣玉食、肥馬輕車、一夕の豪興に千金を費し去て顧みざるものは、素封家の快樂なり。その快樂何れも快樂に相違なしと雖も、學者流の目より見れば、斯の如きは一世の俗人を欺くに過ぎずして、其心術の最も卑劣なるものなり。學者の快樂は之に異なり、讀書推理その精神を高尙にし、一世を睥睨して、其中自ら無限の情ありと云ふ。然りと雖も是れ亦學者一家の樂にして、彼の田舍の野老が、夕顏棚の下風に、夫妻相對し、相酌む、その眞率の興味は、學者も亦これを知らず。富貴の樂は活潑にして豪なり、學者の樂は高尙にして淸く、野老の樂は閑にして濃なり、其孰れか果して樂しきやは、唯當局者の心に在て存ずるのみ。去れば人生の樂は上中下各々その境遇に適する所に存じ、他より之を云々する能はざるものなりと雖も、今其是非の極端論に涉ることを止め、心を靜かにし

て社會普通の人情に訴へ、又經世の利益の爲めを謀りて、人生の當さに樂しむ可き樂地は何れの邊に在りやと尋ぬれば、必ずしも高帽峨冠、人を威服するにも在らず、又讀書推理窮窟の邊にもあらずして、却て尋常一樣家門の内に在ることを發明す可し。今夫れ一家の内夫婦親子互に相和睦して、絶えて風波の其間に起るなく、膝下團欒の樂あるに於ては、或は家道全からずして、時に衣食の不如意あるも、其不如意は却て同心協力の媒と爲り、益々其樂を和して、一門の春色自ら餘馨を四隣に及ぼすべし、況して家内の和氣春の如く温なる其上に、形體の生計獨立して、衣食の心配なく、假令へ世俗の豪奢を競ふ能はざるも、四時の遊興一家の歡を伸ぶるに足り、世間に對して不義理もなく、又公の義務を缺ぐともなければ、節を屈して世の風潮に漂ひ、俗流に浮沈するの必要もなし。一家の中、靄然として常に獨立の春あり、人生快樂の至境は凡そ此邊に

在りと明言し、之を天下の多數に訴へて、敢て爭ふ者なかる可し。而して今の世間に於て、此種の樂は如何なる家に求むべきやと云ふに、之を生計獨立、私德圓滿の家に於てせざるを得ざるなり。抑も生計獨立して、私德に缺ぐる所なきの種族は、國に於ては良民たり、社會に於ては紳士たるものにして、共に一國の富强を謀り、社會の文明を語るべきは此種の人民に在るとなれば、我輩は此流の人と共に人生の樂を樂まんと欲する者なり。然るに顧みて日本の社會を見渡せば、此種の人民は最も少數にして、生計未だ立たず、私德未だ修むるに暇あらざる其間に、更にその望を遠大に騁せ、大に求むる所あらんとする其目的は、何れの邊に存ずるや、我輩の知る能はざる所なれども、人生の目的は快樂を求むるに在りとして、扨て此種の人物が所謂人生快樂の至境を犧牲にして、更に大に求むる所の其大快樂なるものは、果してその人々の想像するが如き

樂しきものなるべきや、幸にして大願成就、宿昔青雲の志こゝに成り、麒麟閣上の列に入りたりとせんに、我輩の想像を以てすれば、其樂は思ひの外に少なくして、却て苦心の多きを見ることならんのみ。近日の新聞紙に記載したる、獨逸の大宰相ビスマーク侯が、その新帝夫妻の願に背き、皇女ヴヰクトリヤ姫とアレキサンドル侯との結緣を拒みたるが如きは、即ち其適例とも云ふべくして、右の婚儀の如きは、情郎情婦、多年相思の間柄と云ひ、殊に父帝母后ともに其良緣を喜ばせらるゝものなるを、無情にも、傍より、その割き難き中を割かんとする、ビスマーク侯の心は如何あるべきや、侯とても其身木石にあらざれば、子孫の愛情は、自ら心に引較ぶれば、流石の鐵腸も寸斷するの思あることならんなれども、公が政治家たる今の地位に在りては、この背情非心の事に忍ばざるを得ず、之を愉快と云ふべからざるなり。右は外面一應の觀察なれども、政治家として今の世に立たんとするには、世間の毀譽榮辱は外にしても、中心自ら人に語るべからざるの苦ありて、時としては人を欺くのみならず、自ら其心を欺くこともあらん。處世の方便いたし方なしとて斷行するも、人生の至情、時として半宵孤坐、獨り自ら心に顧みるときは、悚然として流汗背に溢れ、一夜にして頭髮悉く白しとの感あることもあらん、政治家の心事亦哀れなりと云ふべし。然りと雖も人々各その樂ありて、夕顏棚の閑に興ずるものもあり、山水風月に樂むものもある習ひなれば、政海情波の危險を以て、却て一生の樂地となすものあるも珍らしからぬ事にして、是れ亦人生の一樂事として、我輩は傍より他人の樂を妨ぐる者にあらざるなり。唯我輩は立國の根本を一家の獨立に求むる者にして、人若し我輩の樂む所を問ふ者あらば、一國獨立の爲め、社會文明の爲め、生計獨立、私德圓滿の人を友として、共に人生の樂を樂まんと

する者なりと答へんのみ。

活潑なる樂を樂む可し

人間は衣食住のみを以て滿足すること能はず、一旦生計に餘裕を生ずれば、其餘裕を以て、直に娯樂を買はんと欲するものなり。娯樂の種類は一にして足らず、歌舞音曲あり、書畫骨董あり、射的、遊獵等ありて、各々好む所を異にすと雖も、國民の氣風をして勇壯ならしめんには、樂も成る可く戸外活潑のものを選ばざる可らず。一室の内に閉籠りて、挿花、茶の湯を樂み、或は書畫骨董など拈くりて、得々たる人民の間には、迚も雄大の氣象を見る可らざるなり。西洋の紳士は或はヨットを走せて洋中の清風に浴し、或は山野を跋渉して野獸を獵し、然らざるも乘馬、端艇、外國漫遊等、その樂は概ね快活ならざるなきに反して、日本人の樂は、多くは

室内優柔のものなり。挿花、茶の湯、盆栽、碁將棋等、一種纖少なる樂の、特に我國に於て發達したるは、正に國民の氣風如何を示す者にして、蓋し德川三百年の太平に、鎖國の夢暖にして、活動の刺激を得ず、自から優柔に流れて、男子の遊戯も遂に小供のマヽゴト流に化したるものならん。鎖國の時代には、斯の如くにても、敢て不都合を感ずるとなかりしかども、今や夢醒めて四邊を見れば、喧騒紛擾、恰も戰場の如し。油斷をすれば將に踏倒され、蹴飛されんとする程の有樣なれば、有爲の壯年が樂隱居を氣取て、骨董など弄ぶ可き時に非ず。歴史、研究等の材料として、學者が古物を探るは、亦文明進歩の一助にして、固より咎む可きに非ずと雖も、活世界の活事務に任じて、恰も千軍萬馬の巷に馳驅する者は、一擧一動の間にも、心身を養ふて、後れを取らざるの覺悟こそ肝要なれ、遊戯娯樂も自から快活なるものを選ばざる可らず。例へば暑を避くるにも、單に箱

根、日光等に限らず、或は北海道千島の海濱に逍遙し、若しくは一歩を進めて、西伯利の曠原を探檢するが如き、興味頗る多かる可し。或は深山幽谷を跋渉して、奇鳥異木を採集し、或はボートを浮べ、ヨットを馳せて、清風を樂むも亦妙なり。其他騎馬旅行、遠足、射的等、兎にも角にも戸外活潑の遊戯を專とせば、身心共に健全となりて、始めて繁劇なる文明の實務に當るに足る可し。然るに近來富豪紳士輩の樣子を見るに、矢張り舊套を脱する能はず、隱居流に非ざれば、婦女子的か、然らずんば淫猥不潔、時に待合料理店に出入して、例の酒色弄花に健康を害する者あり、或は養生の爲めと稱して、義太夫謠曲を叫ぶ者あれば、古器古書畫の鑑定など、得意の顏色して道具屋に交はる者あり、其鄙俗文弱なる、之を一見しても唯嘔吐を催ほすに足る可きのみ。漫然看過し去れば、一夜の遊興に千金を散ずるも、一枚の反古に萬金を投ずるも、固より其人々の勝手にして、他人の關せざる所なれども、此大切の場合に處して、文明實戰の先鋒たる可き有爲の士が、酒色の捕虜と爲り、古物の奴隷と爲りて、自家の天職を忘るゝと共に、身躰の健康を傷ひ、氣力を損して、敢て顧みざるが如きは、國家の爲めに歎息せざるを得ず。過ぐる日清戰爭は、日本の名譽を高めたるに相違なしと雖も、同時に我を擠して大困難の淵に投じたり、獨り兵備の擴張を以て安心す可らず、國民銘々が大に任じて、百般の經營に怠りなかる可き筈なるに、漫に無事太平を夢みて道樂を恣にするとは何事ぞや。大に勤めて大に遊び、遊ぶには必ず戸外活潑の遊びを遊んで更に大に奮發するの地を作らんこと我輩の吳々も望む所なり。

士流の本分を忘る可らず

今の少年子弟の方向は、唯實業の一途に在りとして、扨その人々は何れ

も文明の教育を受けて、事の理を解し、物の數をも辨ずる輩なれば、直に實業社會の事に當るも差支はある可らず、唯差當りの迷惑は、書字十露盤の技に熟せざることにして、例へば代數幾何等の高尚なる數理には巧なるも、十露盤を手に把りて、二一天作の勘定には、非常に窮して、急用の間に合はず、王羲之、米芾等の書法は模し得て雅なれども、普通の手紙を書かしむれば、往々人をして讀むに苦しましむるのみか、或は書の如きは小技學ぶに足らずとして、手紙の書方さへ知らざるものもなきに非ず、又その文章の如きも、議論文の有力活潑なるに似ず、手紙の文言に至りては、全く體を爲さゞる等、所謂通俗の筆算に於ては、却て從來の素町人店者にも及ばざること遠きが如き欠典もなきに非ざれども、書字十露盤の如きは、易き業にして、苟も士流學者にして文事の資ある者には、半年か一年を費せば、之に熟すること難からず、是等は案外容易なる

事として、扨又一條の所望を云はんに、書生輩の顏色の餘り嚴重にして、言語擧動の粗野殺風景なるは、今の文明の社會に處して、士人たる者の風采に非ず。苟も實業社會に入りて、多數の人を相手とするには、最も愼む所なかる可らず。人に接するに、成る可く顏色を穩にし、言語を丁寧にし、常に禮義を重んじて、人に厭はるゝことなかる可しとは、我輩の每度勸告したる所なれども、此一段に至りて、世間多數の人々は、果して我輩の言を容れて、其精神を誤ることなきや否や、聊か掛念せざるを得ず。抑も顏色言語云々とは、敢て人に媚を呈して、他の意を迎へんとするが爲めに非ず、唯從來の殺風景を止めにして、溫良恭謙以て人に接する其中にも、自から禮貌を存して、文明士人たるの品格を損せざるに在るのみ、即ち野を去りて、文に就くの意味なるに、然るに世上輕薄の徒は、溫顏禮貌と云へば、從來の殺風景の反對に、直に一方の極端に走りて、巧言令色、

心にもなき事を言ひ、又心にもなき事を行ひ、素町人店者輩の言行を學んで得々たるのみならず、更に一歩を進んでは、苟も士人の體面に於てあるまじきのみか、凡そ世間にあられ得べき破廉恥不道德の惡行醜事を犯して恥ぢざるものさへなきに非ず、何ぞ誤るの甚だしきや。凡そ士流學者に貴ぶ所のものは、高尙なる智德を內に蓄へながら、其言行擧動を通俗にして、世間の俗事に當ればこそ。從來の無智文盲なる素町人輩に比して、大に賴母しきことなれども、今その智德の本領を去り、單に俗社會の俗塵中に沒するときは、其貴ぶ可き部分は全く失ひ盡したるものにして、彼素町人輩と區別する所はある可らず。喩へば肌には鎖帷子を着しながら、其圭角を露はさずして、絞の浴衣を上に纏ひ、何氣なく粧ふてこそ、始めて奥ゆかしきことなれども、既に鎖帷子を脫して、單に浴衣の派出のみを競ふとあれば、彼の流行を追ふの江戸子と一般にして、

一見たゞ厭ふ可きを覺ゆるのみに異ならず。苟も士人たるものゝ爲すを恥づ可きことなるに、文明の敎育を受け、文明の士人と稱する輩にして、此事ありとは、抑も何の心ぞや。而して其輩の行爲にして、玆に止まれば、尙ほ無害なるに似たれども、既に一たび其本領を失ふて他に逸するときは、ます〳〵極端に馳せて、非常の過を犯すものもなきに非ず。爰に記すも我輩の快からざる所なれども、之を世間の事實に徵するに、凡そ詐僞脅迫等、人間世界にあるまじき非常の惡手段を工風して、巧に之を行ふものは、兎角士流の輩より出づるもの多きが如し。此一點より見れば、從來の無智文盲の輩は、唯事理を解せざるのみにして、事に無害なれども、士流の本領を逸したるものに至りては、社會に害を及ぼすこと頗る大なり、恐る可きの甚だしきものと云ふ可し。蓋し士人たるものが、身を謹しむは、其本分を思ふが爲めにして、即ち封建の時代に於ては、或は

神佛を信ずるの心より、或は武士道を重ずるの精神より、或は又先輩長者に對するの畏敬心よりして、敢て輕んぜざりしことなれども、今日の社會には亦是等の身を撿束するものとてはなく、唯文明智德の士人が、自から其體面品格に對して、自から重んずるの外なきことなれば、苟も文明の教育を受けたる少年子弟は、自から其本分を忘れずして、深く身を謹しまざる可らず。我輩は其人々が今の世に處するに當り、吳れ〳〵も此邊の分別を辨へ、一身を全ふせんことを希望して止まざるなり。

禮儀作法は忽にす可らず

文明進歩し、隨て人事の繁多なると共に、人々平日の交際に虛禮虛飾を去り、萬事すべて簡易輕便を旨とするは、自然の勢にして、爭ふ可らざる所なれども、其所謂簡易輕便なるものは、暴慢無禮を以て貴しとするにあらず。彼の未開の時代に行はれたる、叩頭稽首の禮の如きは、即ち虛禮虛飾に外ならずして、人文開明の今日にこそ行はれざれ、今の文明社會と雖も、人々の交際には、簡易輕便中、亦自から禮儀作法なきにあらず唯その空文虛飾に流るゝを厭ふのみ。左れば西洋諸國に於ては、公會宴席などに、特に禮式を重んずるは申す迄もなく、乃ち私の交際に於ても、夫々の禮法ありて、暴慢無禮の擧動は最も謹しむ所なりと云ふ。我國の如きも維新以來、人文の進歩と共に、從來の空文虛飾を一掃し、人事の交際、すべて簡易輕便を旨とするに至りたるは、誠に祝す可きに似たれども、其弊や時として暴慢無禮に流れ宜しく禮法を守る可き場合にも、之を守らずして、亂暴粗野の態を演出するは、我輩の感服する能はざる所なり。蓬頭粗服、袒を捫て王公の前に談笑するは、古の儒生の得意とする所なれども、一面識もなき者が、紹介狀をも持參せずして、叨りに身分ある人の

門を叩くは、今日の禮法にて不都合なりと云はざるを得ず。箕踞袒裼、他人の前を憚らざるは、親友別懇の間の交際には、或は許す可しと雖も、衆人公會の席に於ては、之を咎めざる可らず。抑も一國の品格なるものは、其國民個々の品格に外ならざるが故に、若しも其國民の人品にして卑しきときは、如何に國品の高尚ならんとを望むも、決して得べからず。而して人品の高下は、外見に於ては、禮を知ると知らざると、之を守ると守らざるとに依り、大に差別あるものにて、外國人の眼より其國の品格を見るには、先づ其國民の人品如何に注目すると勿論なれば、人民が平素の交際上に於ける品格の高下如何は、國に取て非常の關係あるとを忘る可らず。且つ又平生人と人と相對する場合に於ても、其擧止進退に禮あると否らざるとは、其人物の輕重に關すると大にして、例へば公私の席上にて人と談論するに當り、他を感服せしむるの要は、第一に論理論辯に在ること勿論なれども、又其風采擧動の、人を動かすに與りて力あることは、世人の既に認識する所なり。左れば人々の威儀風采の如何は、之を小にして、一個人の品位に關し、之を大にしては、一國の品位にも關するものにして、其事たる、決して輕視す可きものにあらず。我輩は元來武骨殺風景の生れにして、區々たる禮節の末に拘泥するが如きは、固より好まざる所なれども、唯世俗の弊の、漫に粗野亂暴に流れて、士人たるの威儀風采を顧みざる其結果は、獨り一個人の私に他の侮を招くのみならずして、遂に國の體面上に不利なる可きを思ひ、聊か茲に一言するものなり。

德行論

過般以來當館の演說に、毎度經濟に關する事を陳べたるに付き、今日は

方向を轉じて道德の問題に移らんとす、是れ亦學生諸氏の退屈を防ぐの方便にして、亦以て其自ら誡るの一助とも爲る可ければなり。竊に案ずるに、道德は古來世の學者宗教家の最も重んずる所にして、其所說も亦一樣ならず、諸說紛々、甚だしきは同じ德教論者の中にても、少しく見る所を異にすれば、相互に駁論攻擊止まざるほどの者にして、至極頴敏なる問題なれども、抑も德教の主義に就て、其根底より正邪を論ずるは、實に難きことにして、又吾々も常に之を論ずるを欲せざる所の者なれば、是れは世の德教專門の先達に任じて、おの〳〵其是とする所を說かしめ、後進の人も亦おの〳〵其信ずる所を信じて可ならん、吾々は斷じて其間に喙を容るゝを好まざるなり。蓋し世人が吾々に向ひ、汝は道德の主義として何を遵奉するやと尋ぬる者あるも、吾々は之に答るを好まず、吾が答ふるを好まざる所の者は、人に對しても亦問ふことを慊し

とせざればなり。唯吾々が今日人間社會に生存して、身の品行を愼み、正直を重んじ、不義理を行はざるは、是れ等の罪を犯せば、本心に不愉快なるのみならず、天下公衆誰れ人も正を好んで邪を惡む此世の中に强ひて不正不義を行はんとするときは、其事甚だ煩はしくして、心身を勞することと大なるが故のみ。正義の道を行くは、甚だ易くして、不正不義不品行の行路は、甚だ面倒なり、此面倒をも顧みずして罪を犯すが如きは、輕重の割合を失ふものにして、自から愚なりと思ふが故に之を犯さゞるのみ。即ち不正不義不品行より生ずる愉快と、之を犯すの煩勞とを比較し、到底犯すに足らざるものとして犯さゞるのみ。是れ丈けは吾々が人に公言する所なれども、扨何故に汝は斯る心にてあるぞと問ふ者あるも、吾々は之に答へざるものなり。

又吾々が世の德教論者に向て不平なるは、論者の輩が口にも筆にも正

義品行の事を切論して、傍より之を耳にすれば、感服の至りなれども、近く之に接して其裏面の擧動を視れば、言行の齟齬する者甚だ多くして、時としては德敎論に不案内なる吾々の目にも餘るほどの者なきにあらざるの一事なり。之が爲に、言行一致、盛德の人物も、例の德敎論者なる哉とて世に厭はるゝの意味なきにあらず。此點より見れば、亦氣の毒なりと云ふべし。鄙見を以てするに、畢竟今世の道德社會は、議論に進み過ぎて、却て實際に迂濶なるものには非ずやと疑はざるを得ず。其趣は兵法を談ずるには巧にして、戰爭に敗北し、商業の講習に熟達して、商賣に利を失ふ者の如し、談論講習も隨分緊要なる事とは申しながら、之に偏するときは、思想のみ高尙に上りて、手近く細事を忘るゝの弊なきを期す可らず。故に我々が本塾の學生諸氏に勸告する所は、道德の主義如何にあらず、何を遵奉すべし、何を遵奉す可らずと云ふにあらず、其主義は勝手次第にして、傍より敢て聞くことを好まざる所なれども、唯願ふ所は、今日の實際に於て、品行を愼み、正直を重んじ、不義理を犯さゝるの一事のみ、又この箇條とて、之を高尙に論ずれば、際限もなきことなれども、前に云へる如く、高尙論甚だ面白からざるが故に、手近く東京の公私諸學校にある學生の身に就て云はんに、數百里の地方より繁華なる東京に來りて就學するに、故鄕の父母兄弟は如何なる思を爲す可きや、其勉强成學を祈る傍に、又一方には其健康如何、其行狀如何を案じて晝夜忘るゝ能はず、其心配の極度に達しては、學業の成否は第二の考に附し、唯愛兒の身の健康と行狀の一點に精神を籠めて、早く無事に歸鄕すれば、他に所望なしとまでに愚痴を鳴らす其最中に、兒が心を惱殺するものは大都會の風景にして、花鳥風月一も愉快ならざるはなし、散步腹空うして食ひ、放食殺風景なりとて飲み、鯨飲興なしとて歌ひ、歌ふて戲れ、戲

れて樂む、即ち是れ放心の初學、遊冶に入るの門にして、之を名けて不品行とは申すなり。不品行は貴重なる時を費すのみならず、錢を費すことも亦多くして、家鄉より給せらるゝ學資金の以て足る可きにあらざれば、是に於てか樣々の口實を設けて、人に金を借らざるを得ず、即ち己が身を擧げて他人に依賴し、父母兄弟に隱して金策を運らす、之を不正とは申すなり。負債は返さゞる可らず、買物の代金は拂はざる可らず、借りて返さず、買ふて拂はず、之を不義とは申すなり。尙その上にも相濟まざるは、本來學校は良駒を養ふの牧場にして、他年千里の馬を出す可き筈なるに、其幾多の駒の中に癖ある者を交へては、惡癖他に傳染して、牧馬の成長を妨ぐること甚だし。斯の如くんば則ち不義理不正不品行の罪は一身に禍するに止まらずして、害を同窓に及ぼすものと云ふ可し。同胞に對して相濟まざるに非ずや。左れば古來今に至るまで、道德の議論

は極めて喧しきものなれども、其大議論よりも一身の小事實に注意し、大德を燿かす其前に、先づ以て小不德を犯さゞるやう、諸氏の爲めに祈る所なり。且又この小不德を犯すや、甚だ面倒なるものにして、實は犯すに足らざる事なり。今物の數に就て之を證せんに、學生の身にては假令へ富貴の子なりとて、財源限りあるものなれば、思ふがまゝに散財したりとて、一年に何ほどの金を費す可きや、尋常七八十圓か百圓を定額としたる者が、一倍にして二百圓を費すか、大奮發して三百圓も失ふとならん。天下廣しと雖ども學生就學中に一年萬圓金を浪費したる者あるを聞かず。憐むべし、僅に二三百圓の金を使用せんがために、他人が萬圓の才覺するに等しき苦勞して、遂に不德の名を被り、以て畢生の方向を誤るとは實に事物輕重の割合を知らざる者と云ふべし。我慶應義塾は幸にして學生不德の聞え少なく、聊か本塾の面目として世に稱せらる

丶所なれども、塾務に任ずる吾々の身に於ては、尙ほこれに安んずるを得ず、吳々も學生諸氏に冀望する所は、西洋の文明學、何事も實を先きにして議論を後にし、德行の說を吐て人の耳に聽かしむるよりも、德行の身を人の目に示して其心に感ぜしむるの一事なり。

私德固くして樂事多し

我輩が常に男女品行の事を議論して毫も假す所なきに就ては、世間或は之を評して酷に過ぐると云ふ者もあらん、又或は木石ならざる人類を率ゐて、無情殺風景に導かんとするは文明の旨にあらずなど丶、反對論を試る者もあらんなれども、抑も鄙見の主とする所は、人生の快樂を奪去らんとするに非ず、否な却て樂事を多くせんとこそ勉むるものなれ。男女の交際は單に肉交のみにあらず、情交の優美なるものあれば、其交際の區域に綽々然として餘地ありとは、我輩の宿論にして、苟も此意味を解し得たらんには、人生何ぞ殺風景に苦しまんや、以て花に戯る可し、以て鶯を宿せしむ可し、唯その梅花春鶯をして、眞の花鶯ならしめ、他の情を和して我情を慰むるの其間に、一片の潔操これを涅にして緇まざるものあるは、即ち良家子女の身の位にして、內に品位あるものは、外に發して言語の優美となり、容貌の風采となり、擧止悠然として相互に情交を開き、風月の樂、管絃の興は更らなり、或は文を語り、或は技を鬪はし、遊戯自在にして快樂の天地甚だ廣きを得べし。之を彼の遊冶嬌醜の男女が、竊に陰處に奔々して、忽ち社會の光明に照らされ、面を覆ふて遁逃するが如きものに比すれば、其樂事の境遇復た年を同ふして談ず可らざるなり。

無垢の潔操は之を涅にして緇まずとあれば、濁世に處するも亦甚だ難

からず即ち歌舞管絃遊藝の事なり、世論或は德風の衰頽を慣るゝ甚だしく、遂には鄭聲を遠ざくるの古論にまで復り、管絃弄ぶ可らず、演劇觀る可らず、諸藝人近づく可らず云々とて、警戒の嚴なる者なきに非ざれども、鄙見は則ち之に異なり、今日の管絃なり、演劇なり、又諸藝の男女なり、固より濁世の遊樂、又濁世の人物にして、決して完全の者にあらず、時としては厭ふ可きもの多しと雖も、左ればとて之を厭ふて之を擯けたる上にて、之に代るに何ものを以てす可きや、數百年來の習慣に成りたるものを、俄に廢却せんとするが如きは、事實に行はれざるのみならず、强ひて之を斷行せんとするときは、他に又厭ふ可きものを生ずるの恐なきに非ず。封建時代諸藩地にて毎度發令して毎度好結果を得ざりし先例を見ても之を知る可し。左れば今日の要は是等の遊樂又人物をして其面目を改めしむるに、漸を以てするの外ある可らず、其法如何と云ふに、管絃演劇等の諸藝は客にして、之を聽聞見物する者は主人なるが故に、直に其客たる諸藝又その藝人に就て改良を謀るよりも、主人たる聽者見物人の心事を高尚にして、諸藝の風致又藝人の人品を自然に高尚ならしむるの外ある可らず。凡そ人間世界の物は、之を用ふる人の好尚に從て、如何やうにも變化高低するの法則にして、天下文を重ずれば、文人を生じ、武を尚べば、武人を出す、故に今の管絃演劇又諸藝の男女とて、必ずしも其本來の性質より不完全にして改む可らざるに非ず、唯世上一般の好尚に應じて然るものなれば、之を聽き、之を見物する人々が、一身を無垢潔清の位に置て、恰も之を自家の言行風采の餘光の中に包羅し、知らず識らずの際に趣を改めしむ可きのみ。之を喩へば猶醫術の如し、醫は客にして病家は主人なり、主人たる病家の智識發達して良醫を求るの風を成すときは、庸醫は自然に地を拂ふて跡を絶つに至る可

し。又事柄は少しく異なれども、家の主人が壯年酒を好みしときには、來訪の人も亦大抵皆酒客にして、朝夕の別なく、客來れば先づ酒肴を持出し、主人飲み、客亦醉ふの常にして、朋友知人中に下戸とては絶えてなきが如くなりしに、偶然の機會に主人の酒量大に減ずるか、又は節酒したる後には、朋友その人は從前の如くなるにも拘はらず、其來訪の時に酒の沙汰甚だ稀なるは何ぞや。酒を節したるものは主人にして、客にあらず、客は依然たる舊時の客にてありながら、唯主人の家に酒を遠ざけたるが爲めに、主客共に鎭靜の趣を催ふしたるのみ。扨その時に至り、酒なきが爲めに樂事を減じたるやと尋るに、決して然らず、茶話の濃やかなる、却て酒狂の殺風景に優ること多し。主人一身の心事擧動を改めて其影響を他に及ぼすの事實明に見る可し。故に諸の遊藝又その藝人を目して不潔汚濁なりと云ふも、之に接する主人の身をして潔清無垢の位に在らしむるときは、啻に汚濁に染まざるのみならず、自から他を包羅して德に化せしめ、以て改良の道に就くことある可し。鄭聲を遠ざけ、藝人を忌むが如きは、村夫子の小節にして、大人の事に非ざるなり。左れば人間の家の内外に論なく、須臾も離る可らざるは、私德内行の一事にして、之を脩めて堅固の地位に達するときは、滿目常に春の如くにして、同胞の姉妹兄弟皆花柳ならざるはなし。管絃弄ぶ可し、演劇觀る可し、濁世に居て身を汚すことなく、萬斛の汚濁を容れて、自然に清淨の方向に就かしむるものは、蓋し私德の君子淑女あるのみ。

德教は目より入りて耳より入らず

教育は重に幼少の時を以て肝要とするは勿論なれども、取分け德育の如きは、習慣を要素とするが故に、心の未だ僻せざるに先だちて、早く善

良に導くの工風を忘る可らず、是亦人の知る所なり。然るに我輩の常に云ふ如く、德教は耳より入らずして、目より入るものなれば、子弟の德心を養成せんとするには、教師の講義も未だ以て恃むに足らず、父兄の訓誡も左まで甲斐なくして、唯これを教ゆる者が即身德行者となりて、實踐躬行、以て子弟の目に其手本を示すより大切なるはある可らず。而して幼時にありて、最も目に觸れ、身に近きは、何れの邊にもあらず、唯家庭に外ならざれば、滿門の和氣よく道德の眞味を得て、歡娛の間に禮樂の本相を現はすときは、之を見る者は、成長の後にも、教へずして矩を越えざるの妙に至る可し。誠に自然の道理にして、奇談にあらず、若しも然らずして父母の心掛惡しく其行狀正しからずして、子供の龜鑑となすに足らざるときは、萬卷の修身書も、偶々以て其子が不行跡を働くの口實となり、決して德行の實を奏し難きは、實例の既に證する所なれば、德教の第一着は家庭の取締にありて、之れこそ少年百歲の基礎を成すものなりとは、何人も敢て異議を挾むと能はざるべし。扨近來世間にて漸く道德論を催ほし、學校の教課書を云々して、女子の教育を云々するなど仄に聞く所なれども、其道德論者の輩は、自ら其家門を省みて、果して我輩の前言に違ふ所なきや否や、其身を修め、其家を齊へ、遂に溢れて一國の公に及びたるものなるや、少々疑はしき次第と云ふべし。故に我輩の望む所は、進んで道德の理論を講ぜしめんよりは、退いて其身を修めしめんと欲するの一事にして、多年論說する所なれども、滔々たる天下相率ゐて飽まで言責を度外視するの形跡あるは、誠に是非もなき事共なり。抑も道德の罪は不孝より大なるはなし、而して不孝は親の心を傷ましむるより甚だしきはなしと雖も、其心を傷ましむるにも、亦種々の原因ありて、子の身躰の孱弱多病なるも、常に親の心配と爲り、又或は徒に世

事に奔走し、所有の財産を消費して、以て親の心を傷ましむるもあり、何れも孝の道を盡せるものには非ざれども、此般の事は、親たる者は其事由を親戚知人に語らふて、自から亦相談の道もあるとなれば、不幸の中にも聊か以て慰むるに足る可しと雖も、云はんと欲して云ふと能はず、獨り憂へ、獨り悲しみて、煩悶苦惱に堪へざるものは、唯その子の内行不取締にして、例へば狹斜の巷に徘徊して、不倫の婦女に戯れ、又は正當の手續をなさゞる婚姻を取結び、又は一夫多婦の罪を犯して、家門に風波を生じ、又は容易に結婚して容易に離縁し、又は糟糠を堂下に排して、氏なき婦人に玉の輿を與へ、又は養家の養育を空ふして、家の娘を孤立せしむる等、親の目より見れば、何れも皆是れ人に云はれぬ苦心にして、其苦しさは如何計りなるべきや、不幸の極蓋し此上ある可らず。思ふに德教論者の内行は、果して人に云はれぬ陰事を犯して、人に云はれぬ苦心

を親に與へたることなきや、是亦反省ありたき所なれども、中に或は其親の身の智力資力の有樣に由り、悴の罪を問ふ可らざる内情もあらん、又或は父母の死後、吾に親なしなど稱して、恬然不孝の罪を免れ、夫子自ら得々たる者もあらんか、然らば則ち親子地を替へて、自身の子が無遠慮に、左る不品行を憚らざることあらば、乃公の心中果して如何あらんか、少壯の道樂、老年の悔悟、みな此邊の意味を存するものにして、人の常に見聞する所なれば、親あるとなきと、又その親に氣力あると然らざるとに拘はらず、不孝の罪たるに於ては則ち一にして、免れんと欲して免る可らず、如何に外面を裝ふて、文明の庇蔭に依賴せんとするも、到底無益の談のみ。人生五十年、肉體の放縱自から禁じて禁ずるを得ず、其放心發して云ふに忍びざるの醜行を犯しながら、口を放てば德教を論じ、倫理を說んとす、抑も慮外千萬の次第にして、其口の端にかゝる德教倫理

こそ甚だ迷惑なる次第なり。我德敎萎靡せりと雖も、未だ不潔なる助力を假るものに非ず、否な之を見ると蛇蝎の如し。語を寄す、論者必ずしも德敎を以て念となす勿れ、徒に論者の筆端口頭に上りて、德敎の靈を汚さんより、我輩は寧ろ其無言にして之に觸るゝなきを祈る者なり。

德風を正に歸せしむるの法は

其實例を示すに在り

德風の衰へたるは、一時の變相にして、人事漸く定まるに從て、漸く正に歸す可しとは我輩の意見なり。蓋し今の文明進歩は、唯舊を廢して新に就く」の意味にして、往々其極端に達し、遂に人々の私德を顧みざる者をも生ずるに至りしことなれども、凡そ人間社會に要用なるものは、必ず其要に應じて出現するの約束にして、今や我日本社會の一部分は、實に德行に乏しくして、然かも百德の大本たる人生居家の私德の不取締を致したりと雖も、大本たるこの不取締は、日本國の固有にあらず、唯我社會に珍らしき文明の風潮と共に流れて、今日の極端に達したるのみ、未だ以て深く憂とするに足らず。唯今後の要は、有力有志の士君子貴婦人が、左の方向に進んで、天下の標準たる可きのみ。

第一社會公德の根本は居家の私德に在り、私德の根本は夫婦敬愛の情に發達するものなりとの一大義を忘れずして、自から之を實際に施行し、若しも此義に背く者あるときは、朋友相戒め、親戚相責め、夫婦相爭ふて正に婦せしむるを勉む可し。

第二他を責め、他と爭ふ者は、己れ先づ自から堅固無垢の地位に居らざる可らず、如何となれば德敎は耳より入らずして目より入るものなればなり。既に此地位に居るときは、特に言論を煩はさずして、人を感動せ

しむることある可し、如何となれば德言喋々の辯は、德行默々の力に若かざればなり。

第三私德不取締の罪は、詐僞破廉耻等に比すれば、趣を殊にし、國法の問はざる所なれども、國風を維持するの一點に至りては、其罪孰れか輕重を分つ可らず。此邊より觀察を下だす時は、私德不取締の罪は、國の榮譽に訴へても許す可らず、即ち不品行者は愛國心なき者として之を責む可し。

第四私德不取締の罪は、一度び之を犯して生涯の瑕瑾たる可し、其過を改るは、改めざる者に比して、遙に好しと雖ども、一點の汚痕は畢生これを洗ふて除く可らず。故に血氣の壯者に向ては、特に之を戒めざる可らず。少壯にして罪を犯しながら、老大氣力の衰ふるに至りて、漸く私德を論ずるも、其効力左まで大ならざるが故に、其いまだ罪に至らざるに及

んで、早く之を救ふは最も肝要の事なる可し。

第五私德不取締の罪は、其既往をも問ふとあるからには、既に之を犯したる者は、今日に在りて之を如何す可きやと云ふに、其過の改む可きものは速に之を改めて、自新の實効を致さしむ可し。若し或は樣々の事情に由て然るを得ざる者は、口を閉て道德の談を談す可らず、唯謹んで自から守り、社會に對して遠慮する所あらしむ可し。或は身の分を知らずして、差出箇間敷く頭角を現はさんとする者あらば、其頭を取て押へて擯斥す可きのみ。

第六我國の德風衰へたりと云ふも、社會の裏面には潔淸の男女甚だ少なからず、此種の人の中には、或は智力乏しく、又は金力不足するが爲めに、恰も陰處に蟄居する者あるが故に、常に心を用ひて之を開發し、事情の許す限りは、之に勢力を附與して、德友と爲し、共に我德城を守り、又共

に魔群を攻るの覺悟なかる可らず。

第七我輩は宗教に淡泊なる者にして、宗旨の孰れか正、孰れか邪を論ずるを好まず、人々の信ずる所に任して、曾て問ふことなしと雖ども、方今我國に存在する神儒佛耶蘇の中(神儒は宗旨にあらずと云へども、假りに之を排列したるのみ)、孰れか私德を重んじて潔清の主義を奬勵するか、能く之を吟味して、實際に効力あるものは、我輩は假令へ宗旨外の身にても、之を贊成せざる可らず。未來々生の事は姑く擱き、現在の今の人間社會に於て、百德の大本たる居家の私德を重んじて、之を勸むるとあれば、我輩は此一點に就き、天下の德友と共に、口を放て其美を稱讃せざるを得ざるなり。右條々は人生居家の私德、即ち男女の倫理に關する德行をして、正に歸せしむるの方便にして、此倫理一度び明なるときは、同時に天下の秩序も成る可し。私德修まりて公德發達するとは此意味にして、天下の秩序は公德に依賴するものなればなり。人或は謂らく、今の日本社會に向て私德論を喋々するは、盃水を以て車薪の火を消さんとするに異ならずと云ふものあれども、唯是れ事の假相に欺かれたるの言のみ。每度鄙見に述る如く、日本國の德義を平均すれば、決して程度の卑きものにあらず、開國三十年來一時の時運に動搖したるが如くなれども、其元素の消滅したるに非ず。之を喩へば維新と共に、日本國中幾百の城郭は悉皆破壞したれども、日本國民の武勇心は城と共に消滅せざるが如し。況んや近來に至りて事物の秩序漸く定まるに從ひ、漸く私德缺乏の不自由を訴へ、催促の聲漸く發せんとするの今日、全國所在の士君子貴婦人が實際より起り、所謂德行實施の主義に根據して、相互に結合するに於ては、其勢力の向ふ所に敵するものなく、居家の風、交際の法、その面目を一新す可きは我輩の信じて疑はざる所なり。

忠孝論

忠孝の二字は古來我國の二大主義にして恰も人間品行の度を測量するの尺度とも云ふべし。忠孝兩ながら全しとは、人間最上の品行を評したるものにて、忠ならんとすれば孝なり難しとは、人生至難の場合を形容したる語なり。外に在ては忠、内に在ては孝、此二者をさへ滿足に行へば、夫れにて人間の義務を盡し、天の約束を遂げたるものとなし、敢て他を顧みるに遑なし。不忠不孝は人間の最大惡事にして、他に如何なる善行美事あるも、若し忠と孝とに於て一點の瑕瑾あれば、以て全躰の品行を損するものとして、世に齡するを得ざる有樣なりしと雖も、彼の廢藩置縣の後は、世に忠義を唱ふる者少なく、今日に至ては、孝を論ずる學者もなく、恰も我日本人は祖先傳來の二大主義を頓に忘却したる者の如

し。蓋し古人の所謂忠義なるものは、人に對するの忠義、即ち其藩主に對するの義心にして、御馬前に討死と云ひ、御主人の身代と云ひ、君辱めらるれば臣死すと云ひ、唯人に對するの行爲なるが故に、廢藩の一擧その御主人は今の華族となりて、今日は既に其人なし、其人なきが故に、其人に對するの忠義も亦自から消滅するの道理なり。今日に在ても、無理に今の華族に舊主人の名を付して、忠臣の技を演ぜんとする者なきにあらざれども、こは無智にして正直なる田舍の老人か、然らざれば他に自から爲めにする所ありて、外形を裝ふ者のみ、固より物の數とするに足らざるなり。然らば則ち忠義の心は之を美とするに足らざるかと云ふに、決して然らず、唯其忠義の方向を變じ、昔年人に對するの忠義心を存して、今日國に對するの忠義に變形せんと余輩の願ふ所なり。但し此國と云へるは、山野河海等有形の國土を指すにはあらずして、其國土に住

居する人を總稱するものなるが故に、國に忠を盡すとは、即ち其國人に忠を盡すの謂ひにして、再言すれば、人々自から己れの爲めに忠を盡すと云ふに異ならず。斯く忠の字を解する時は、或は世に學者の異說もある可けれども、試に思へ、今國權を擴張して我國の獨立を維持するは何ぞや、日本國は余輩の自から住居する國なり、若しも一朝此國の獨立を失ひ、他國人の爲めに掠奪されて、他の制御を受くるともあらんには、其影響余輩の身上に及び、大に害を蒙るべきが故に、國權に對して忠を盡すのみ、即ち吾々が身のために忠を盡すのみ、甚だ單一なる事柄にして、其理甚だ明白なり。斯の如く忠義心の働の分界を定めて、外面の虛色を去るときは、忠も亦人間の一大美事にして、之を先天の約束と云ふも可ならん。余輩の解する所にては、忠の字の義斯の如しと雖ども、知字の先生には自から又他の解釋あるべし、若し之あらば、幸に其敎を惜む勿れ。

但し此忠義の事に就ては、余が文明論之概略中に於て審かに論じたれば復た此に贅せず、依て聊か左に孝のことを說かん。

孝行は支那儒敎の大本にして、彼の四書五經なるものも、其說く所の大半は孝の一字に在るものゝ如し。孝は百行の本など云へるは、即ち儒敎の眞面目にして、親に事へて孝なれば、百事成らざるものなく、天下の太平も孝に在り、年の豐荒も孝と不孝とに在り、雪中の竹の子、土中の金釜、皆孝の德に依らざるものなし、孝行の功德廣大なりと云ふべし。我日本にても、古來子に敎ゆるに先づ孝の一字を以てし、其所生の恩に報ずるを以て、人間最第一の義務となし、學者は書を著はして孝の德を述べ、政府は之に賞を與へて、孝行の人を奬勵する等、人事の目的は孝の一點に止るものゝ如く然かり。余輩固より孝行を輕んずる者に非ず、啻に之れを輕んぜざるのみか、世に孝行のまゝ盛ならんことこそ希望する

所なれども、古來我國の習俗の如く、唯孝の一事を以て人間の約束となし、此一方にのみ心身を用ひて、更に他を顧ざるが如きは、亦甚だ感服するを得ざる所なり。熟ら人間進歩の樣を考ふるに、子は親よりも賢く、親は又其祖父母よりも利巧にして、代々世々の末となるに隨ひ、人智も亦益々上達し、以て今の世の中となりたるとならん。固より子にして親の智力に及ばず、親にして子に劣る者も少なからずと雖ども、是は常例の外にして、一般の定則と云ふべからず。往古野蠻の時代と、今日文明の樣とを比較對照して、今日の人智果して古に優るとあらば、之を人類生々遺傳の積集したるものと云はざるを得ず。去れば此進化の理を信じ、又人生の目的は次第に後生子孫の幸福を增進するに在り、即ち生々の義務なりとするときは、親の子に對する義務を以て重しとせざるを得ず、即ち子の孝行よりも親の慈愛を以て大切とするこそ人類の約束と云ふ可し。今この理を明にせん爲め、假に世の中の人をして、悉皆不孝ならしめ、世は極て亂暴なりとせんに、其有樣は殆ど禽獸世界に齊くして、決して羨むべきものならずと雖ども、苟も父母にして自から智德の能力を維持して、子を愛するの情を失はざるときは、尙ほ其能力を子孫に傳へて、天下後世文明に進むの道ある可し。人類の進化に對しては、孝行の効能甚だ重しと云ふ可らざるなり。之に反して、若しも世に孝行のみ盛にして、子を愛するの慈心なき時は、人生の有樣如何なるべきや、祖先遺傳の能力を傳ふる道斷絕して、生々之を積集するに由なく、之を積集して世の進歩を來たすに道なく、世は益々澆季に赴き、益々能力の度を減じ、益々退歩して遂には禽獸世界に陷り、天地開闢の始に返るべし。今幸にして其然らざるは、子の孝心よりも、親の愛心に依て維持したるものなりと云はざるを得ず。右は萬物進化の理に依て說きたるものなれど

も、今又人情の赴く所に隨て之を考ふるに、親の子に對するの情と、子の親に對するの情と、其情愛の深淺に於て自から差あるものゝ如し。蓋し芝居狂言、稗史、小說抔の仕組を視るに、世人をして最も感動を生ぜしむる所は、浮世の義理に迫りて、父母が其愛子を殺すの一段にあり。政岡の愁歎、寺小屋の段、人をして流涕せしめざるはなし。義理の爲めに愛子を殺すは、實に人情忍びざる所にして、此忍ぶべからざるを忍び、人情爲し難きを爲すの趣向は、即ち作者の巧手段にして、其最も得意とする所なり。或は父を殺し、母を刺すの趣向を仕組んで、人の感動を惹起さんとするものあれども、人心に感する所は唯惡漢の惡を惡むのみにして、悲歎の情は之を子殺に比して、大に趣を異にする所あるが如し。左れば子の親に對するの情は、未だ之を純精無雜と云ふ可らず。蓋し社會の習俗と古來の教育とに由て養成したる一種の人情と云ふも可なり。子を持て知る親の恩とは、古人の名句にして、其意味は子を育つるは誠に面倒にして、骨の折れるものなるが故に、之を自分の身に引較らべて、己れも斯く我親に骨を折らせ、面倒を掛けたるとならんと思へば、實に親の恩は海よりも深く、山よりも高きものなりと心に感ずべしとの意を、句調好く述べたるものなり。然れども苟も世間並の人物にして、己れの子を養育すると面倒なりなどゝ思ふ者はある可らず、既に之を面倒なりと思はざれば、今更親の事を想起して自分の面倒を引較ぶるの理由もある可らず。畢竟古人も人間社會の實際を視察して、動もすれば孝道の盛ならざるを知り、恰も數理を以て人情の發達を責めたるものならん、亦以て人生孝心の純精ならざるを窺ふに足る可し。之に反して、親の子を愛するの情は、教育の助力に依らず、習慣の壓制に拘はらず、天然に發生するものにして、是れぞ純精無雜の至情と云はざるを得ず。左れば今教育

の要は、人生の素質に具はる所のものを益々養成して、社會の進歩を利するに在りと聞くからには、孝敎固より大切なりと雖も、父母の慈愛は更に大切なるが故に、大に天下の父母を敎え、其不慈不愛の罪を責るは、德敎家の當さに務む可き所のものなる可し。

先進と後進

人生に學問敎育を受くるの時限は、大抵十ヶ年前後のものにして、其間に得る所の智識は、敢て甚だしき甲乙あるにあらず、二三十年前某の學塾にありて業を卒へたる者も、又二三十年後の卒業生も、其卒業の際に於ける力は、同じく是れ其學塾の卒業生たるに過ぎず、人相同じく、學相似たりと雖も、唯その前後二三十年の距離あるが爲めに、彼と此とを比較して、其人物を鑒定するときは、如何にしても前者は優り、後者は劣るあるを免れず。何故なるやと云ふに、前者は二三十年世間に出でゝ、幾多の經驗を積み、一種言ふ可らざるの長所を有すると、後者は書窓以外の人事を知らず、所謂浮世の呼吸を解せざるの差違あればなり。其趣を喩ふれば、共に兵學劒法の蘊奥秘傳を究めて、一方は數多の戰場を經、他は初陣に出づる者の如し。初陣の若武者と、場數覺えある老功の武士とは實際何れの邊にか數等の相違を現はして、殆んど兵學劒法の修業如何を以て論ずべからざるものあり、即ち先進と後進の別るゝ所以なれば先進は後進を愛し、後進は先進を敬し、先進は由て以て德を成し、後進は由て以て益を得、其關係甚だ圓滑にして、隨て社會上にも長幼の序を紊さず、事業上にも先を先とし、後を後とし、燕去雁來、循環して、新陳代謝その順を得べし、即ち數百年來の實際に曾て違ふことなき世態の常なりしが、開國の一擧、文明開化の原素を輸入し來りてより、學問敎育の趣向

頓に變化し、所謂先進の學び得たる所と、後進の學び得たる所とは、恰も雲泥の相違を來たし、後進の知る所にして、先進の解せざるもの多く、先進の談ずる所にして、後進の耳に陳腐ならざるもの少なし。實事か作説か知らねども、或る田舍の小學校にて、規則書に傍訓したるものありしかば、是式のものに如何なれば傍訓したるやと尋ねたるに、「大人にも分る樣に」と、小兒は答たりとの奇談あり。獨り小學校のみならず、他の高等學校も然り、獨り田舍のみならず、都會も亦同樣なれば、爰に先進と後進との間に一大衝突こそ起りたれ。先進の經驗富まざるに非ずと雖も、後進の智識の博きよりして之を見れば、自から尊敬の念を薄くせざるを得ず、先進も亦暗に輕蔑せらるゝの有樣にては、後進なりとて愛護するを欲せず。是に於てか後進は恰も長幼の序を忘れたるが如く、又文明開化は人の德心を毀損したるが如く、種々の惡現象を見るに至りたりし

が、本來を云へば、後進の罪にあらず、文明の惡きにもあらず、先進の學問は駕籠の如く、後進の學問は人力車の如くなる、今の變化の時勢こそ原因なれ。從前は先進も後進も同一の速力を以て同一の街道を通行し來りたれば、先後を紊さん樣もなかりしかど、人力車に乘りて駕籠の進行を見るときは、啻に同行に堪へざるのみならず、等しく人の足にてありながら、駕籠は恰も却歩するが如きの觀さへありて、其迂を笑はざらんと欲するも得可らず。有形上に就ては頗る覩易き談なれども、扨無形上に渉れば、先進は飽までも先進たらんと欲し、後進は中々後進たるに甘んずること能はざるの實勢なれば、其間一種の殺風景を催ほして、動もすれば事物の障害となることなきに非ず。今一々その實例を枚擧せずと雖も、官海となく民間となく、政治世界となく實業社會となく、到る處として此患を憂へざるものなきが如し。然らば之を如何せんと云ふに、

元是れ文明進歩の餘波なれば、強ひて防遏せんとするも、決して能くし得可きにあらず。有形界の原則を推して、之を無形界にも及ぼすときは、只應に新陳代謝の機を急ぐの外なしと雖も、人間の取捨は則ち容易ならず、先進の餘勇敢て駕籠を以て自から居らず、後進の人力車、時として躓くことなきに非ず、千緒萬端の故障に妨げられて、墓々しからざるは、人情の命ずる所なれば、唯我輩は所謂先進の人々に向ひ、篤と時勢の趨く所を觀察して、今後の世に處するに當り、假令ひ自から大に恃む所のものあるにもせよ、大體の傾向は常に心に忘れずして、以て機宜を制するの得策たるを勸告する者なり。

新舊兩主義

日本の文明開化は西洋より輸入したるものにして、今後ます〳〵其隆盛を致さんとするには、日本流の舊主義に代ふるに、西洋流の新主義を以てせざるを得ず。抑も新舊の交代は自然の約束なるが故に、一方の進歩する割合に從て、次第に他の一方の退却を致して、遂に跡を收むるに至れば、誠に無事にして、其交代も滑なれども、實際は然らずして、其間に必ず衝突を免れざること止むを得ざる次第なれ。蓋し其衝突は數年來の事にして、敢て今日に始まりたるに非ず、其趣は恰も大洋の波瀾の如く、一起一伏、互に消長して底止する所を知らざるが如き其中に、結局は新主義の勝利に歸すること疑なしと雖も、目下我社會の局面は、從來の比に非ずして、衝突の勢、頗る激しきものゝ如し。扨その兩主義の相違は如何なる點なりやと云ふに、一言これを評すれば、舊主義は名を尚び、新主義は實を主とするの別にして、例へば我國の諺に、武士は食はねど高楊子と云ひ、西洋の俗に、一刻千金、時是金と云ふが如き、其辭は簡單なり

と雖も、共に其主義の精神を言ひ現はして餘蘊なきが如し。即ち之を概言すれば、一方は精神の樂を尙び、一方は肉體の要を先きにするものと云ふ可し。新舊兩主義の相違は右の如くにして、扨精神の樂を尙ぶの主義も、或る程度に至るまでは差支なけれども、苟も其程度を越へて、之を主張し、一切の人事を犧牲に供して、單に形面上の樂みを求めんとするに至りては、到底文明の新主義と兩立す可らず。心事の高尙にして、氣品の清雅なるは、人世の貴き部分なれども、本來精神上の事は、衣食住、肉體の要に不足を感ぜざるに至りし後の談にこそあれ、衣食に事を欠きて、口腹を滿足せしむること能はざるに、精神の樂を云々するとは、抑も亦前後緩急を誤るものと云ふ可し。清貧に安んずと云ひ、苦節を守ると云ひ、其名は甚だ美なるが如しと雖も、未だ一家の計を成し能はずして、徒に空論を唱ふるが如きは、經世立國の實際に何の益する所もなかる可

し。我輩は我同主義の人々が、斯る物論に取合ふとなく、飽までも實利を務めて、先づ一身自活の道を求め、以て肉體の所要に應ぜんとを希望するものなり。然るに凡そ人生に免れざるは、他を羨むの情にして、世間多少の舊主義論者も、其平生の氣品清雅なるに拘はらず、內實は羨望の情を脫すると能はざるものと見へ、彼の實利主義の目的を達したる富盛の種族に對して、攻擊を試み、時に或は無責任の言を放て、暗々裡に之を傷けんとするものもなきに非ず。無知蒙昧なる下等社會の輩が、他の有福を羨むの餘りに、之を怨み、之を罵詈するは、普通の事にして、敢て怪むに足らざれども、苟も社會の上流に位し、然かも高尙なる主義を唱ふる所の士人にして、是等の手段に出るとは、言語に絕えたる次第にして、其心事の鄙劣なるに驚かざるを得ず。抑も實利社會に從事する人々が、商賣なり工業なり、種々の冒險を試み、時としては生命の危險をも顧みず

して、萬一の成業を期するものは、豈に他あらんや、唯他年の快樂を得て、心身を慰めんとするが爲めに外ならざれば、幸に其目的を達して、百事意の如くなるに至り、衣食を豊にし、居宅庭園を築く等、肉體の樂を盡すは、即ち年來の志に酬ゆるの一端にして、敢て傍より啄を容る可らざるのみか、畢竟此種の實利家あればこそ、國の商賣事業も繁昌して、隨て文明開化の隆盛をも致すとなれば、經國經世の爲には、ます〳〵其主義を奬勵すること肝要なるに、然るに自から進んで、自から事を企るの勇氣とてはなく、只他を羨むの餘りに、種々の口實を設けて、之を傷けんとするが如きは、決して男子たるものゝ擧動に非ず。若しも果して他の地位を羨む可しと爲さば、何ぞ大に勇氣を奮て自から之に代らざるや。曰く彼れ取て代る可し、曰く大丈夫當に斯くの如くなる可しとは、支那の古豪傑の辭にして、其勇氣の盛なる人意を强ふするに足るものあり。彼は政治上にして、此は實業上の事なれば、自から區別なきに非ざれども、舊主義の輩にして、果して他の地位を羨まば、少しく勇氣を皷舞して、平生私淑する豪傑の擧動を學ぶ可し。徒らに政治に勇にして、實業に怯なるは我輩の取らざる所なり。

無學の弊恐る可し

近時我國の文明は著しく進歩したるが如くなれども、是れは唯社會の上流のみ然るものにして、下層の人民に至りては、頑陋愚昧、其智見の發達せざること、實に驚く可きものあり。殊に今尙ほ學問をば贅澤物の如くに心得、脩業は一種の流行時樣にして、云はゞ、身邊にこそあれば、一通のことにして差置き、圓き浮世は兎も角も圓く渡りて風波なきを祈るとは、獨り無學の人のみならず、既に自から學問の道理に明なりと稱す

る、上流社會にも行はるゝ通論にして、我輩の怪訝に堪へざる所なり。抑も人生に學問の必要なるは、今更ら言ふ迄もなく、啻に文學技藝の如き社會の事業を爲すに必要なるのみならず、炊事洗濯一家の些事を扱ふにも、夫相應の學理を心得ざれば、其不利多し。人間萬事、學理の中に包羅し、學理の外に人事なく、人生須臾も離る可らざるは學問上の道理なり、然るを況んや農工商の實業に從事する者に於てをや、唯ます〳〵學理の在る所を求めて進む可きのみ。而して其進歩の方向を示すは、上流具眼者の任にして、自から遁る可らざるの責あるにも拘はらず、往々例の浮世論に浮沈して、圓く世を渡らんとする者多きこそ遺憾なれ。例へば本年明治廿六年夏の如きは、稻作發育の期に際し、各地方共非常の旱魃にして、河水は涸れ、水源は空しく、青田は變じて赤土とならんとせしより、農家の困難、小民の狼狽一方ならず、其極終に竹鎗席旗の騷動に及び、

人を傷け、他に害せらるゝは勿論、中には貴重の生命をさへ失ひたるものも尠なからずと云ふ、洵に殺風景の至りなれども、是れは唯一時の怒りに乘じて、前後を忘れたるの致す所にして、驟雨沛然、河水溢るゝに至れば、其爭鬪も水と共に流れて跡方なく、一時の亂暴自から悔悟し、農民は依然無邪氣の百姓にして、更に餘毒を遺すことなしと雖ども、彼の雨乞と稱する加持祈禱の惑溺に至りては、則ち是れ農民の無學なるが爲めに、荒唐無稽の妄說を信ずるものにして、我輩の默々に附する能はざる所なり。抑も人間開進の第一着は固陋の惑溺を一掃して、智力發達の道に横はる所の障碍物を排除し、以て文明の行路を平坦にするに在り。陰陽五行、加持祈禱の迷夢を破らざれば、心智活潑の域に進み難く、心智活潑ならざれば、社會の文明は期す可らず。然るに彼の浮世論者が加持祈禱の實際に無効なるを知りながらも、民情を慰むる爲めの方便なりと

て、其爲すがまゝに任じて頓着せざるは、恰も愚民の愚を辯護するものゝ如し、我輩の同意する能はざる所なり。一時の爭鬪は一時の事にして、其害の及ぶ所狹けれども、加持祈禱の惑溺は千載の惑溺にして、其餘毒恐る可きものあり。譬へば爭鬪は切創の如く、惑溺は惡疾の如し、切創の鮮血淋漓たるは人を驚かすと雖も、其治法甚だ難からず、一度び愈れば、復た餘毒を殘さゞるの常なれども、惡疾に至りては即ち然らず、其病毒體内に瀰蔓するときは、名醫も治するに術なく、外見或は全治したるが如くなるも、折に觸れて再發三發を免かれざるのみか、餘毒延いて子々孫々に遺傳することあり。人心惑溺の害毒も亦斯の如く、深く愚民の神髓に徹して、容易に除く可らざるは、歴史に照らしても明白なる事實なるに、世の學者具眼者を以て自から任ずる先進の士人が、輕々に看過して、曾て口を開て其非を辯ずるものなきは何ぞや。學者先生は特に之

を辨ずるの價なきものとして、恰も一笑に附し去るの意ならんなれども、凡そ世の中の害惡は平時些末の間に萠芽するの常にして、小心翼々之を戒めざれば、禍根を深くして、遂に如何ともす可らざるに陷るもの多し。前にも云へる如く、此雨乞の惑溺たる、單に愚民の愚に止まれば、尙ほ恕す可きに似たれども、堂々たる知事郡長又は村長など、苟も一部一地方の政治を掌り、衆庶の龜鑑として仰がるゝ人々に至るまでも、其惑溺を共にして、雨乞の仲間に加はり、偶々降雨あれば、吾々の至誠天に通じたりなど稱して感泣するとは、文明の倒行、人心の無智も此に至て極まれりと謂ふべし。苟も文明の文に養はれ、日新の學を學びたる人士は、演說に新聞に其非を鳴らして、學理の眞面目を明にすること肝要なる可し。此種の惑溺を一掃せざれば、文明の光輝は得て望むべからず、輕々看過す可らざる所のものなり。

其頃又各地方の流行に千把焚なるものあり、山林を伐り倒して其木を高山の絶頂に積み、夜中これに火を點じ、其火氣の蒸騰に由りて、空氣の變動を起し、以て降雨を促すの趣向なりと云ふ。前の神佛に加持祈禱するものに比すれば、少しく道理あるが如くなれども、是れは所謂文明流の惑溺にして、素より取るに足らず、僅に千把萬把の薪木を以て、大空の氣壓を高低せんと思ひも寄らざる次第にして、恰も一本の針を以て大海を掻き回はさんと欲するが如く、唯抱腹に堪へざるのみ。然るに之を西洋の新發明なりと云ひ、或は學理的の降雨法なりと云ひ、某地方に於ては、現に此法を脩めて驟雨を得たりと云ひ、一犬虚に吠えて、萬犬實を傳へ、一愚人狂奔して、衆愚人これに和し、財を散じ時を費して、毫も得る所なし、其愚は唯一笑に附し去るを得べしと雖も、此愚の爲めに、貴重なる山林を伐り盡して、水源を涸らすの事實に至りては、愚中知らずして

毒ありと云ふ可し。學理上より考ふるに、欝葱たる山林は、河水を生ずるの源にして、驟雨は常に高山の樹木繁茂せる所に多しと云ふ、爭ふべからざる事實にして、水理家の皆知る所なり。然るに一朝の愚に任せて、此欝林を伐り盡し、可惜千載の水源を一夜の烟と化し去りて平氣なりとは、唯驚くの外なし。然るに地方有力の人士にして、未だ其愚を諭し、其非を鳴らす者あるを聞かず、啻に之を鳴らさゞるのみか、往々自から卒先して勸誘する者さへありと云ふ。思ふに此千把焚は學理的降雨法なりとの言を聞き、心中自から其覺束なきを知ると雖も、唯學理の二字に辟易して、之れを究むるの勇なく、徒に文明の惑溺に束縛せられて愚を演ずる者ならん。加持祈禱の如き、野蠻不文の惑溺は其害の及ぶ所少なからずと雖も、文明流の惑溺も亦決して侮るべからず。文明の學理は猶ほ利刀の如し、智者の手中に在りては、其功德實に千萬無量にして、社會の進

歩一に此學理に依らざるものなしと雖も、若しも之を愚者の手に放任して、妄りに使用せしむるときは、其禍害却て大なるものあり、俗に所謂生兵法は大傷の元とは此事にして、凡そ其名を學理に籍て、妄誕を逞ふするより恐るべきはなし。彼の前年流行せし稻花蝶助法の如きも、亦此類にして、畢竟農民の無學なるが爲めに致す所なり。半解半知の學說を濫用して、時を費し、財を失ひ、其愚舉は無益に止まらずして、却て千載の禍を遺す、其人の爲め、又國家の爲め、洵に歎ずべき次第にこそあれば、農民自から學理の研究を怠らざると共に、世上の識者も亦斯る荒唐無稽の惑溺を排除し、以て文明進歩の行路を平坦ならしめんこと我輩の吳々も勸告する所なり。

實業家の學術思想

學者が學問の所用を忘れて活世界の活機に疎く、人生の實際に効を奏すること至て少なりとは、我輩の多年來耳にし、又口にする所なり。蓋し維新以前に於て、政治の權柄は終始士族一流の手にありしと齊しく、學術も亦この族の專有にして、農工商等一般の平民に至りては、政治上既に卑屈の氣風を養成せられて、併せて學術にまでも推及ぼし、唯在來の習慣を墨守して、天命に安んずるの外なかりければ、心身を研くの法を講じて、一身の境遇を高度に進ん抔との事は、曾て夢想にも及ばざりしものゝ如し。左れば王政維新と聞えたる大革命の騷動ありしと雖も、封建時代の遺傳性は、相變らず今日までも持續して、政治學問の二業は、矢張り士族の一手に歸し、農工商民は依然たる舊時の農工商民なれば、士族は得意の理論を空中に馳せて、實地に疎きの譏を被むり、農工商民は漸く學問の何物たるに着目すと雖も、士族即ち學者流の迂遠疎濶なる

に鑑みて、恰も實業家の本分に非ずと認め、無學の弊に因循して、遂に進取の氣力を作興すること能はず、惜むべし、學問は學者あるによりて迂濶の寃罪を受け、而して實業家は自から自家の誤謬を發見すると能はざるなり。今日の現狀に照して、學者の實地に疎きは、我輩の固より非難して止まざる所なれども、實業家の多數の學問思想に乏しきも、是れ亦言語に絶えたるものあり。彼輩の口吻に動もすれば經歷熟練と云と雖も、本來如何なる時代を經過して如何なる事に熟練あるや、無學の父母に生れて、無學の朋友に交はり、俗世界に浮沈して、俗事に慣れたるまでにして、偶ま上流の人に就て、其所得の學問と稱するものを聞けば、孔孟の道德にあらざれば、斜に逸して禪理などを談ずるのみ。其精神の工風に就ては、自ら安んずる所もあるべきなれども、事物の眞理原則に至ては、殆んど夢中に徘徊するものにして、七八才の兒童が、大人の了解を促して、其鈍きに困却するの奇談は世に珍しからず。既に養ふ所の根元なし、之を應用實施する能はざるは、固より怪しむに足らざる次第にして、其能く蹉跌を免るゝは必竟僥倖に非ざるはなし。故に此輩の成功を一見すれば、恰も感歎すべきが如くなれども、飜て反對の側より膜を拂ひ、皮を剝いで內部の實質を窺ふときは、往々學者をして噴飯せしむる者少からず。極端に下りて其趣を示せば、農間の百姓が蝗蟲の發生を以て、山靈水神の魔力によると思ひ違へ、祭禮祈禱に精神を籠めて、他に驅除の方法を顧みざるも、無學迷信の結果なり。又先年虎列刺病流行の際、東京府下の某區にて、同患者が身を水道の井戸に投じたるより、其筋にては下流の井戸に汲む可らずとの訓令を下さんとせしに、之を聞傳へたる近傍の人民は、スヲ禁制の出でぬ中に、早く汲取りて貯藏すべしとて、毎戸先を爭ふて手桶を持出し、男女井端に群を成したるなどは、其衞

生の主意に出でたるを察せずして、封建戰國の大將が、軍用の爲めに汲水を禁制したると同一樣に解釋せしに外ならず。此等は下等細民の事なれども、彼の所謂實業家なる者が、不學無識にして事を誤まるの內情に至りても、亦是れと同樣の觀にして、無學の結果は上流下流甚だ差別あるを見ず。斯る俗流の俗物が、敢て偶中の僥倖を利して、我が實業の運命を司どらんとするも文明の大勢は既に數理に據て定まる所あり、如何で俗物の運動を許さんや。故に彼等も今より其心事を一變して、學問の社會に同化すれば格別、然らざる限りは、着々これを淘汰して、我國經濟社會の面目を一新せざる可らず。而して其任に當る者は、學者一流の人に外ならざれば、文明有爲の志を抱く者は、宜く時勢の變遷を看破し、舊來の陋習を棄て、淘汰の實を行ひ、漸く改良の歩を進めて、堂々富國利民の策を講すべし。蓋し亦學問に對するの義務ならんか。

國は唯前進す可きのみ

文明進歩の程度を計るに、其標準とす可きもの少なからざる中にも、言論の自由不自由は、恰も人文の進退を表はすの信號とも名く可き者にして、其束縛を弛めて、次第に自由に移るは、紛れもなき文明の進歩として見る可し。我開國以來今日に至るまで、人民に不平の痕を絶ちたるに非ず、政治上の壓制と云ひ、古俗習慣の不自由と云ひ、種々樣々に束縛せられたるもの多くして、政客にても學者にても、苟も文明主義の先導を以て自から任ずる者は、一意專心これを拂はんとして、勉强勞苦したるこそ社會の幸福なれ。又實際に於ても、其勞空しからずして、人生自由の區域は日に廣くして、月に增加し、復た昔年の封建時代に非ず。文明論者の熱心を以て視ればこそ、今尙ほ不滿足の者多しと雖も、首を回らして

既往を顧み開國四十年來、人民の言論界に如何なる自由を致したるやと、前後を比較して仔細に見來るときは、吾々は唯恍として夢中夢に入るの感あるのみ。舊幕府長州征伐の頃、幕臣にて、神奈川の副奉行(組頭)を勤むる脇屋卯三郎と云へる人は、長州に在る親戚へ尋問の手紙を贈りたるとき、書中聊か時事を述べ、兎角騷々しき時節なり、何卒明君賢相の世に出でゝ、之を鎮撫する樣願はし云々と、唯一言したる其手紙を途中に奪はれ、脇屋は長州に欵を通ずる者ならんとの嫌疑を以て、忽ち捕縛切腹を命ぜられたり。其以前長崎の通詞堀達之助は、露國軍艦の難船して伊豆地方に漂着したるとき、通辯の公務にて同處に出張、每度書翰を往復する中に、來翰一通手跡の見事なる者ありしかば、之を飜譯して用を辨じたる後にて、暫く其原文を手元に留置き、横文字の手本として手習する處を或人に見付けられ、堀達之助は公文を私したり、此樣子にて

は何事を露人に內通するやも計り難しとて、直に入牢申付けられ、五箇年の間、鐵窓の中に苦しめられたり。當時の日本は攘夷の日本にして、外國人は夷狄又異人にして、洋學者は一種の惡魔外道たるに過ぎず。故に洋學者流は文明主義の至極面白きを了解して、其道を學び、又これを弘めんと思へども、四面皆敵にして、思ふ所を言ふ可らず、偶ま耳を傾くる者あれば、僅に西洋流の器械を用ひんなど云ふ淺薄なる考にして、政治上社會上の文明論に至りては、一言半句を吐露するに由なし。斯く申す福澤諭吉の身に關する一例を語らんに、今を去ること四十餘年、諭吉が長崎遊學の後、大阪緒方洪庵先生の門に蘭學を學ばんとて、藩廳に出願せしとき、異國の學問修業は不都合なり、砲術ならば許さんとの內諭を得たり、蘭學醫の門下に鐵砲の稽古とは、是れこそ不都合ならんと思ひしかども、洋學の主義など辯論して、藩廳と爭ふては大變なりと觀念し、

乃ち內諭に從ひ、私儀大阪表緒方洪庵方に入門砲術修業云々の願書を呈して、匆々藩地を驅出したることあり。扨緒方に入門して、掲示の塾則を見れば、其第一條に學生の讀書研究は勿論のことなれども、唯原書を讀むのみ、一枚たりとも漫に飜譯は許さずとあり、洋學社會の言論窮したりと云ふ可し。以上は昔物語として、夫れより王政維新の春に遭ひ、萬事自由の世の中に變じたりとは雖も、人民の骨に徹したる專制の習俗は、政治に人事に、容易に除く可らず、例へば一國の政は議政と行政と二樣に分れ、法官は政府の外に獨立して、時の執政と雖も法律を左右するの權なしと云ふも、大岡捌の講談に耳慣れたる人民には、其意を解する者なし。又經濟論に、國の貨幣に政府の極印を印するは、唯金銀の性質と量目とを證するのみにして、極印あるが爲めに、貨幣の價を地金よりも貴くするに非ずと論ずるも、古來通貨の通用は政府の威光なりと思込みたる國民に、西洋流の經濟主義は容易に耳に入らず、況んや國庫金を目して國民の醵金同樣のものなりと論ずるが如きに於てをや、迚も合點す可きに非ず。一國は政府の私有にして、其私有地の民より取上げたる租稅は、即ち政府の私有金なり、與奪自在なる其金を、國民の醵金に等しなど謂れもなき妄言なりとて、却て世人を怒らせたる程の次第なりき。然るに明治の年も十と爲り、二十と爲り、今は二十八年にして、過る數年の樣子を見れば、政事も法律も經濟も、いよ〳〵論じていよ〳〵精密に入り、之を實地に施して實効を奏し、天下復た封建時代の宿夢を夢みる者なし、稀にこれあれば、徒に其身の愚を表して、世に笑はるゝのみか、遂には身を亡ぼすに至る可きのみ。之を要するに、今日の日本は眞に文明開化の日本にして、昔年を想ひ起せば、一切萬事所望以外に達して、聊か遺憾なきが如くなれども、扨この一段に至り、更らに言葉を改めて、大に

論ず可きことこそあれ、即ち吾々國民は決して今日の有樣に滿足す可らざるの一事なり。足るを知るの敎は、或は一個人の私に適す可き場合もあらんかなれども、國としては千萬年も滿足の日ある可らず。多慾多情、多々ます〳〵足るを知らずして、一心不亂に前進するこそ、立國の本色なれば、爰に既往を顧みて、幾歲月の間に某點より某點に達したりとの事實を得たらば、直に之を將來に持込み、今後幾歲月を經て、或る冀望の點に達す可きやの算數を得ること難からず。信書中の一言以て切腹の奇禍を釀したる無法慘酷の日本が、今日の法律を見るに至りし其日月僅に三十年なれば、今後三十年の進步も凡そ想像するに足るべし。政治なり經濟なり、又彼の忠孝德育論なり、凡そ是等の問題に就て、今の社會の風潮に纔に許されたる言論の區域は、果して圓滿に達したるものなるや否や、我輩は斷じて滿足せざる者なり。之を喩へば、既往幾年間の進步は、荒金の日本を鍛錬して、器械と爲し、銅を變じて、銀にしたるものなれば、向後同時間に其器械をます〳〵精巧にし、其銀を黃金にすることも易し。而して此進步改新の任に當る者は、後進の文明學者にこそあれば、其責任決して輕からず。漫に古を慕ふて之に心醉するを止め、眼中古人を見ずして、有らゆる新案を回らし、日新又日新、以て自から古人たらんことを勉む可きものなり。

社會の人心は其尙ぶ所に赴く

社會の人心は社會の尙ぶ所に赴くの常にして、例へば德川の時代に武を尙ぶときには、尙武の風一般に行はれて、隨て武人劍客の類輩出し、又その後半の如く、學問を尙ぶの時代には、學者文人を出して、文運の隆盛を致す等、何れも皆偶然に非ず、社會の好尙自から一般の人心を奬勵誘

導して然らしめたるものと云ふ可し。彼の亞米利加合衆國の如き、社會一般に金を尙ぶの氣風盛なるは、世人の知る所なるが、近年來その社會に於ける富の進歩は非常のものにして、或る同國人の說に、最近二十年の間に米國の富は凡そ十倍に達したり、即ち二十年前に一萬圓の身代の者は、十萬圓となり、十萬圓の者は百萬圓となりたるは、現に實驗したる所にて、終始國內に住する者の如きは、自から進歩の中に生々しながら、自から其然るを知らざるもの多しと雖も、一たび國を去り、十數年間を他邦に消過して、再び鄕國に歸るときには、何れも其變化の著しきに驚かざるものなしと云ふ、以て進歩の非常なるを推知す可し。即ち其進歩は米の社會に尙金の風行はれて、一般の人心これに赴くが爲めに外ならざれども、更に一歩を進めて、世に斯る氣風の盛なるは、如何なる次第なりやと尋ぬれば、自から偶然ならざるを發見す可し。抑も米國の社會は所謂共和の仕組にして、國內の人民は何れも一般平等にして、上下貴賤の階級なきは申す迄もなく、爵位もなければ勳章もなく、服裝の如きさへ、海陸の軍人を除くの外は、總て同一樣にして、大頭領內閣員より、學者商賣人に至るまでも、一般に別なきの風なるが故に、人生の希望は單に富貴の一偏に在りと云ふ、其富貴も、他國の如く、兩者を區別して、富の外に貴を求む可らず、貴の外に富を得べからず、富即貴、貴即富にして、富の外に人生の希望を達するの餘地なければとて、人心擧て此一方に向ひたることならん。人心一に向ふときは、人々競爭の念を催すも、亦是れ自然の情にして、一厘一錢にても、其身代の他より多きを以て、互に相誇り、以て社會の表面に標幟せんとする其人情は、種々の現象に現はれて、企業心となり、勉强力となり、又は冒險の氣象と爲り、國中を通じて、男女老少の別なく、畢生の目的を錢の一方に定めて、他を思はず、其錢を稱

して米國の富有と名くることとなり。扨今の日本社會に於て、一般の氣風の向ふ所は何れに在りやと云ふに、文に非ず、武に非ず、又金に非ず、只官途の一方にして、浮世の虛榮を得んとするに外ならざるが如し。文武の事は姑く擱き、浮世の虛榮を得んとするも、亦是れ人情の一端にして、一概に排斥す可らずと雖も、虛榮と實益と相容れざるは、自然の結果にして、其極端に至れば、經世の爲めに憂ふ可きものなきを得ず。蓋し今の社會の氣風は、封建士族の精神を遺傳して、官尊民卑の風を成し、一般の人情、只管官途の榮を重んじて、商工の實業を輕んずる其餘弊は、金錢の事は之を談ずるさへも賤しとして、清貧自から喜ぶのみならず、素寒貧の一書生、却て富豪の金滿家を壓倒して、揚々得色あるのみか、世間に於ても之を怪しまざるが如き、我輩の眼を以て見れば、奇怪至極と云はざるを得ず。試に其實例を擧ぐれば、前年海防費献金の節に、幾萬圓の金を献じたる者が、從何位の位階を得て、之を無上の榮と心得る其反對に、官立學校に入りて、課程を終りたるものが、官途に出身して數年を經過するときは、之と同等の位階を得ること敢て珍らしからず。即ち片々辛苦の結果なる富豪家の數萬圓金と、一書生數年間の經歷と、其價を同ふするは、正に今日の情態にして、以て社會の氣風如何を窺ひ知る可し。我輩は敢て此事實を咎むるには非ざれども、社會の氣風斯くの如くにして、一般の人心、只管虛榮を尊んで實益を卑しむの結果は、立國の將來に非常の關係ある可きを想ふて、經世の爲めに竊に憂慮の情に堪へざるのみ。然らば則ち米國の爲に倣ふて、人爲の爵位階級の如き一切止めにして、社會の人心をして只富を得るの一方に向けしめんかと云ふに、東西自から國情を異にして、彼に便なるもの必ずしも我に可ならず、米の社會の風習を其まゝ日本に移さんとするは、種々の差支あるのみか、或は實

際に不利の點も多かる可し、一概に傚ふ可らずと雖も、日本社會の缺點は虛榮を尊び、實益を卑しむの氣風にして、其結果の將來に妙ならざるを知らば、經世家たるものは、今日に於て大に考ふる所なかる可らず。我輩の所見を以てすれば、其方法一にして足らず、即ち假令ひ米國の如くならざるも、成る可く浮世の虛榮を輕んじて、民間の實益に重きを置き、一般に富即貴なりとの觀念を起さしむるなり、又は富豪金滿家の人々に、浮世の榮譽を與へて、富貴岐ならず、貴は必ず富に伴ふの實を示すなり、兎に角に社會一般の人心をして、實益を尊び、金錢を重んぜしむるの氣風に導くの手段肝要なる可し。我輩は今の世界に立國の要は、國の富を進むるに在り、國の富を進むるは、社會の人心に錢を尙ぶの氣風を起さしむること必要なりと信ずるものなれども、今日の社會の事情は甚だ然らざるものあるを認め、敢て一言して經世家の注意を請はんと欲

するのみ。

父母は唯其病是れ憂ふ

父母は唯その病是れ憂ふとは、子を思ふ親の心を表はしたる語にして、天下の父母は皆その子の幸を祈らざるものなし。之を養ひ、之を敎へて、漸く一人前の男女に仕立るのみならず、天晴拔群の人物と爲して、我身の生前には之と共に幸福を與にし、死後に至るまでも安心せんとて、生涯の間に心身を勞する其勞苦の大事は、自身の快樂を求るよりも、寧ろ子の爲にして餘念あることなく、愛極りて痴を生じ、其痴情いよ〳〵切なれば、又多を求るに遑あらず、愛子の才學如何は第二の事として、兎に角に病に罹る勿れ、無病息災にさへあれば、夫れにて滿足なりと、所望の點を低くして、扨こそ唯その病是れ憂ふの語も發したるとならん、愛情

の最も深きものと云ふ可し。滿塲の學生諸君は、故郷に父母ある者こそ多からん、君等をして遙に東京の慶應義塾に入學せしめたるは、今の文明の時節に當り、君等に至當の教育を授けて、才學智德衆に擢んでたる天下の一人物と爲し、成學の後は、家に居て家事を理し、外に出でゝ公共の事に力を盡さしめんとするの目的より外ならず。他年の幸福を期して、今日の離別を忍び、思切つて遠方に手放したるとなれども、一片の愛情は之を禁じて禁ず可らず、雨の夜、雪の朝には、空しく東京の天を眺めて斷腸に堪へず、塾舍の飲食は彼の子の口に適するや否や、前便に送りたる衣服は身に煖なるや否や、同塾同居中に惡友はなきや、流行の疱瘡は能く防禦したるや云々と、之を思ひ、之を懷ふ中にも、最も掛念なるは、都下の惡風俗にして、完全無缺なる良家に養育したる愛子が此風俗の犧牲と爲りて、身を誤り、又惡疾などに罹りては、學問修業も何にかせん、速に之を呼返すに若かずと、一旦は決心したれども、又躊躇し、是れは父母の空想にして、痴情の凝りたるものなり、尚ほ未だ狼狽す可き塲合にあらず、兎に角に唯無病息災にさへあれば、誠に難有仕合なりと、更に心を取直して、自から慰め、自から强ふする其有樣は、子に學問の修業を命じながら、却て其修業の事をば忘れて、唯その病是れ憂るものと云ふ可し。左れば諸君は此父母の深切愛情に報ゆるに何を以てせんと欲するか、課業の勉强は固より云ふまでもなく、其目的遠大にして、他年必ず名聲を天下に轟さんとの素志なる可けれども、老生は却て調子を低ふして、君等の父母と情を同ふし、學業の大成を望むよりも、先づ身體の健康を促さんと欲する者なり。其健康を求るの法は、唯身躰を活潑にして、眠食を時にするに在るのみ。運動を嫌ひ、温袍を貪り、不時に食ひ、不時に飲み、甚だしきは輿に乘じて酒を過飲し、頭痛に苦しむが如き、之を稱して

命を殺ぐの愚と云ふ、啻に其身を害するのみならず、懶惰温袍、遂に病を成して、家鄉の父母の心を痛ましむるは、自身と共に父母の命を殺ぐものと云ふ可し。尙ほ其上にも、諸君の當さに注意す可きは、學資金の一事なり。凡そ本塾に入學する者の費用は、各々家の貧富に從て差等なきにあらざれども、其大數を云へば、一ヶ月六七圓より八九圓にして(明治廿五年二月)一年百圓を以て最上とす、苟も其以上を費す者は、必ず學生の身にあるまじき費用にして、父母に之を請求するにも事實を以ですす可らざる所のものなり。玩弄物など買ふて失ふことなれば、唯金を失ふのみにして、尙ほ恕す可しと雖も、時としては彼の不時の飲食、又は長夜不眠の資に供して、頭痛を買ひ、惡疾を買ひ、懶惰の習慣を買ふの代價たることなきに非ず、即ち父母の金を貪りて、家の禍根を買ふ者なり。都會の地に居ればこそ、百圓の金、少なきが如くなれども、地方に至れば、紛れもなき大金にして、一年の商賣に純益百圓の得失は中々の大事件なり、米の相場を一石六圓として、百圓金は四斗俵四十俵餘の代價なり。諸君の家に小作料四十俵の相違は、假令ひ大家にても、之を視て小事と云ふ可らず。田舍に百圓の金あれば、家族五人の衣食を安くする者多きに非ずや。斯くまでに大切なる大金を都會に持出して、唯一書生の爲めに費すは既に過分なる尙ほ其上に、之を費して家の禍根を買ふが如きに至りては、最早や沙汰の限りと云はざるを得ず。老生は多年の經驗にて、塾生の良不良を視るに、先づ其學費の多寡を問ふて之を卜し、十中の八九中らざるはなし。故に諸君も金を費すならば、之を金と思はずして、米と視做し、昨日不圖六十錢を浪費したらば、家鄉の小作米一斗を空ふしたりと思ひ、人力車の代に六錢を與へたらば、一升を棄たりと思ひ、始終田舍の事を忘却することなくんば、或は先生の忠言を俟たずして、自から發明

することある可し。父母は必ずしも錢に吝なるに非ず、唯愛子の身を心配するのみ。然り而して錢は學生の身を害して、君子たる高尚の性質を傷ふの媒介たり、其用法を愼まざる可らざるなり。

衛生の要は消化の如何にあり

諸君は自から飯を炊きたることありや、自から炊かざるも、下女の炊くを見たることはあらん。又百姓が麥畑に肥しするを見たることあらん。抑も飯の炊きやうは、釜の下に薪を燒き、其薪の悉く燃えて、成る丈け烟の出ぬやうにすること肝要なり。即ち竈の中に空氣の流通を自由にして、薪の内に含む所の燃質を悉く火にして、熱を取らんが爲めなり。若しも空氣の流通宜しからずして、烟ばかり出るやうにては、薪は何本くべても、薪の用を爲さず、唯竈を塞ぐのみにして、釜の飯は必ず不出來ならざるを得ず。故に下女の注意は無暗に薪の數を多くするよりも、竈の大さと、空氣流通の模樣とを見計らひ、釜の下に差入れたる薪をば、灰に爲るまで燃し盡すに在ることゝ知る可し。又百姓が畑の麥に肥料を施して養はんとならば、先づ其土に鍬を入れて、土中に空氣の流通を好くし、肥料の染込むやうにして、然る後に糞汁を灌ぐこと肝要なり。麥の間を蹈付けなどして、固まりたる處に何ほど肥しても、麥の根は之を吸收するに由なく、可惜大切なる肥料は無益の物と爲る可し。諸君にして以上の事實を考へて、果して道理に相違なしと合點したらば、君等の身躰を熱立てゝ之を温め、又これを養ふて活動せしむる所の薪たり、肥料たる食物を食ふに、其法を如何す可きや、多辨を費さずして自から發明する所なきを得ず。他なし、其要は唯食ふて體内に入りしものを悉皆消化して、滋養分を取り盡すに在るのみ。近來食物の議論頻りに喧しく、粗食は

身躰の爲めに宜しからずと云ふ、此論甚だ妙なり。量多くして滋養分少なき品を食へば、徒に消化機を勞して、其割合に實益なきが故に、菜穀よりも肉類こそ榮養の爲めに利益なれども、如何に肉類なりとて、之を食ふて消化せざるときは、彼の竈の薪の燃えざるが如く、麥の肥しの吸收せざるが如く、唯異樣の物を躰内に取込むのみにして、何等の用を爲さず、啻に用を爲さゞるのみか、其消化せざる部分丈けは、却て大害を釀すに足る可し。左れば人身の榮養に最第一の要は、消化の如何に在ることにして、食物の精粗は第二の要と云はざるを得ず。假令ひ菜穀の粗なるものにても、之を食ふて能く消化するときは、肉食の半消化するものに優ること萬々疑ある可らず。而して其消化機の働きを進めんとするには、榮養の新陳交代を盛ならしむるより外に道なきが故に、適宜に身躰を勞して、體内の機關を消耗し、隨て其吸收力を進めて、舊きを失ふと同時に新しきを入れざる可らず、即ち是れ身躰運動の要用なる所以なり。今身躰をば動さずして、滋養品のみを食ふは、竈に空氣の流通を謀らずして、切に薪を詰込み、畑に鍬を入れずして、肥料を灌ぐに異ならず、其有害無益、論を俟たずして明なり。現に今日醫師の言を聞くに、勞働社會の者共は其平生榮養の不十分なるにも拘はらず、病に堪ふると強くして、金創などの癒ることも速なり、之を金衣玉食の貴公子、又は學者書生等の薄弱なるものに比すれば、同日の論に非ずと云ふ。勞働者の食物粗なるも、之を食ふて能く消化するの實證にして、更に爭ふ可らず。故に君等が本塾に寄宿するか、又は下宿屋に寄留するには、食物は必ず最上品にあらざる可しと雖も、食物の事は第二要として、深く論ずるに足らず。若しも身躰弱くして、時々腹合を損じ、又或は例の頭痛意氣切れ等、樣々の病を現はすは、食物不良の爲めにあらずして、日夜机の前に坐するの罪

なり。君等が大切なる身躰を取扱ふの法は、下女が飯を炊くの工風よりも拙なりと云ふ可し。世間に流行する滋養論を聞き、其消化の如何を忘れて、無暗に濃厚なる肉類を取込み、却て食物の爲めに身を弱くするが如きは、下女に對して面目なき次第ならずや。一人の例を擧れば、老生の如き、元と封建の貧寒士族にして、其少小のとき、何を飲食せしやと云ふに、常食は先づ麥飯と南瓜の味噌汁か、魚類は稀に雜魚を食ふに過ぎず。殆んど下等の養ひなりしかども、貧寒は身を勞するの媒介にして、一年三百六十日、武藝と內職とを兼ねて、勞役に服せざるはなく、稍や長じて書を好むも、讀書は唯家事勞働の餘暇を偷んでする位の有樣なりしかば、身躰の屈强なること限りなく、如何なる劇しき仕事にても、殆んど草臥れたることなし。今は既に老し、或は諸君と力を角して負ることもあらんなれども、三四十年前の諭吉なれば、滿堂の諸君中一人として恐るゝに足る者なし、亦以て勞働の大切なるを知るに足る可し。殊に君等の家鄉に在る父母の心中を推察すれば、半死半生の大學者となりて歸鄉するより、寧ろ學業は少々未熟にても、身躰强壯、精神活潑なる愛子を見ることこそ愉快なる可し。老生は失禮ながら君等の父母に成り替りて、身躰の運動を勸告する者なり。

終りに臨んで尙ほ一言するは、右の如く身躰の運動に重きを置て立論したりと雖も、老生は本來滋養食の敵に非ず、否な滋養品の大食を主張するものなれども、唯その食物と身勞との釣合如何に注意するのみ。老生も昔年その粗食の代りに、今の西洋料理などを常食にしたらんには、體力は必ず倍したることならん。食物の事決して輕々に看過す可らず、要は唯滋養の一方に偏して、勞働を忘るゝなきの一事なりと知る可し。

壽命の大小

凡そ生を好み、死を嫌ふは、人間普通の情にして、老少貴賤貧富の身分に拘はらず、苟も尋常の身心を具ふる者にして、壽命の長からんことを冀はざる者なし。古來西洋にても、東洋にても、長壽延命の術を究めて、百千年の齢を保たんことを工風し、不老不死の神丹靈藥を作らんとて、其試驗に一生を終りたる道士さへ少なからざりしかども、如何せん、天然の命數には限ありて、人力の及ぶ所にあらず。秦皇漢武の志願も水泡に屬するのみか、太古開闢の時代より以來今日に至るまで、人間の壽命は寧ろ短縮したるの事實を見れば、延命術の智識は未だ曾て一歩を進めざるものゝ如し。又或は近時醫學上の理論を基として、種々樣々の長壽法を說く者ありと雖も、何れも皆尋常一樣の衞生法を集めたるものか、然らざれば未だ實地に試驗したることもなき架空の妄談のみにして、決して靈妙不思議の神法に非ず。左れば往古の神仙法は妄誕固より取るに足らず、近世醫學上の長壽法とても、其効能決して著しきことなく、極々首尾よき場合に於て、僅に百歲に近き壽命を保つ者もあらんには、非常の長壽なりとて滿足する位のことなれば、先づ今日の處にては、到底百歲以上の壽を得るの妙法はなきものと諦めて、扨こゝに我輩が一案を呈出すれば、到底求めて得べからざる延命の術に戀々するよりも、壽命の長短を第二の考にして、專ら其量を多くするの一方に心掛けんことを勸告するものなり。抑も生者と死者との區別を糺せば、結局一は能く働て事を爲すの反對に、一は働くこと能はざるの一點にあるのみなれば、常に心身を勞して、多く事を爲す人と、生涯無事を祈りて、安閑に月日を送る人とを比すれば、勞する者は生命の大なる人、即ち壽命の量の

多き人と云ふ可し。西洋の學者の言に、人の生命に長さもあれば、又幅もあり、厚さもありと云へるは、即ちこの邊の意味にして、人生は唯長きを以て能事終るにあらず、平生その心身の働を大にして、壽量を多くするの覺悟肝要なりと知る可し。然るに我國普通の世狀を視るに、貧賤勞役の種族は姑く擱き、苟も中以上の人は、未だ左程の老年にも達せざる間に、早く既に退隱して、浮世の煩忙を避けんとし、年齡五十以上六十に近づくときは、則ち老人の仲間に入り、所謂隱居と爲りて世俗の事務に與らざる者多し。其隱居後の生活は、只管無爲閑散を貪りて、殆んど生死の中間に在るの有樣なれば、假令ひ是等の隱居老人が偶ま八十九十の高齡に達することあるも、其生涯の壽量を計るときは、甚だ輕少なるが故に、其趣を形容すれば、生理に長壽にして、人事に短命なりと云はざるを得ず。之を彼の歐米諸國の學者政治家等が、死に至るまで、各自專門の業務に從事し、古稀以上の齡に達するも、毫も衰色を現はすことなく、壯年輩と競爭して、敢て一歩を讓らざるものに比すれば、實に雲泥の差あるを見る可し。或人の說に、日本人が西洋人に較べて、斯の如く早く老朽するは、彼我人種の體力に差違あるが故なりなど云ふ者あれども、物理上に曾て其證あることなし。我輩の所見を以てすれば、日本社會古來の世敎習慣に老者を敬すると共に、老者其人も亦自から勉めて老成を氣取り、成丈け速に若輩の仲間を脫せんと欲するの念を存して、扨こそ斯る奇相を呈することなりと斷定する者なり。何となれば彼の隱居流の人々を見るに、其身體尙ほ頗る强壯にして、能く事に堪ふるの事實は明白にてありながら、態と世を避けて、却て竊に無事に苦み、斯くて無事の爲めに、恰も心身の刺衝物を失ひ、遂に眞實に老却する者多きは、每度目擊する所なればなり。畢竟我古俗習慣の然らしむる所なりとは云ひなが

ら、其人々が壽命に長短の差あるを知て、未だ大小の差あるを知らざるが故に、斯くは惜氣もなく自から天壽の大部分を放棄することならん、人生の眞の價を解せざるものと云ふ可し。彼の盜見博徒などの言に、世の中を細く長く暮さんよりは、寧ろ太く短くと云ふことあり、其趣旨の善惡は暫く措き、人間の生活は唯長きが故に必ずしも大ならず、壽命の長短と大小とには自から區別ありとの事實を表はしたる言にして、甚だ面白し。我輩は世間の人が長壽を求ると同時に、又生涯の壽量を大にせんことを務め、何時までも太く長く此世を送らんことを勸告するものなり。

衛生の進歩

近來我國にては、社會の事物何れも改良したる中、衛生の如きは其進歩の頗る著るしきものと云はざるを得ず。蓋し衛生の議論は年來官民公私ともに最も熱心する所にして、隨て其事の緒に就きたるものも少なからず。先づ事實に現はれたる處に就て之を言はんに、中央政府に衛生局を設け、各府縣には衛生課を置きて、事務を整理し、又中央衛生會、地方衛生會を開きて、其事を審議せしめ、傳染流行病の豫防消毒法を設けて、之を施行するなど、注意の周到なるは申す迄もなく、又民間の私に於ても、私立衛生會又は醫會を設けて、平生の研究に怠らざるのみならず、有事の日には自ら其力を致したる事なきにあらず。過般府下の築地近傍に流行病の折も、京橋區の衛生會が奮て豫防消毒の事に當りたる如きは、即ち其一例として、兎に角に官民公私ともに衛生に熱心して、事務の進歩を致したるは疑もなき事實なりと云ふ可し。抑も衛生は文明の事業にして、其進否は社會の文野を表するのみならず、事實に於て國運の

強弱に關係するものなれば、我國に於て其進歩の兆あるは、誠に賀す可き事なれども、元來其事たる深遠なる學理上の問題に屬し、至て精密なる觀察を要するが故に、唯外面の事務の進歩のみにては、未だ深く喜ぶ可らず。此頃西洋の學者間に行はるゝ說を聞くに、近代衛生の進歩は疑ふ可らざる所なれども、其進歩と共に之を妨ぐる害物の進歩も亦疑ふ可らず、例へば食物運動の法則、就業の時間、家屋の構造、上水下水の裝置など、何れも學理上の實驗に由りて之を規定し、殊に傳染流行病の豫防法に至りては、用意最も深密にして、遂に恐る可き病毒を文明の域外に驅逐したるは、天晴衛生上の手柄にして、進歩の著るしきは勿論なれども、又顧みて一方を見れば、百般の技術逐年進歩するに從て、人間の生活に種々の變化を起し、衛生上の害を釀したるもの甚だ少なしとせず。即ち學者が深遠緻密の學術に耽りて、頭腦を勞し、或は學問上の探究の爲め、極遠未開の地に往來して、身を瘴烟毒霧に暴露し、技術家が業務の爲めに眠食を時にせず、饑寒を忍ぶなどを始めとして、其他近來社會生計の度の高まりたるが爲め、一般の勞役者が勞働の割合を增したるが如き、何れも文明の進歩に免る可らざる事相なれども、衛生上より見れば、其害の進歩にして、當局者の最も注意を要する所なる可しと云ふ。左れば我國の事態も、他の文明國の例に洩れず、社會の進歩と共に衛生の事も進歩し、其進歩と共に害物の進歩も亦相違なしと雖も、其害の進歩は之を他に比して一層の甚だしきものあるが如し。今その事情を云はんに、日本は新開國にして、文明進歩の勢特に劇しく、俄に社會の變化を致したるとなれば、人々の生活上にも非常の影響を及ぼしたるや疑ふ可らず。例へば廿年前迄は讀書文學を以て虛弱書生の事と爲し、日本男子專門の務は尙武に在りとて、弓馬鎗劍の武事にのみ其身を委ねて生涯

を送りたる士人社會が、文明の東漸と共に、忽ち學問の叢淵に變化し、今日既に此中より文明流の學者技術家を出すのみならず、今後も亦然るとならんなれば、即ち武骨殺風景なる舊腦髓に、深遠緻密なる新文明の學理を注入するの勢にして、之に加ふるに、飲食衣服日常の物に至るまでも、共に激變を被るが故に、其生活上に多少の變化なからんと欲するも得べからず。近來の學生に身躰の薄弱なる者甚だ多くして、往々苦學の爲めに夭折の沙汰さへなきにあらず、識者の夙に注目する所にして、其重もなる原因は、前陳の事情に由らざるはなし。且この事情は獨り上流の學問社會のみに止まらず、末流の下等社會に至るまでも、苟も文明の變化に逢ふ者は、其心身に多少の影響を蒙ることなれば、之を要するに、我日本國に於ける衛生の害物は、今正に一種非常の勢を呈するの時節なるが故に、其事の局に當るものは無論、都て社會先達の地位に居る人々は、特に此邊に注意して、學問教育の事より、百般の人事些末の部分に至るまでも之を處するに常に衛生の要を忘るゝなからんと冀望に堪へず。單に文明流の成法にのみ拘泥して、長鞭及ばざるが却て馬腹に如きは、我輩の遺憾とする所なり。

國民の體格と配偶の撰擇

草木の種子、魚鳥の卵、種馬種牛等を撰ぶには、必ず其素性を糾し、卵なれば重大のものを撰び、牛馬なれば其體格氣質の優りたるものを撰び、以て之を配偶孵化して、始めて彼の逸物と稱するものを得可し。如何なる凡俗社會の人にても、種子を撰ぶの必要を知らざる者なし、其然る所以は、學問上の道理を研究して、始めて發明したるにあらず、唯積年の經驗により、偶然にも學理に適ひたるものにて、之を偶然の的中とこそ云ふ

可れども、兎に角に種子撰擇の有効なるは疑なき事實にして、自然の原則は爭ふ可からず。禽獸草木既に然り、人類生々遺傳の理も亦然らざるを得ざるは、甚だ明白なりと雖も、世人多くは獨り禽獸草木の種子を撰ぶを知りて、人類の血統に注意するもの尠なきが如し、迂濶千萬のことゝ云ふ可し。今その次第を述べんに、抑も我日本人の精神活潑にして豪膽不屈なるは、今更申す迄もなく、決して他國他人に愧る所なき者なり。其事實多き中にも一例を擧れば、我學生の西洋に留學して、西洋人と共に學業を修るに當り、彼の學生は日常珍らしからぬ自國の語を以て學び、我學生は生來耳に慣れざる新奇の國語を以て修業せざる可らざるが故に、其難易は固より同日の論にあらず。假令ひ學業は彼に優る所あらざるも、之と駢立して互角の勢をなし、常に其級を同ふするのみにても、我は言語の難を冒したるだけ既に能力の彼に優る所ありと云はざるを得ざる次第なるに、實際に於て、我學生は往々彼に超絶して、同級の首席を占ることあるのみならず、卒業の期に優等の賞を得る者は、平均數に算して我日本人に多しと云ふ。是れも或は日本國内にて撰拔したる所謂俊才なる者をして、彼の國に留學せしめ、以て彼の通常人に當ることなれば、以上の事實のみを見て、遽に日本人の能力を評するは、皮相の見たるを免れずとの説もあらん歟なれども、然らば學生の談を外にして、今日我國進歩の全體を論ぜんに、農工商の業は申すに及ばず、其他讀書推理の事に至るまで、西洋人は能く之をなして、我日本人に限り能くせざる所のものありや。醫術は如何、化學は如何、理學は如何、我國の郵船は既に英領印度に達し、其亞米利加に定期航海を開くの日も亦遠きに非ざる可し。我開國は今を距る僅に三十年前にありて、既に西洋人が數百年の間に孜々辛ふして達したる其點にまで達し、現に今これ

と肩を並べ、歩を同ふして商賣工業の競爭をなすにあらずや。其擧動の活潑豪膽なるは、事實に照し、疑を容れざる所にして、後來の望いよ〳〵ます〳〵大なりと云ふ可し。然るに爰に遺憾ながら、到底我國人の西洋人に及ぶ可らざる所は、體格小弱の一事なり。日本人の矮少にして虛弱なるは、目擊に於ても、統計に於ても、既に明白なりとして、扨これが爲め、國家全躰に如何なる影響を及ぼし、利害を與ふるやと云ふに、或人の說に、假令ひ日本人の體力は虛弱なるも、其精神の働活潑なれば、夫れにて足れり、文明の百事百物器械に籍て、天然無盡の力を役するが故に、最早今日となりては、唯智力の賴むべきあるのみ、體力の如きは唯野蠻不文の世に用あるものなり云々との言あれども、我輩の所見は一大に異なり抑も經濟の法に於て、生產の本は人の體力にありと云ふ。文明の利器盛に世に行はれ、天然力を以て人力に代用するの工風少なからずと雖も、

尙ほ其利器を使用するの本は、人力に求めざる可らず。器械の力、蒸氣の力、大は則ち大なれども、皆是れ人力を俟て始て用に立つことなれば、體力の虛弱なるが爲め、我國の經濟上に及ぼす所の損失は中々以て容易ならず。一人の働に二人を要し、一日の手間に二日を潰すは勿論、猶ほ甚だしきは、彼の常に持病に惱まされて、一生涯の半ば病床に起臥し、生けるが如く、死せるが如きは、假令ひ百歲の壽を保つも、唯呼吸の生息を通ずる迄にして、其實は死人も同樣、更に生產に益する所なきのみか、斯る半死半生の人にても、呼吸の通ずる限りは、日に定めの食事は欠く可らず、自から食物を消費しながら、自から之を生ずるの體力なきときは、恰も一擧兩損の姿にして、此類の者は世間に甚だ尠なからず、當人自身の不愉快は云ふ迄もなく、一國の爲めに謀れば、唯人間と稱する多くの蝗を養ふに異ならず、實に莫大の國損と云ふ可し。我國人遺傳の能力は他

に劣る所なく、其精神の活潑なるは世に誇るに餘ありと雖も、一國の財産は袖手無爲にして生ず可きにあらず、必ず自から手足を勞し、額に汗せざる可らず。左ればにや近年に至りて、體育の說稍々世間に行はれ、學生の運動は無論、年長の人に至るまでも、遠足競漕等の遊戲を試るが如き、時運の然らしむる所、又我輩年來の勸誘も其甲斐ありしことにして、窃に欣喜に堪へざる所なれども、更に結婚に配偶を撰ぶの一事に至りては、率ね唯配偶者の醜美智愚を問ふのみに止まりて、却て其素性血統の穿鑿を等閑に付するが如きは、遺憾に堪へざる次第なり。我輩の爰に謂ふ、血統素性とは、其祖先の氏素性貧富貴賤に重きを置くにあらず、況んや俗に所謂家柄をや、氏も素性もなき卑賤の者にても、父母祖父母の身躰健全にして、曾て其家に遺傳の病毒あらざれば則ち足れり。加藤清正の子孫にても、累代の間に惡疾に罹り、病毒を血統に遺すこともあら

ば、虎を搏する豪勇の後裔も、賣女の子孫と甲乙の差あることなし。名家の系圖は恃むに足らざるなり。又醜を厭ふて、美を愛するは人情の自然にして、配偶に容貌の秀美なる者を撰ぶは、至極尤のことなれども、今の世間に好男子美女子と稱する者は、多くは肺患者か、婦人なれば肺患に血の道を兼ね、才子多病と稱して、善く飲めども多く食ふこと能はず、海棠春雨に惱むが如しとは、時候の爲めに咳嗽に苦しみ、步行せんとして腰部の攣急に堪へざる者なり。畢竟するに半死半生の病人にして、斯る好男子美女子に生れたる其子孫は、亦必ず半死半生の青瓢簞たるを免れず。人誰か子孫の繁榮を願はざらん、之を願はゞ、先づ其配偶の血統素性を穿鑿せざる可らず。天然遺傳の理は決して欺く可らず、瓜の蔓に茄子を生ぜず、偏强の子は偏强なる父母に生る、獨り茄子の種子を撰ぶを知りて、人類の種子を撰ぶを知らざるは、迂濶の甚だしきものと云ふ可

し。

體育の目的を忘るゝ勿れ

人間の教育は智識の一方のみに偏す可らず、身體を運動して、筋骨を發達せしむることも、亦甚だ大切なりとは、毎度我輩の論述せし所なるが、近來は世間に同感の論者少なからず、全國官私の學校にても、一般に學生の體育を重んずるの風を生じたるは、國家の爲めに甚だ悅ばしき次第なれども、茲に我輩が聊か世の體育を主唱する人々に望む所のものは體育本來の目的を常に心に記臆して忘るゝなからんことの一事なり。凡そ人間社會に事を爲すものは必ず何か目的とする所ありて、其目的を達せんが爲めに勞働するの常なれども、世間往々目的を達する爲めの手段と、目的其ものを混同し、手段のみに勞して、肝心の目的をば輕

々看過する者なきに非ず、大間違の沙汰にこそあれ。抑も人生に體育の必要なるは何故なるかと尋るに、身體を練磨して、無病壯健ならしむれば、隨て精神も亦活潑爽快なる可きは自然の法則にして、身心ともに健全なる者は、能く社會萬般の難きを冒して、獨立の生活を爲すことを得るの利あるが爲めのみ、即ち體育は人をして不羈獨立の生活を得せしむるの手段なればこそ、之を忽にす可らざることなり。然るに今日世間の體育熱心家を見るに、大概皆身躰發育の一事を以て、人生の大目的なりと心得、苟も腕力拔群の稱を得れば、則ち能事終れりと爲すの情なきに非ず。例へば彼の富家の子弟などが、他事を打忘れて遊獵騎馬舟漕等の諸戲に熟するが如き、是れに由て以て身心の健康を全ふし、獨立獨行の生活を爲さんなどの深意あるに非ず、其目的とする所は、唯自分の面白き遊戲に技倆を現はして、以て一時の快樂を得るに在るのみ、即ち體

育は單に立身の一手段たるに過ぎざるの事實を忘れ、之を以て人生の目的なりと誤認したるものにして、全く目的と手段とを混同せるものと云はざるを得ず。蓋し體育論者にして、若しも單に身體の發育のみを重んじ、世間に腕力家の多からんことを以て、唯一の目的と爲すものならんには、故らに文弱の書生輩に勸めて、不得手なる力業を爲さしめんよりは、寧ろ平素より其業に慣れたる下等社會の人足車夫、若しくは力士の輩を集めて、腕力を發育せしむるの便なるに如かず。元來書生に腕力の不用なるは、恰も力士に學問の用なきと一般なれども、唯如何にせん、學理上肉體と精神との間に密接なる關係ありて、身體を健かにせざれば、智識を進むること能はざるを以て、已むを得ず、學校に體育の設もあることとなり。然るに書生の輩が體育を口實として、漫に遊蕩に耽り、學業を怠り、剩さへ肉體の强壯なるに任せて、有りとあらゆる不養生を行ひ、不品行を働き、獨り得々たるが如きに至ては、實に言語同斷の次第と云はざるを得ず。人若し是等の書生に向ひ、君等が運動して身體を强壯にするも、何等の利益なし、偶ま日々の食量を增して不經濟の種となるに過ぎずと云ふも、彼等は之に對して聊か答辭に窮することなる可し。我輩は素より體育を嫌ふに非ず、熱心に之を主張するものなれども、近來世間の論者の中に、往々其目的を誤解する者少なからざるを見て、一言以て反省を促すのみ。

心養

人世に體を養ふの要あると均しく、亦心を養ふの要あり、體を養ふに食物を用ふるは、凡そ生物の皆然る所なれども、人類ほど其食物の種類多きはなし、獅虎は生肉の喰ふべきを知りて、亦その他を知らず、牛馬は野

草の喰ふべきを知りて、亦その他を知らず、禽獸蟲魚もの〳〵其食とする所は僅に一二に止まると雖も、特り人間に至ては、鹽噌肉菜種々雜多にして、酸辛甘苦殆んど擇む所なければ、食物の種類多きと、高等動物の特徴にして、人の人たる所以の一に數ふるも亦敢て不可なきが如し。人の躰を養ふに、斯くも多數の食物を要すとせば、心を養ふにも亦多樣の趣向を要することならん。蓋し他の動物の心を察するに、其食物の種類少なきが如く、其心事も亦狹少なれば、人は多樣の食物を喰ふが如く、其心事も亦多樣にこそある可きに、若しも或る一方に偏して、他を顧るの餘地なしとすれば、是れ既に靈活を欠げるなり、至高なる人類の食を食として、下等動物の心を心となすに近し、體を養ふの法は則ち之を得たりと雖も、心を養ふの法は猶ほ甚だ遠しと云ふて可ならん歟。又體を養ふに運動を要するの生理あれば、心を養ふにも其運動を要するの心理あらん、坐して動かざれば、足に痺を生ずるが如く、凝て解けざれば、心に迷を起す。坐するは敢て不可なけれども、足に痺を生ずるは攝生の旨にあらず、凝るも或は可ならんなれども、心に迷を起すは既に保心の義に反せり。痺れざるは、動かせばなり、之を體養と云ひ、迷はざるは、解けばなり、之を心樣と云ふ。左れば體養は靜運宜しきを得るにあり、心養は變通を妨げざるに在り、共に人生に欠ぐ可らざるの須要にして、心身の運動と稱するもの、即ち是れならん。扨その心を養ふの趣向と云ひ、將た心の運動と云ふは、如何なる事ぞと尋ぬるに、他なし、身に種々の藝を蓄へて、時々その藝に遊ぶにあるのみ。農工商より政事、法律、詩歌、碁將棋に至るまで、人事一切都て是れ藝に非ざるはなし。一人にして其多岐に渉るの能ある者は、多藝の人と稱せられ、否らざる者は無藝の人と評せらる。多藝の人は能く移るが故に、心常に凝滯せず、無藝の人は移ること能はざ

るが故に、心常に偏僻す。碁打が碁に凝りて親の死に遇はず、詩人が詩に耽りて、人事を忘却するが如きは、極端の事例なれども、世には無藝にして、唯一筋の外に出でざるが爲め、或は判斷を誤る者、或は幸福を失ふ者、その種類甚だ多し。畢竟その一筋に拘泥するは、初めより多藝に習はず、習はざるが故に、眞味を解せず、解せざるが故に顧みざるの過ちにして、若しも彼に是に思ひを百方に馳するの能あらば、心に癖を生ぜずして、行路に澁滯なかるべきのみならず、種々の樂を樂んで、品位はます〳〵高かるべし。今これを身體に喩へんに、樂みの一事にても、目に見るあり、耳に聞くあり、口に味ふあり、鼻に嗅ぐあり、盲者は目の樂みなき者、聾者は耳の樂みなき者、啻に樂みなきのみか、之を稱して不具と云ふに非ずや。心の藝に於けるは猶ほ耳目鼻口の樂みに於けるが如き歟、其一藝に偏する者は、目あれども耳鼻口なき者と同じく、恰も心の不具たるを免れず、不具を形體に咎めて、之を精神に問はざるは、彼の食物を人にして心を他の動物にするものゝみ、心養の法は多藝なるに在り。

英國の學風

米國は新建國にして、人々商工殖産に忙はしきが故に、學問一切新奇實用、學び得て孰れも有益なれども、多くは日常淺薄にして、奥ゆかしき品格を具へざるものゝ如し。獨逸は學問深奥にして、學者は創造力に富み、教育の仕組も行き屆きて、此一點は完全なれども、元來尚武の國にして、武事の名譽を欠がざれば、酒を飲み、色に耽り、俗に所謂不品行を働くも、世間之を問はざるの風あるが故に、堅忍不屈の獨逸人は、溺れて又自から浮むの勇あらんかなれども、無特操なる他國の書生は、其品行の頽落のみを習ひ得て、或は身を誤るの恐なきに非ず。佛國は繪畫彫刻を始め、

美術一切の道に達して、兼ねて萬般の學事に長じ、字書類典等、各種の書籍は細大悉く完備して、事物を調査する等に便利なれども、社會交際の派出やかにして、繁華に誇る國柄なれば、周圍の聲色學生を蠱して、其窮學の腰を折らしむるなどの趣もあり。英國は本來保守主義にして、學問も餘り新らしきを競はず、羅甸、希臘の古典を始め、古風の科目も多くして、教育上の工風に富まざれども、社會の風儀は嚴正にして、書生の行狀を檢束し、學校講堂の間に於ても、尙ほ奥ゆかしき氣風あるものゝ如し。歐米各國の學風は各々短長あるが故に、學に志す人々は、撰んで其長を學ぶの外なかる可しと雖も、はる〳〵子弟を海外に送りて、學問修業を爲さしむる者は、豫め其學風の方向を察し、又當人の所望に應じて、遊學の國柄を撰ばざる可らず。今歐米諸國に就き、一々其學風を記述するは、容易の事に非ざるが故に、爰に先づ英國學風の一斑を記して、世人の參考に供せんと欲するなり。

學生高尙の氣風を養ひ學問活用の世才を長ぜんとするには、オクスフォルド、ケンブリッヂ諸大學を始め、英國各學校各學院の本色にして、學科は餘り深奥ならず、我東京大學などを卒業して、英國大學に遊ぶ者は、學科の割合に卑近なるが爲め、何の苦もなく、試驗を終りて、每度案外する程にして、英國大學と云へば、科目も極めて高尙なる可しと思ひの外、我日本の大學校にも及ばざるは如何と、之を其向きの教授に問へば、教授は即ち之れに答へて、凡そ我英國の學校は、學問のみを教ゆるの場所に非ず、學問は學校外に出でゝ生力のあらん限り、何時までも研究することを得れども、學校内には一種高尙の氣風あり、成德達才、社會に出でゝ人事萬端の務に當らんとする者は、時に及んで此氣風の薰陶を受くると肝要にして、學生才學の所長に應じ、各自專問の學藝を授くると同時

に、禮儀作法社會交際處世の大要を示し得て、一徹なる論客に流れず、飄々たる仙人に失せず、純正の行、溫順の德、所謂英國紳士を養成するは、我が英國諸學校の眼目にして、學科の高下など云へる一端を以て、我が學校を輕重するは、學問の眞味を解せざるものなり云々とて、每度其學風を說明するとありと云ふ、如何さま英國大學內の慣行を視察すれば、其邊に思ひ當るものも少なからず。例へば學校食堂にて、時々晩餐會を催ほするとあり、食堂は至て壯麗にして、上段には敎授其他長老の客を延き、下段は學生席にして、其堂內の四壁を見れば、古今同學より出身して、學者となり、僧侶となり、或は又政治家と爲りて、其名を天下に轟かし、兼ねて學校の榮譽をも加へたるやうの人物、即ちオクスフォルドのクライスト、チャーチ大學などにて申せば、カーヂナル、リシュリウ、ロック、グラッドストンなど云へる人々の大油畫を揭げ、銘々時々此堂に入りて古今賢豪と相對せば、何人にても自然憤勵の氣を生ずるのみならず、食堂の會食は、先づ其禮儀を正して、他日交際社會に入りても、聊か不都合なきを期し、食前食後の交際談話は、自から處世の一端にして、人生缺く可らざるの下稽古なるべく、一夕の集會知らず識らず學生の氣風を養ひ、他年出世の地を爲すと甚だ多きものゝ如し。蓋し此等の學風は、大學校內に限るに非ず、彼の倫敦法學院（バリストルを養成する場所なり）の如き、學生は時々長老の講義を聽聞する位にして、平常定まりたる課業もなく、唯三箇年間每月定例の晩餐會に出席して、三箇年目に簡單なる試驗を通過すれば、直にバリストルたるとを得る筈にして、學問の方より云ふときは、バリストルなりとて左まで價値あるに非ざれども、其價値とも申す可きは三箇年間晩餐を與するの一事に在るなり。多くの先輩代言人諸氏と卓を同うして談ずれば、代言社會の情實も知れ、訴訟實

地の取扱振りも分りて、學問上は兎も角も、代言業務の智識を得るには、學校講堂にて教授するよりも、定時晩餐會にて雜談する方、却て捷徑なりとの意味もある可し。學校も學院も食事を重んじ、何に附けても食ひ意地の强きは、是れぞ世に英國人の食ひ倒れと稱する所以ならんかなれども、食事中にも亦自ら無限の意味あり、恰も之を媒介として、學生諸氏に世態人情を知らしむるの便利を與へ、學業成りて人事に通ぜず、畢生迂儒たるの譏を免かれしめんとするは、英長老の用心にして、英國紳士が到る處に行儀を正して、品位の何となく奥ゆかしきは、蓋し學校内の氣風より來りたるものなるべく、學校は學者を造るに非ず、英國紳士を造るなり云々の一義は、英國教育家の夙に注意する所にして、我輩は毎度此一義を贊成すると同時に、實地之を履行せんと敢て自から希望する所のものなり。

英國學校は重に紳士養成を期するが故に、學生も亦之れに化して、居常紳士らしく身を處するは、事實誠に然るものゝ如し。今日本にて學生と云へば、蓬髪粗衣して人前に出で、言語必ずしも修めず、行狀或は粗野なるとあるも、其學生たるの故を以て、人皆な之を容赦するの習なれども、英國の學生は之に異なり、學生なりとて身成りを崩さず、衣紋髪飾尋常に修めて、言語應對作法に違はず、時に交際宴會に招かれ、紳士淑女と交るときは、儀式通りの服裝を飾りて、毫も其禮節を略せず、世間通用の交際禮儀は、學生なりとて人之を假さず、又假さんとするの念もなく、學生中に在りながら常に紳士の品格を保つは、英國少年の特色なりと云ふ可し。又特に感服す可きは、學生氣質の率直にして、其眞面目を蔽はざるの一事なり。今クンブリッヂ、オクスフォルド等に至りて、其學生を訪問し、文學宗教の閑談より、漸く時事に論及する等の事あれば、學生は滿腔

の熱心を吐露して、毫も憚る所なく、思ひ込んだる議論の筋を、眞一文字に突き張りて、淡泊に所思を陳ずれども、磊々落々の漫言を語らず、心にもなき大言を吐かず、才氣を恃んで人を凌かず、諧謔を以て人を愚にせず、坐して言ふべく、起て行ふ可き實着主義を、心の底より固信して、一毫も讓らず、一毫も、假さず、一心正直にして虛飾なきを見るべし、即ち英國人民一般の家風、特に學校書生の氣風にして、愛す可く又敬す可きものなり。扨て又大學校などに遊ぶ者には何侯何伯の嫡子令孫、若しくは素封金穴の子弟由緒ある人々も多ぎか故に、遊惰自から勉むることを知らず、金を散ずること、土芥の如く、一學期中に一二千圓の卷烟草料を費したりなど云へる奢談も多けれども、斯る金滿家の子弟連は、自から其向きの伴侶を求めて、或は飲酒組と爲り、或は端舟組と爲り、學餘の遊興樣々にして、他の勉强派は之れに與せず、然かも學校講堂中には才學優等の人々が、獨り尊重せらるゝの風にして、ビーコンスフヒールド伯の小說に、英國の學校中にて、才學上級に在るものは人に尊重せらるゝこと甚だしく、政治政界の大臣と雖ども、決して羨むに足らずとあるも、亦此邊の趣意なる可し。且つ英國の慣行として、ケンブリッチと云ひ、オクスフォルドと云ひ、學問地は一方に獨立するが故に、學生品行の取締は、殘る隈なく行き屆き、佛國巴里の諸大學が、繁華なる市中に散在して、書生は銘々旅宿に寄寓し、酒樓絲竹の間に在ると、其趣同年の談に非ず。蓋し學問地が獨立すれば、周圍の事情も勉學に適して、郊外風景の閑雅なるは、以て其心情を慰む可く、書籍館の富贍なる、博物美術古器物館の完全なるは、以て其見聞を廣む可く、街頭の銅石像館內の寫眞畫は、仰で以て其志氣を勵ますべく、古賢哲を尙友として、今學者を伴侶とし、朝々暮々の所思所見、總て學問一方にして、心亦自ら之れに傾くの趣向あるは、英國學問

地の効用にして、其一方に獨立するの故を以て、生徒の行狀を監視する、の便利も多く、例へばオクスフォルド學校地の如き、學校幹事の一部分は、時々土地内を巡行して、其生徒の行狀を視察し、學校の服制に從はざる者、若くは酒を被る者、途上婦人と談話する者、凡そ此邊の箇條に觸るゝ者は、夫れ夫れ召喚して理由を詰り、校則を以て夫れ〳〵處分するの習にして、學生の品行を撿束すること頗る嚴密なりと云ふ可し。扨て又各校在學の書生は、固より千差萬別なれども、左まで扳群の者もなく、偶々日本の學生などが途中に同級に加はれば、忽ち之を壓倒して、雞群中の孤鶴たること毎度見聞する所なれども、英國書生の氣風として、學校のみを學校とせず、學業成りて學校を出づれば、廣き社會を學校として、氣根强く、其學路を進行するが故に、學校中にて毎度眼下に見下したる書生も、多年偶々相見ることあれば、復た吳下の舊阿蒙に非ず、彼れ如何にして

此に至るや、不審にも又面目なしとて、自から慚殺することもありと云ふ。今英國人の學風を見るに、學校を出でゝ相替らず學に進んで止まざると同時に、學校に入る其前にも、亦其教育を忘れざるものゝ如く、例へば中以上の家族にて、年頃四五歲の子女あれば、爲めにガバルチス則ち保母を迎ふるを例とし、保母は相應の學識を具へ、身分品格卑しからず、子女をして萬端其命に從はしむることを期するが故に、子女の父母一家族は、恰も之を朋友視して、食膳待遇家居一切主人夫婦に異ならず、斯くて子女を保母に托して、幼少より之れに母事せしめ、家内に生母と教母とを生じて、恩愛と教導とを兼ね、併せ、其學に就くの前、子女の心性發生し來りて、事物に疑問を生ずるの際、教母の化導を受けしむるの趣向にして、我國の慣行、稚兒を無學無識なる子守女に托するものと、教化上雲泥の差ありと云ふ可きなり。之を要するに、英國は由來久しき國にして、門

地門閥嚴めしく、上品なる家族に富むが故に其の學校教育の如きも、良家の子弟を薫陶して、英國紳士を造らんとするに在るものゝ如く、我が海外遊學者なども、各々其向きの學風を合點し、父兄の所存、當人の所望先づ其期する所を定めて、徐に其學問國を撰むと甚だ肝要なる可きなり。

修業立志編終

明治三十一年四月十三日印刷
同　年四月十六日發行

正價金貳拾六錢

編纂者　私立　慶應義塾　芝區三田二丁目二番地
發行者　時事新報社　京橋區南鍋町二丁目十二番地
右代表者　吉田東洋　芝區三田四國町二番地十七號
印刷者　高田乙三　京橋區西紺屋町廿六七番地
發行所　時事新報社　京橋區南鍋町二丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍　京橋區西紺屋町二十六七番地

版權所有

福澤全集

福澤先生最近の肖像（緒巧なる寫眞版）

全五册

菊版洋裝表紙總クロース金字入美本

總紙數凡四千五百頁

正價金拾貳圓遞送料は別に申受くべし

本書は福澤先生四十年來の著譯書を蒐集刊行するものにして集中收むる所部數五十、冊數百五萬部、七百四十九萬冊に達し實に從前發行の總數は多寡平均して三百五十來を知らんとするものは必らず一部を坐右に備へざるべからず

第五卷に挿入

未曾有の大著譯なり其所論の現時の事情に適切なるもの多きは勿論新日本文明の淵源由

本書總目錄

一 緒言
二 英語通
三 啓蒙手習之文
四 學問之すゝメ
五 童蒙教草
六 改暦
七 たわ娘辨
八 帳合之法
九 一文字教
一〇 第二文字教
一一 第三文字教
一二 文會議附錄
一三 窮理圖解
一四 西洋事情（初編）
一五 同外編
一六 雷銃操法
一七 西洋旅案內
一八 條約十ケ國記
一九 洋衣食住
二〇 掌中萬國一覽
二一 清英交際始末談
二二 英國議事院
二三 世界國盡
二四 民間經濟論
二五 學者權
二六 安心論
二七 福澤文集
二八 同編
二九 學問の獨立
三〇 兵論
三一 通俗國權論
三二 同後編
三三 通俗民權論
三四 時事小言
三五 時事新論
三六 帝室論
三七 德育如何
三八 兵論
三九 學問の獨立
四〇 全國徵兵論
四一 通俗外交論
四二 日本婦人論
四三 同後編
四四 品行論
四五 士人處世論
四六 男女交際論
四七 男子論
四八 日本尊王論
四九 國會難の由來
五〇 國會の前途
五一 治安小言
五二 地租論
五三 實業論

發行所 東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地（電話四九二）

大賣捌 大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷（電編輯用本局一四九）（事務用本局三二七）

時事新報社

同出張所

福澤全集緒言

全一冊紙數百卅頁
正價 貳十錢
郵稅 貳錢

本書は今度福澤全集を刊行するに付き福澤先生が新に筆を採りて起草したるものに係り先生が壯年以來苦心經營幾多の著譯を爲したる其著譯書の由來及び當時の時勢事情等を說明したるものにして趣味津々讀んで倦むを知らず名は福澤全集の緒言なりと雖も實は新日本文明の活歷史なり讀者の便利を圖りて特に一冊子となして發行す

福澤先生浮世談

第三版
正價 五錢
郵稅 二錢

本書は福澤先生が此程某氏と四方八方の談話中浮世の男女交際法即ち男子の不行狀、婦人の無勢力よりして遂に家道を紊亂するに至る次第を痛論せしを其席上社員の速記したるものにして一家の和氣春の如きを望むもの は男女を問はず必らず一讀すべし

發行所 東京京橋區南鍋町二丁目十一番地（電話 編輯用本局一四九 事務用本局三二七）
大賣捌 大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷（電話 四九二）
●全國各地時事新報賣捌所及書林にあり

時事新報社
同出張所

八版

福翁百話

全一冊紙數凡四百頁
正價 上製壹圓（郵稅拾錢）
並製三拾五錢（郵稅六錢）

上製（用紙舶來上等紙 背皮金字入美本）福澤先生肖像（卅五年前と最近の分）二葉入
上製並製とも福澤先生自筆題詩（竪一尺三寸 横六寸）寫眞石版入

本書は福澤先生が多年心を籠めし著述にして宇宙の妙理より居家處世の心得に至るまで說去り說來りて餘蘊なく文章は先生獨得の平易明快一讀再讀多々益す妙味を覺ゆ初版以來既に拾餘萬部を賣盡し今回第八版を發行す何人も必ず一讀すべき良書なり

發行所 東京京橋區南鍋町二丁目十一番地（電話 編輯用本局一四九 事務用本局三二七）
大賣捌 大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷（電話 四九二）
●全國各地時事新報賣捌所及書林にあり

時事新報社
同出張所

時事新報

日本一の時事新報

時事新報

本社

東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地
（電話）編輯用本局一四九番　事務用本局三二七番

新報見本は御申越次第進呈す

時事新報は世界最新東洋無類の完成輪轉大器械を以て印刷する毎號十二面乃至十六面の日本一の大新聞紙なり

の議論は適實公平にして着眼高く、雜報は百事を網羅して一方に偏せず精確迅速なると世既に定評あり

の株式、米穀、生絲　製茶を始め一般商況物價に關する報道の機敏確實なるは商業專門の新聞も及ぶ所にあらず

定價（前金）
一箇月　五十錢
三箇月　壹圓四十五錢
六箇月　貳圓八十五錢
郵送の分
郵稅一箇月十三錢

時事新報には倫敦ロイテル特電あり世界の大事を速報す其他各地の電報林の如く內外の通信山を成し四方の事情一目の下に明なり

時事新報には奇警なる小說あり優美なる繪畫あり又世間日々の珍事を漏さず婦人小兒にも分り易く面白きと限りなし

時事新報は發行紙數最も多く且社會に信用勢力あるを以て其紙面に掲載せる廣告の有効なること全國新聞中肩を比ぶるものなし

出張所

大阪市北區堂島濱通一、四十番地（電話）四九三番
横濱市相生町六丁目九十五番地（電話）四三三番

全國各地に賣捌店あり